



## 小説 働く女性たち

---

1 億総活躍社会というが、  
間違った男女同権もある

---

音川伊奈利

---

この小説のお問い合わせは [kyotoinari@yahoo.ne.jp](mailto:kyotoinari@yahoo.ne.jp)

音川伊奈利の掲示板へ <https://9209.teacup.com/8012/bbs>

## 駆け込み居酒屋ポン吉...「マネキンに恋する男」...働く女性たち 54話

駆け込み居酒屋ポン吉も開店7周年を迎えていた。マスターの音吉も70才になり店の7周年記念と音吉の誕生会を兼ねてのパーティーをこの店のママ幸子が企画していた。この7年間に店で知り合い結婚したカップルも6組もあった、次のラッキー7のカップルとしての大本命とされていた勇二と小夜子がいる。

この2人ともJR西大路駅前に本社があるランジェリーメーカーの「フラワー」の社員でこの店で知り合った開店第1号でもあった。しかし、この美男美女のカップルだが、いつまで経っても結婚の話はなかった。その小夜子が今夜もカウンターを挟んでママの幸子となにやら話をしている。

ママの幸子は、

「あんたら2人とも今年で30才になるのでないの？、まだ勇二さんからのプロポーズはないの？」

「ママ…聞いてよ、そのプロポーズは勇二さんではなく私がもう何回も結婚してよと迫っているのよ」

「で…勇二さんの返事は？」

「それが～まだ踏ん切りが付かないといつもはぐらかされているのよ」

「な、なんで…2人とも健康なのに？で…あっちの方は？」

「それは…デートの度に誘ってきます。最近では私の部屋で泊まることが多いの」

幸子の経験では男が結婚をしたくない理由としてセックスに自信がない。彼女には言えない変態的な性癖があると思っていた。幸子はさらに、

「勇二さん、あっちの方は正常なの？、例えばゲイとか？、女装とか？」

「それはないと思います。私を優しく愛してくれて私も満足しています」

「あらら…さっき、Hは小夜子さんの部屋でと言っていたけど～勇二さんの部屋では？」

「それが～住んでいるのがフラワーの社宅で勇二さんはその社宅の責任者でもあるので社宅には女性を連れ込めないというので私はまだ勇二さんの部屋には一度も行ったことはありません」

フラワーの社宅は本社からほん近くにあり4階建てで2Kの部屋が24室ある。全員独身の男性が入居しているが、ここは民間のマンションを会社が借り上げているために管理人も居なくて自由に出入りできることを幸子は知っていた。そこで幸子は、

「レレレ…それはおかしいよ？、私もお客様が病気だとか、出張のためにベランダの花に水をやってほしいと頼まれて行ったことがあります。それにこの店で知り合った女性も部屋に行っているのよ、小夜子」

「そうなの～勇二さん、私にも見せられない何かの秘密があるのかも…」

こうなるといつもと同じでマスターの音吉の出番になる。音吉は店に1人で来た勇二を捕まえて店の地下にあるスナック「タンポポ」に誘った、そして勇二に、

「勇二さん、小夜子さんとの結婚できない何かの深刻な理由があるのですか？」

「マ、マスター、えらい直球できますネ。別に何もありません」

「しかし、社内でも美男美女でも有名なカップルが結婚もしない、しかも、女の小夜子さんから何回もプロポーズしているのに、それを拒否するというのは何かの秘密の理由があるのですよね」

「小夜子さんに言えない秘密ですか～あるといえばありますが、それは変態趣味ではありません」

勇二は福井県福井市の出身で京都の私立大学を卒業してフラワーに就職していた。フラワーといえばランジェリーメーカーになるが、勇二はこのセクシーなランジェリーに興味があったのでフラワーを選んだと酒の酔いがそうさせたのか音吉の誘導尋問にあっさり答えている。

さらに勇二は、

「最初は自分の趣味はセクシーなランジェリーだと思っていましたが、やがて、自分に興味があるのはそのランジェリーを着ているマネキンが好きだ気がついたので。それから海外出張のフランスのパリのデパートで見つけたマネキンに惚れてしまい60数万円のマネキンを個人輸入したのです」

音吉は、

「ほう、マネキンですか？、あれはいい、勇二さん、実は私もマネキンフェチでスーパーやデパートのマネキンを盗撮しています」

というなり音吉のスマホの「マネキンフェチ・掲示板」を勇二に見せた。勇二はそれを見ながら、

「へえ～マスターもなかなかいい趣味をお持ちで～この掲示板に私の大切なコレクションのマネキン写真を投稿してもいいですか？」

「それは、それは同好の士を募集しています、で、小夜子さんと結婚できない理由はこの性癖ですか？」

「いや、いや、これはラブドールのような性癖ではなく単なる趣味ですが、海外から輸入したのが3体、日本で買ったのを合わせると10体もあるのです。そのマネキンたちと別れるのが辛くて…それにこんな趣味を小夜子さんにはとても打ち明けられません」

「10体もあるのですか～勇二さんはこのマネキンとは絶対に別れたくないのか～」

これらのことを勇二から聞き出してそれを幸子に報告して音吉の仕事は終わったことになり、後は幸子の出番になったが、幸子もこれをそのまま小夜子にいうというのでは「駆け込み居酒屋ポン吉」のママとしての権威に関わると頭を悩ましていた。

幸子は小夜子が1人で店に来るチャンスを待っていた。その夜、勇二が東京へ出張したということから小夜子が店に来た。幸子は小夜子に音吉の趣味でもある「マネキン・掲示板」のスマホを見せようとしている。

「あの～マスターの変態のブログがあるけど小夜子見る？」

「へえ～マスターって変態なの？、そら～見たいですママ」

「でもね…マスターは変態だと思ったら怒るの、これは芸術的な趣味だといつもいっているのよ…小夜子さんはどう思います」

小夜子はその掲示板の10枚の写真を見てから、

「この1枚目から3枚目までは有名なフランスの作家のマネキンで日本に輸入されているのはほんの数体です。それに4枚目から10枚目は京都の「吉忠マネキン」「七彩マネキン」のヒット作品です」

「へえ～小夜子～マネキンに詳しいの？」

「ママ、私はデザイナーよ！、スタッフの倍ほどのマネキンに囲まれて毎日仕事をしています」

「ほう～意外な展開になってきた…」

「私もこんな素敵なマネキンがほしいな～」

「えええ～なんで～」

「実はネ、ママ、私はもう勇二さんとの結婚を諦めてデザイナーとして独立の事務所を開設するの、それには最低でも5体のマネキンが必要なのですが…私が気に入ったマネキンはどれも高く…」

幸子はまたまた意外な展開に目を白黒させながら、

「その写真の10体のマネキンは画像だけでなく実際にコレクションされているのよ」

「へえ～マスターって最高のセンスがあるのですネ、一度拝見させて下さい」

「いやいや、音吉どんではなく…その投稿者の名前を見て」

「勇二、勇二ってあるよ～ママ」

「そう、あの勇二さんなのよ～小夜子」

「ま、まさか～なんで～私に教えてくれなかったの？」

「それね～色々マスターが調べてくれたのよ～」

こうして幸子は小夜子にこのことの一部始終を報告していた。もちろんこの夜のうちに勇二の

秘密が暴かれたことを幸子は勇二に報告していた。その雄二はそれに観念したのか東京からの電話だが小夜子に正式にプロポーズをしていた。小夜子は、

「はい、ありがたく喜んでお受け致します。結婚生活は2人と10体のマネキンですから最初から賑やかになりますね～勇二さん」

「小夜子、いや小夜子さん、本当にありがとう」

★…こうしてめでたく小夜子さんと勇二さんの婚約が店の掲示板やLINEで発表されていた。ちなみに本文中の「マネキンフェチ・掲示板」は下記になります。画像は梅小路公園の蒸気機関車の車輪、後部の建物は旧国鉄二条駅を移築したものと、音川伊奈利

[「マネキンフェチの掲示板」同好の士は投稿をお願いします。](#)

<https://9209.teacup.com/8012/bbs>







妖怪マネキン 2話...「妖子のベビー誕生 妖姫」...働く女性たち 53話

イオン稲荷店に派遣されているマネキンの妖子は同じ職場の男性マネキンと恋に落ちて妊娠をしていた。最初は「想像妊娠」だと思われていたが、同じマネキン仲間の祝福と歓声、それに妖怪力で本当の妊娠になっていた。マタニティー用品売り場で妊婦服を着せられ立っていたこのセールの最終の夜には暗い倉庫でまた保管されていた。そしてその夜に妖子は産気づき丸々と太った元気な女の赤ちゃんを無事に産んでいた。

この女の子の名前は「妖姫」（ヨウヒー）と名付けられてスクスクと育っていた。人間社会では「蛙の子は蛙」というが、マネキン社会では「マネキンの子はマネキン」になる。この妖姫もベビー用品売り場で毎日仕事をしていたが、この妖姫が着ているベビー服や妖姫が座っているベビーバギーが飛ぶように売れてイオンの定員はこの妖姫を「神童マネキン 妖姫様」と呼ぶようになっていた。

この現象はベビー用品の売り場だけではなく、婦人服、紳士服など2階の直営売り場とテナントの専門店まで波及していた。さらに客が多く集まると1階の食料品売り場まで前年同月比10%増しという全国のイオンの中でもダントツのトップとなっていた。この稲荷店の店長は山下純子という50歳の女性になるが、この山下店長はなぜか妖姫が嫌いだった。それはこの稲荷店の副店長をはじめ社員、パートのすべてが、この売り上げ増は妖姫のおかげだと信じて店長の企画や商才など評価しなかったからだ。つまり、女が幹部になって一番嫌われるヒステリーという悪い病気にかかっていたのです。

ある日、山下店長は副店長の吉川一郎に、  
「あのベビー用品売場の妖姫というマネキンを処分してください」  
「て、店長…妖姫さまを処分…気は確かですか…店長」  
「あのマネキンにはマネキンメーカーの製造番号も派遣元の会社も不明です。つまり、あのマネキンは誰かが勝手に持ち込んだものになります」  
「それはそうですが…あのマネキンは稲荷店の売り上げ増しに大いに貢献してくれました」  
「もう…副店長までそんなことを信じているのですか！すぐに処分しなさい」

副店長はやむなく店の裏側にある「産業廃棄物」の鉄の箱に妖姫を丁寧に置いてから手を合わせていた。これを知った妖姫の母親の妖子、父親の拓也はもちろん、このイオンのすべてのマネキン仲間も店長の非道に対して涙で抗議したが店長にはそれは届かなかった。

そのころからこの稲荷店では変な噂が流れていた。それは女性客がトイレに入り水を流すとその音が「赤ちゃんの泣き声」に聞こえるというものでした。店内のマネキンの前を通ると誰かが

すすり泣いているという噂もあった。2階の売り場には専門店のマネキンも含めると約100体はあるが、どれも笑顔が消えて泣き顔になっていた。これらで稲荷店の客は目に見えるほど激減していた。

そしてこの現象は山下店長がマネキンの妖姫を処分したというのが理由だと誰もが噂するようになっていた。このことはイオン関西本部の本部長の耳に入り、山下店長は大阪の本部に呼び出されていた。本部長は山下女史に、

「先月も先々月も前年同期の売り上げよりも20%も下げているが理由は何か？」

「それはこの連日の猛暑で客足が遠のいたからです、少し涼しくなるとまた盛り返す自信はあります」

と、こんな調子でマネキンの妖姫を処分したことを報告しないために本部長は山下店長を降格したが、なにせこの女はプライドが高くてそのまま退職してしまった。そして稲荷店の店長には副店長の吉川が抜擢されていた。店長になった吉川は早速、産業廃棄物業者に電話をして妖姫のことを話すとその業者は、

「いや～あんまり可愛いマネキンだったので、わが社の応接室に大事に飾ってあります。このお陰かはわからないが、わが社の業績がうなぎ登りにアップして喜んでいます」

吉川は早速新副店長と共に妖姫ちゃんを迎えに行きました。そしてその妖姫ちゃんを母親の妖子さんに抱かせると妖子の目から人間の涙があふれ流れていた。

早速、このことは店内の放送で流されていた、

「只今、ベビー用品売り場のマネキン、妖姫ちゃんが行方不明になっていましたが、妖姫ちゃんが無事に帰ってきました。お客様はじめ、社員、スタッフの皆様には大変ご心配おかけしたことを心からお詫びいたします」

この放送の後には吉川店長が妖姫が稲荷店の所属を示す「イオン稲荷店備品・マネキン 妖姫・第1号」というシールを妖姫の背中に貼っていた。

★…この小説は前回のその1「妖怪マネキン 妖子」を読んでいただいた「よしこさん」のコメントで「ベビー」というヒントをもらい書いたものです。さくらさんありがとうございました。





1枚の写真から小説を書く・働く女性たち...「妖怪マネキン 妖子」...働く女性たち 5 2話

あるスーパーの通路で私の前を横切った幼稚園児ぐらいの男の子が、下着売り場のセクシーな下着を着けたマネキンのパンツをスルリと脱がしたのです。さらにこの男の子は背伸びしてブラジャーを下ろそうとしたが残念ながら手が届かなかった。

その瞬間に私はシャッターチャンスと撮ったのがこの画像になります。このマネキンさん、それから約30分はそのまま放置されてかなり恥ずかしそうにしていたが、私はパンツを履かしてあげる勇気はなかった。

★...その1枚の写真を見ながらなにか小説を書くことにした。その画像と小説がこれになります。

小説...「妖怪マネキン...妖子」...働く女性たち 5 2話

妖怪の種類の中に「もののけ」という妖怪がいる。このもののけの「物」とは人間以外の物で人間が長年使ってきた生活のための道具など人が直に接して30年以上使われた物になる。これらの古い物は土蔵や納屋に大事に保管されてこそ成仏するが、中には無残にも山や森に打ち捨てられた物が「もののけ」として人間社会に化けて出てくることもある。

これは物ではあるが、長年人間と接してきたために人間の心を宿ることになる。しかし、それは完全なものではなく姿かたちは茶釜でも手と脚があるもの、番傘の1本脚で目がひとつの妖怪が人を驚かせている。

マネキンも人に使われた物ではあるが、元々、姿形が人そのもので人間の心を宿るには3年もかからなかった。そのマネキンを多く使っている大手のスーパーマーケットに派遣された若い女性のマネキン「妖子」は今日も女性の下着売り場でセクシーな下着で笑顔を振りまいていた。

この下着売り場や水着売り場に派遣されるマネキンは若いはもちろん、美形で色白でスタイルは抜群でなければならないのでマネキン業界でもA級の誇りのある仕事になっていた。

妖子はマネキン工場からこのスーパーに引き取られて3年ほど経っていた。マネキンだから歩くことも目を閉じることも出来ないが、スーパーの社員や客などと接しているうちに自然に人の心を宿るようになっていた。

妖子の婦人服売り場の前方には通路を挟んで紳士服売り場があるが、そのメインのマネキンに「

拓也」というマネキンがいた。拓也は背が高くカジュアルものから高級スーツまでよく似合う拓也に恋をしていた。

その拓也との距離は10メートルほどで拓也の表情なども手に取るようにわかっていた。妖子のこの日の仕事は下着のバーゲンセールでこれもメインのマネキンとして明るい照明に照らされてスターの貫禄を見せている。

と、その時、幼稚園児ぐらいの男の子が親の目を盗んでツカツカと妖子に歩みより、セクシーなパンツをスリと脱がしてしまった。妖子は心の中で、「おいおい、なにすんねん…恥ずかしいやんか…」と赤面していたが、それは顔には出せなかった。それを見ていた拓也も目を伏せて見ないようにしたがこれも無理になる。

妖子にすればすぐにでも店員に発見されてパンツを履かせてもらえると信じていたが、妖子の前を通る店員は婦人服売り場の店員ではないので「見て見ない振り」をして通り過ぎていた。下半身スッポンのまま約30分ほど経ってようやくパンツを履かしてもらえた。

この婦人服、紳士服大バーゲンは本日が最終日になっている。そしてその夜には倉庫で保管されるが、これは男女別ではなく店員が適当に置いていた。妖子にすればこれが大チャンスで拓也の近くに置いてほしいと願っていたところ、これが偶然にも拓也と真向かいで妖子を抱くようにに置かれてそれは拓也の息を感じるほど近かった。

その暗い倉庫で拓也の方が先に声をかけてくれた。それはもちろん心の中の会話になる。  
「今日はお疲れさまでした…」  
「はい、拓也さんも…それにしても拓也さんは人気があります」  
「いや～そんなことはない、妖子さんの着ていた下着メーカーのフラワーがこのバーゲンの売り上げがトップだったと店員が話しをしていた」  
「あの～その～、今日は私の恥ずかし姿をお見せして…スイマセンでした」  
「…いや～あれには驚きました。でも、妖子さんの素敵なおところを見せていただいて私も胸がドキドキしました」  
「そんな～今でも恥ずかしくて赤面しています」  
「妖子さんのそんなところが大好きです」  
「わ、私も前から拓也さんをお慕いしていました」

こうして二人は抱き合いキスをして目出度く結ばれていたのです。も、もちろん、これはこの二人の心の中のことですが、それから3日3晩二人は倉庫の中で愛を確かめあっていたが、次のセールで拓也は紳士服売り場に、妖子はなぜか婦人服売り場から外されてマタニティー用品売

り場で妊婦ドレスを着せられて立っていました。そうです…この妖子さん、人間の心が宿り、人間と同じように「想像妊娠」してお腹が大きくなっていたのです。



★...黒人マネキン、キャサリンとベッキーの恋

この黒人モデルのキャサリンとベッキーは米国の首都ワシントンD.C.の工場で製造されていた。そして日本のイオンに売られていた、そして関西の店舗に貸し出されていたが、なぜか各店舗からの派遣の要請がなくこの2人は高槻の物流センターの倉庫で裸のまま放置されていた。

この黒人のマネキンは2体しかないので倉庫でも同じ場所に置かれていたのでキャサリンもベッキーも話し相手がいつも近くにいるので寂しくはなかった。そして初夏になってからこの2人を水着のマネキンとして使いたいと京都のイオン稲荷店から要請があった。

物流センターに出入りしている運送屋の運転手が出荷伝票を持ってキャサリンとベッキーを探していたが、これは伝票に「黒人2体・キャサリン、ベッキー」と書いてあったのですぐにわかったらしい。この運転手は若い男でなかなかのハンサムだった。キャサリンらにすればもし仕事の派遣先がパラパラだったらもう二度とこの日本では会えないという心配はあったが、その運転手はまずはキャサリンを先にトラックに乗せようと左手を背中にそして右手の手の指でキャサリンのビーナスの丘を撫ぜるように持ち上げた。

キャサリンはビックリして心の中で、  
「おいおい、そこは女の大事なところなのに...」

とは思っていたが、そもそもこのマネキンを運ぶときはこれがベストな方法だった。続いてベッキーも同じ方法で運ばれたが、この運転手の指の動きが微妙なのに気がついてた。それはそれで心地よい快感だったが、それ以上のことを望んでもマネキンの分際では叶わないと諦めていた。

やがてトラックは高槻を出発して京都に直行するのかと思っていたら、このトラックは荷物を積んだまま運送屋のガレージに一晩泊められて明日の早朝に配達されるということになった。トラックの荷物はそんなにはなくキャサリンとベッキーは荷台の一番前にベルトで固定されていた。そしてエンジンが止まって後ろの扉が開くとさっきの若い運転手が室内の灯りを点けてこの2体のマネキンを眺めている。キャサリンもベッキーもこの男には大事なところをもう触られているからなとなしに親しみが沸くのはこれまた人情になる。

この男はマネキンを固定していたベルトを外すとキャサリンとベッキーを等間隔に並べて立たせ



ている。2人とも腕は上に上げてたままのポーズだから胸も下半身も無防備のままになる。キャサリンは、

「えっ?、私はこの男に犯されるの?...まだ処女なのに...」

ベッキーは、

「ええええ...さっきの指の感触の続きをしてくれるの〜ラッキー」

と、思っていたが、少しの不安はあった。

この男は右手をベッキーのオッパイに左手はキャサリンのオッパイと平等に愛してくれている。やがてその手は背中からヒップへと下へ下がっていく、そしてビーナスの丘も優しく撫でてくれているが、なにせマネキンの身分では感じることも声を出すこともできないというジレンマがまた快感と変身してそれが脳天を突き破っていた。

そしてその男はスマホで2人の写真を撮ってくれた。そして2人はまたベルトで固定されて荷台の灯は消された。そしてあくる日の早朝にトラックのエンジンがかかりやがて目的のイオン稲荷店に着いた。そして男の手はまた2人のビーナスの丘を優しく抱いて指定の場所に置いて係から受領印を貰っていた。そしてこの2人に、

「聞けばなんでも明日から水着を着せられるそうだが、明日は俺...休みになるからその水着の写真を撮りにくるは...そう、午後になるから待っててネ...」

この男の一言でキャサリンとベッキーは大喜びしていた。そしてその朝になってこの黒人のマネキンは他の白人のマネキン10体とともに水着の催し会場に運ばれていた。会場の設営には水着メーカーの社員とイオンの社員らが忙しく働いていたが、まず先に白人らの水着が着せられたが、この黒人2人への水着がなかなか決まらずそのまま裸で放置されていた。

やがて店は開店していたが、もう昼になっても裸のままキャサリンは、

「なんぼマネキンだといっても裸で数時間も放置されるのは人権侵害になる。しかも、白人は店の開店前には水着を着せられているからこれは差別になる、このイオン稲荷店を本国の人権委員会に訴えてやる!」

ベッキーも、

「米国のワシントンD.C.でもこの黒人差別があるが、この黄色人種の日本でも差別があるとは...なにが、お・も・て・な・しの国なの?」

この2人は時間をかなり気にしていた。それは夕べの男が午後には写真を撮りにくるといっていたが、こんな裸では恥ずかしいからだ。そしてやっとキャサリンには花柄でフリルのついたビキニ、そしてベッキーにはピンクのビキニを着せられていた。と、同時に待っていた男が笑顔で現れた。



その男は、数枚もの写真を盗み撮りしていた。それはこれらの店内では許可のない写真撮影は禁止されていたからだ。そして、

「ほう、2人ともとても良く似あっている...そそ、タバトラックの中で撮った裸の写真は俺の宝物にする。そしてこの催しが終わったらまた俺が引き取りに来るから、そしてまたトラックの中でタベのように遊ぼう...それまで辛いけどガンバッテ働いて...」

この男の一言を聞いた2人は心の中で涙を流していた。さらにこの男は2人に、

「この催し会場の入り口のメインに2人は飾られているのでこの催しのシンボリックなマネキンになる。だから2人とも俺が迎えに来るまでは笑顔を絶対に忘れないように」

これを聞いた2人は、

「そうだったの...差別で放置ではなく私たちに一番似合う水着を探してくれていたのね...」

★...画像はそのイオン稲荷店で盗み撮りをしたキャサリンとベッキーのマネキン



キャサリン

ベッキー



この小説へのお問い合わせは、[kyotoinari@softbank.ne.jp](mailto:kyotoinari@softbank.ne.jp)

ご意見は、音川伊奈利の掲示板へ <http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?>

### 働く女性たち...駆け込み寺居酒屋ポン吉「サザンカの女 椿」...51話

音吉が朝の散歩をしている途中の西大路九条交差点のマンションに植えられているサザンカの花を写真に撮っていた。その時若くて綺麗な女性から、

「あの～これは椿ですか？」

「いえ、これは秋から冬にかけて咲くサザンカです、椿は冬から春に咲きます」

「そうでしたか～私の名前は椿なのにそんなことも知らないで恥ずかしいです...」

「ほう、椿さんとは素敵な名前だ!。これから出勤ですか？」

「はい、それも今日が最後で...」

「あらら、まだお若いのに寿退社ですか？」

「いえ、それならいいですが...色々あって...」

「もしなにか事情があるならお聞かせください、お役に立てるかはわかりませんが...私はこの先の、西大路駅近くで居酒屋をやっていますから帰りにでも寄ってください」

「はい、マスターさんですね、退社の時に時々お顔を拝見させていただいています」

その日の午後6時前には椿さんが店に来た。

音吉は若い女性の悩みはすべてママの幸子に丸投げをしていた。その幸子に椿は悩みを訴えていた。椿は色白で背も高く長い黒髪が似合う美人で一流製薬会社のOLだった。その椿は兵庫県の高校を卒業した後に京都の私立大学に入学したが、ホームシックからかすぐに同じ大学の学生の恋人ができていた。学生生活も派手になっていく一方で時給850円のコンビニのアルバイトからより高収入のスナックのホステスになっていた。大人の世界に首を突っ込んだ椿は恋人のたよりなさが目に付き彼とは別れていた。

そこまで話をした時にこの店の常連の武田が大きなクーラーボックスを持って現れた。この武田は釣りが好きで今日も釣りをして釣ってきたタチウオを自慢している。

「どや、ママ、このタチウオは105cmの大物で今日の釣り大会で優勝した」

「あらら、珍しいいつもは坊主ばかりなのに、しかし、この大きなタチウオは私もさばくのは初めてよ...」

その話を聞いていた椿は、

「ママさん、そのタチウオは父が良く釣ってきたので私がさばけます」

こうして椿はカウンターの中に入り手際よく料理していた。このお刺身を食べていたが、店に客

が立て込んできてママも音吉も椿の悩みを聞くチャンスがなかった。そこで音吉は武田に、  
「この椿さんの悩みを聞いてあげてほしい、カウンターでは不味いからテーブル席に移動しては...」

武田は65歳で製薬会社の営業をしていたが、定年後はその会社の関連会社の取締役として働いていた。妻とは離婚して今は一人で暮らしている。その定年前の会社というのが椿が今日まで勤めていた製薬会社という奇遇から武田と椿は意気投合していた。椿は武田に相談をしている、  
「そのスナックよりももっと高収入になると女子学生仲間から風俗に誘われて私はそこを1年ほど勤めてからこの会社に就職をしたのですが、その時の常連客がたまたま就職した製薬会社にいたのです」

「しかし、あんな風俗では素颜ではなく濃い化粧をしているのでは...」

「はい、それが私の右側の耳の下の首に黒い黒子が二つ並んでいるのです。その社員は店の待合室に飾ってある濃い化粧の写真をいつのまにか撮っていてその写真にもその黒子があったのです。ある時、その社員にその写真を見せられて、君は木屋町のヘルスにいた「サザンカ」に間違いがないというのです」

「ほう、そんなこともあるのか...?...それで椿さんはサザンカさんだったの?」

「はい、その通りですが、もちろん私は違うといいましたが、その噂が社内中に広がって私は今日退職をしてきたのです」

武田と椿はもう白ワインのボトル3本目で椿の色白の肌がピンクに染まってきた。そして武田が、

「その常連の男からなにか脅迫でも...」

「はい、その男は私にヘルスと同じサービスをしてくれたらこのことは内緒にするとメールがありました。もちろん断りましたが、男は納得せず社内に噂を広めた卑怯者です。この男は経理部の係長の30歳で同じ会社に勤めている専務の孫娘と婚約していました。社内では逆玉の輿として将来を約束されて来週の土曜日に結婚式を予定しています」

「ほう、あの専務は次期社長になるが、その孫娘の婿となるとすぐに経理課長か部長が約束されている」

「はい、その通りです。そこで私はその婚約者の孫娘に今日の退社時に今までの経緯を書いた手紙を手渡してきました」

「ほう...復讐ですか...?」

この話の途中にその婚約者から椿に電話があった。椿は相手の質問に答えている様子だが、その電話は3分ほどで切られていた。そして椿は、

「あの手紙を専務にも見せたそうです。そして婚約は破棄されて彼は明日付で懲戒解雇されるそうです」

「ほう、見事な復讐劇になった、おめでとう~!、ところで椿さんは魚のさばき方が上手いが、実

家は料理屋さんですか？」

「あら、自己紹介が遅くなってすみません。私は河原崎椿で兵庫県西宮の今津港で育ちました。実家は元々漁師だったのですが、今では釣り船と民宿「河原崎 祥豊丸」を経営しています」

「ええええ～実はそのタチウオを釣ったのは祥豊丸です。その民宿ももう何回も泊まっているし、それに次の土曜日にも予約を入れています」

「へえ～祥豊丸の船長は私の兄です...そんな人に私の過去の過ちの話をしてしまった...」

「いやいや、私は彼と違って脅迫はしませんから安心してください」

「でも...それでは私の気がすみません...」

そこにママの幸子が口を挟んできた。

「たけちゃん～椿さんはたけちゃんに色々話を聞いてもらって気が晴れ晴れしているのよ...こんな日は女って優しい男性に抱かれないものよ...」

「いやいや、俺は...もう65歳で...こんな若い娘をどうこうする気は...」

「何をいっているの、たけちゃんが私を抱きたいといつも愛のメールをしてくれるけどあれは嘘だったの？」

「いや～何もそんなことを椿さんの前で...」

椿はこのママと武田の話を笑って聞いていたが、

「たけちゃん...なにも心配しないで私がサービスをしますから、それに私も実家に会社を辞めたことを報告しに帰りますから一緒に車に乗せてほしいの...」

ママの幸子は武田に、

「今夜はたけちゃんの自宅?それともラブホテル?、ラブホテルならタクシーを呼びますが...」

たけちゃんは顔を真っ赤にしてママに、

「う、ラブホテル...ママ、今日の昼間は釣り大会で優勝、そして夜も空前の大漁...」

「そう、大漁旗とアッチも起ててネ...たけちゃん」

★...画像は105cmのタチウオを釣った、たけちゃん。サザンカの花







西宮今津港...夕チウオ105cm



釣り人 たけちゃん

働く女性たち...「雀の恩返し 朱雀子」 雀は益虫で稲作や農民の味方・駆け込み寺居酒屋ボン吉 49話

音吉は1階のベランダで「チュンチュン」と騒ぐ雀の鳴き声で目が覚めた。薄目を開けて窓を見るとまだ薄暗いから5時前だと判断したが、これはまだ起きるのは早いと目を閉じた。するとすぐに寝付いたが、やがて夢の中にいるような気分になりなにやら夢を見ていた。この音吉は夢の中の出来事を一生懸命覚えてそれを小説のネタにするクセがあった。つまり、「夢の中でこれは夢を見ているのでこのシーンをはっきり覚えておこう」といつも脳に言い聞かせていた。

そしてこの早朝の夢もそうであった。夢の中には真っ白な生地に青い竹の笹が描かれた和服の若い美女が出て来た。その美女は朱雀子(すずこ)と自己紹介している、そして、

「音吉さん、音吉さんはたしかブログや電子書籍で小説を書いていますよね～」

「はい、今は連載でこの「働く女性たち...駆け込み寺居酒屋ボン吉」と「伏見稲荷大社の物語」の2本を書いています」

「そう、その伏見稲荷大社の物語の話なんです、そこには雀は稲穂を食い荒らす農民にとっては害鳥と書いてありました。そしてその害鳥の雀を捕獲して食べる「焼き鳥」が伏見稲荷大社の名物だと書かれていますがそれは間違いになります」

「ほう、しかし、稲穂を荒らすことには間違いはない」

「いえ、私ら雀は稲穂は食べません。それはまだ熟していない稲穂は殻が固くてたべられないのです。そこで収穫の時の落穂を拾って食べているだけです」

「そうでしたか～」

「はい、それだけではなく私たち雀の主食は稲に悪い影響をもたらす虫を食べています。一羽の雀が生涯に捕獲する農民にとっての害虫を約100万匹は食べていますからもし雀がいなければお米の収穫も約半分にしかありません」

「ほう、それは初耳になる。雀は稲作にとっては害鳥としか思っていなかった」

「はい、昨今流行っている無農薬の稲作には私たち雀や他の小鳥がいなければ一粒のお米もできません」

音吉は夢の中だから寝たままの会話でしかも目はつむっている。さらに朱雀子は、

「今年の冬は珍しく京都は雪の日が多かったのです。ただでさえ冬は虫もいません、食べるのは雑草の種だけですが、その種も雪では見つけれませんでした。私たち雀というのは丸1日もなにも食べなければ死んでしまいます。そんな折に音吉さんは私たちに毎日パンくずを与えてくれました」

この音吉は毎朝行くパン喫茶から食パンの耳をもらっていた。それを細かく刻んで雀というより小鳥に与えていたのだ。そしてこの朝もこの小鳥たちのさわぐ声で目が覚めていた。さらに朱雀子は、

「冬場には雀の約半分が栄養失調で死んでしまうのですが、あのパンは雑草の種や虫などの栄養価の5倍は栄養があって、この地域の雀は音吉さんのパンくずをそれぞれ巣に持ち帰り赤ちゃんやお年寄りの雀に分け与えていました。おかげさまで私たちは辛い冬を生き延びこうして春を迎えられました」

その朱雀子はここまで一気に話をしてからスルスルと着物を脱いで真っ赤な長襦袢姿で音吉のベッドに入って来た。音吉の脳は働いているが、身体は「金縛り」になっているのか身動きはまったくできない。やがて音吉は今まで体験したことがないほどの快感を全身で感じていた。もちろんこれが夢の中だということを音吉が音吉にいい聞かしてはいるが、その得体のしれない全身を貫く快感には降参をしておもわず歓喜の声を上げていた。

音吉が二度寝から目が覚めたのは6時だった、ベランダでは相変わらず雀たちがパンくずの餌を待ってるのか、催促をしているのか騒いでいる。音吉はまな板の上にパンの耳を並べて細かく切りながらさっきの夢を思い出していた。たしかにまだ股間にはそんな快感の後の余韻はたしかにあることはあるが、と思いながら餌をお皿に入れて雀にやると一斉に飛びついてきた。

と、その中に珍しい白い雀が一羽混じっていた。その白い雀と目が合った瞬間に音吉の脳に、

「音吉さん、さっきはどうもありがとうございました」

と聞こえるではないかい、その音吉も口にはださないがテレパシーで、

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「もし私でよかったらいつでも...今度は夜にうかがいます」

「それはそれは...ありがとうございます」

こんな会話を白い雀としていると携帯電話が鳴った。音吉はあわて電話を取るとそれはパン喫茶のママからで、

「もしもし、音吉どん...生きていますか～」

「あっ、はいはい、生きていますよ～」

「どうしたのいつも7時には来るのに...もう8時よっ!」

「えっ?、そうか～二度寝に三度寝をしていたのか...それにしてもいい夢だった...」

「あらら、そんないい夢を見ていたの?、相手は誰なの?」

「いや～雀の...それがあのパンの耳を雀にやっていると...」

「あらら、それって雀の恩返しではないの...ホホホ、そのパンは私のだから、音吉さんは私にもそれと同じことの恩返しをしてくれる?」

「.....」

Twitterより



## 老人女装...「オカマのイナコ オカマデビュー」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 お化けの日 番外編48話

---

### 老人女装...「オカマのイナコ オカマデビュー」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 お化けの日 番外編48話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」は5月3、4、5と連休の予定だったが、この3日だけは女性抜きの「お化けの日」として店を開けてほしいという申し入れが「西大路オールドニューハーフクラブ」の会長の74歳の「ヒカルちゃん」からあった。ところがメンバー6名参加予定だったが3名しか参加できないというのでこの店のマスターの音吉が急遽女装で参加することになった。

店は看板を出さずに「貸し切り」にしていたが、なぜか?飛び入りの中年以上の男たちが怖いもの見たさに集まり店は一時満員御礼状態だった。この女装クラブは音吉を入れて7名にもなったが、このきっかけとは去年の暮れにある一人の老人の客が店に訪れて音吉に女装として店に来てもいいかという申し入れがあったことから始まる。

これがヒカルちゃんですその時は音吉も目が慣れていなかったのか、それはそれはお世辞にも綺麗とは思わなかった。そうこうしているうちにこのヒカルちゃんの被っているウィッグを他の客が被って記念写真を撮ったのが運のツキでこれらの客も化粧をし始めた。この店のママの幸子はこれまた化粧が上手で客に化粧の指導をしたことから6名の老人女装が誕生していた。

これらのウィッグと服はすべてヒカルちゃんの持ち物で聞けばこのヒカルちゃん、これらの衣装を置くためにマンションを一部屋借りている。会社は西大路駅近くにあつてその会社の社長さんでもある。自宅は大阪に大きなお屋敷があるが、家を妻や家族から追い出されたのか?、それとも単身赴任かはわからないがこの衣裳部屋で独居老人をしている。

さてその「お化けの日」だが、これはギャラリーも多くて盛り上がった。私も見様見真似で一応化粧はしたが、やはりお化けとしか見えない。いずれこのギャラリーの老人たちもこれに感化されて次の7月の「お化けの日」には10名を超えていると思う。

★...画像はそのお化けだが、これらに嫌悪感を覚える人はここから先は進まないでください。この「洋風居酒屋ポン吉」の場所を知りたい方はこのブログの「コメント欄」に書いてください。











働く女性たち...「幸せを呼ぶ紅白のつつじを探す女 さつき」 駆け込み寺居酒屋ポン吉 47話

今年も私が名付けた「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」を探そうと西大路花屋町のローム本社前の花壇のつつじを見ていた。この日はまだ花がポツポツしか咲いてはいなかった。するとこの会社の出入りのOLなのか?、若くて綺麗な女性が声をかけてくれた。その女性は、

「綺麗な花ですね、これはさつきですか?」

「いえいえ、これはつつじです」

「へえ~私の名前は「さつき」というのですが...このさつきとつつじの違いが判らないというのは恥ずかしいですよ...」

「そんなことはありませんが...」

と、私は何気なしに私のスマホに保存していた去年のブログ「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」をそのさつきさんに見せていた。さつきさんは、

「へえ~見事に紅白になっていますね~」

「はい、これすべてここのつつじになります。今年は残念ながらまだ早いようです」

「そうですか~私は富山の会社から主張で来て今から帰ります。それに来週の金曜日にはまた来ますからその昼休みに私も探します」

「そうですね...来週なら満開になっています」

その金曜日の午後6時ごろにそのさつきさんからメールがきた。そこには、

「今日の昼休みと退社後にも一生懸命探しましたがあの紅白のつつじは発見できませんでした」とある、そして今夜は京都駅前のアパホテルが取れましたので明日もう一度探してみますとあった。そこで**JR**西大路近くに私の店で「洋風居酒屋ポン吉」があるからこないかと返事をするとそのさつきさんは喜んで店に来た。

そのさつきさんは2年前に金沢大学を卒業してロームに就職したが、このロームを選んだのは京都に憧れがあったことだったが、なぜか配属は自宅のある富山市になったと自己紹介をしている。そのさつきさんがこの店のマスターの音吉に、

「大学時代の恋人も京都に憧れて別の京都の会社に就職をしたが、京都で彼女ができたのか?、もう2年間も連絡がないの...」

「新入社員というのはなにかと忙しくて連絡がついおろそかになります。これが数か月も続くこの言い訳に苦勞するものです。そしてそれがおっくうでまた数か月が経ってしまいます。こうなると2年ぐらいはすぐです」

「そんなものですか...私もほうもそういえばついこちらからの連絡も忙しくて...なにかと嫌な予感で...」

「そう、これはお互いさまで。で、彼の会社は？」

「はい、この近くの「フラワー本社」で名前は近藤里一といいます」

こうなると話は早いものでフラワー人事課の女課長からすぐに音吉に連絡が入った。それによると近藤は経理課勤務でその同僚というより5年先輩のこの店の常連客の加代子がすぐに店にきた。そしてさつきに、

「あの近藤さんは社内でも有名な合コン好きな人で今夜もこの近くの店で合コンをしています」

「そうでしたか...それで決まった彼女は？」

「いえ、それは知りませんが...」

そこで音吉とさつきはこの近藤らが合コンをしている店に偵察にいった。その全国チェーンの居酒屋の一部屋には近藤ら5対5の合コンが開催されていたが、相手の女性はどれも年上というより中年のおばさまだった。しかも相当破廉恥な王様ゲームで楽しんでいた。

この部屋が丸見えの個室で飲んでいた音吉とさつきは顔を見合わせて近藤の本当の姿を見て失望していた。音吉が時計を見るともう12時前でさつきを駅まで送るといった。この西大路駅からさつきが予約しているホテルは一駅だったが、さつきは音吉にホテルの部屋まで送ってほしいという。音吉は、

「しかし、それはできません。部屋に入れば私も男ですから...」

「でも、明日の朝には「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」を一緒に探していただけるのでしょうか？」

「はい、それは明日の朝です」

「いやです...私は今夜、「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」を探してほしいのです。いえ、私は「さつき」ですから、幸せを呼ぶ紅白のさつきになります」

こんな押し問答をしている最中にママの幸子から電話があった。

「音吉どん...あなたがあの「さつき」さんを店に誘ったのでしょうか？」

「そらまあ~そうなるが...それはまた別の話になる」

「しかし、誘った女をその気にさせた責任は音吉どんにあります。仮にもこの店は世間から「駆け込み寺」といわれているのにその女性を不幸にさせていいの？」

「しかし、それならあの近藤とかいうチャライ男とそんなに変わらない」

「いえ、あの人は女を不幸にします。音吉どんはどんな女性も幸せにします」

こうして音吉はさつきを今夜エスコートすることになったが、その時、さつきは真向いの近藤がいる部屋に入っていた、そして、

「里一さん、お久しぶりです。さぞかし京都の夜は毎日楽しいでしょうネ...」

その一言の声で近藤は心と我に返っていたが、なぜここにさつきがいるのかがまだ理解できないまま無言でいた。さらにさつきは、

「今夜はこの音吉さんと私も楽しい夜をすごします。里一さんも楽しんでください」といってさつきは音吉の腕の中で復讐の味を噛みしめていた。

★...画像は今年の「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」です。今年のローム本社のつつじはどの色も成長が悪い。水不足か?、病気かはわからない...しかし、これだけの大きな会社だから専属の造園師がいるのにネ... ですからこの画像はロームのではなくその近くの物です。



2017年幸せを呼ぶ紅白のつつじ



2017年幸せを呼ぶ紅白のつつじ







2017年春を呼ぶ紅白のつつじ

働く女性たち...「企業戦士のお局さま 雅子」 会社への復讐 駆け込み寺居酒屋ポン吉 46話

JR西大路駅周辺には一流企業の本社が数社ある。どの会社も始業時間は9時なのにランジェリーメーカーの「フラワー」へ向かう女性社員はなぜか?それより早い7時過ぎごろから駅やバス停から本社に向かっている。しかも早朝出勤する女性たちは若い人は少なく、いわゆるキャリアー組というのか?もう40~60歳ぐらいのベテラン女性社員が目立つ。

この駅近くで「洋風居酒屋ポン吉」を経営しているマスターの音吉は毎朝の散歩でこれらを目撃していた。店の客の多くはこの「フラワー」の女性社員だが、この早朝出勤するメンバーには顔見知りはいなかった。その夜、音吉はフラワーの女子社員の慶子にこれらのことを聞くと慶子は

「そうなのよ~9時出勤なのに係長や課長は早くから来て仕事をしているの...それに夜も遅いし...あれを見ていたらこの会社で出世をするなんてことを思わないわ...」

「しかし、子供や家族もいるのに...それでは家庭不和になるのでは?」

「家庭、子供?、そんなものあのお局さんらにはありません。会社のため、仕事のためと働き続けて婚期を逃がした人ばかりです...」

「そうか~高度成長期にあの会社は大きくなったが、そんな犠牲の上に成り立っているのか...しかし、それはすべてがすべてではなく中には恋愛して結婚した人もいるのでは?」

「そう、その当時は結婚して妊娠すれば一旦会社を退職するというルールがあったらしいの、そうすると出世競争から脱落するので結婚どころか恋愛をするチャンスもなかったらしいの...」

それから暫くして慶子が上司の課長とともに店に来た、その上司は雅子さんといひフラワーに入社して30年とっていたかもう53歳ほどになると勝手に音吉は判断していた。この慶子さんは一流企業の企業戦士というより「疲れ果てたおばさん」という雰囲気でのこの部下の慶子とは親戚筋というので慶子には気を許していた。

この雅子もママの幸子が気に入ったのか、それとも幸子の誘導尋問が上手いのか雅子とは気が合ひよく話をしていた。幸子は雅子に、

「この店もそうだが、会社周辺では会社の幹部の方々は食事や飲み会をなさらないのですか?」

「幹部といっても私たち課長程度では責任ばかりが重くて...それにやはり若い部下とのお付き合いはなにかと気を使いますから...」

「そんなものですか?」

「はい、それにグチの一つでもいえばそれが即会社に筒抜けになります。ですから会社でも外で

も企業戦士の建前ばかりで生きていますから...もうそれで30年、男女平等とかという美しい言葉に騙されて女を忘れて会社に奉仕してきました」

そこで音吉が雅子さんに、

「毎朝早く出勤されているようだが...」

「そう、これは誰にも命令されていないが、そういう雰囲気朝は誰よりも早く夜は誰よりも遅くというのが暗黙のルールになりました」

「しかし、それでは疲れるでしょう？」

「はい、もう私も53ですから...それでもなんとか...定年まではと頑張っています」

こんな会話があったからはこの雅子さん、仕事をなるべく定時に終わってこのポン吉に来るようになった。しかも、朝は早朝会議や定例の早朝本社や駅前周辺の掃除以外の日は定時に出勤してきたものだから、「雅子の反逆とか雅子の復讐という」ウワサが社内に乱れ飛んでいた。そして雅子も若い女子社員の部下を連れてこのポン吉に遊びに来ていた。その雅子は部下に、

「若いというのは最大の武器になります。それはもちろん仕事も遊びも恋愛にも通じます。その若さをすべて会社に奉仕してきた私は遊びも恋愛も知りませんでした。これは人間としては最大の不幸になります。この課の課長としてはみなさまを私のような不幸な人間にしていけないということに気が付いたのです。もちろん、このことで課の仕事や業績に支障ができればダメになります。しかし、我が課は私が定時出退勤してもなんら変化がなかったことになりました。つまり、無駄なことを長年してきたことを心から反省しています」

もちろんこんな雅子の演説が部長どころか社長まで届くには3日もかからなかった。雅子の上司の部長は吉川雅子を部屋に呼び、

「吉川課長は誰かに洗脳されたのか？」

「はい、最近、よく飲みに行っている居酒屋のマスターに「私は疲れていると指摘」されたのです。私はその言葉に目覚めて少し遅めの出勤、少し早めの退勤をしたところ化粧のノリが良くなってお洒落にも気を遣うようになりました。すると余裕なのか？世の中が広く見えるようになりました。世の中の女性は普通に遊んで恋愛をして結婚、そして子供を育てるという幸せがある。もちろん私にはそんな夢はなくなりました。しかし、こんな普通の夢さえ叶わない企業戦士育成の我社の社風を改善したいと思い、私の首を覚悟で課の働き方改革をすることになったのです」

「そうなのか～いや、私の孫娘もこの会社に就職したいといっただけはいたが、私は吉川課長の出世物語を聞かしてやるとその孫娘は「そんな会社」は嫌だといって辞退していた」

その話は部長から社長に報告されたが、社長は笑ってその問題は「お局さんらが考えることでその判断は若い女性社員がする」とだけ言って吉川課長には特にお咎めはなかった。もちろんこれらは本社どころか海外の支店まで流布されて雅子は社内で時の人となっていた。その雅子と慶子

がポン吉で話をしていた。

「課長...いえ、雅子おばさま、最近お綺麗ですが、何かあったのですか？」

「いえいえ、それは言えません...」

「でも...早出残業を拒否されただけで人間がそんなに簡単に元気になるというより綺麗になるのはガッテンがいけません」

「慶子さんも恋をすればわかります...」

「ええええ～おばさまが...恋...相手は誰なの？」

「.....」

「わかった...!、この店の音吉さんなの?、いったいつの間に...?...」

「いえね～、この店のママさんか音吉さんを一晩貸してくれるというので...つい、その気になって忘れていたオンナを取り戻したわ～これからの人生はオンナで生きるの～ホホホ」

「.....」



お正月前に植えられた花キャベツ、もう4か月も咲  
いています。



働く女性たち 「パワーシャベルの女 重子」...しなやかな指先で重機は動く 45話

駆け込み寺居酒屋ポン吉と呼ばれている「ポン吉」のマスターの音吉が経営しているマンションの真裏のマンションの解体工事が始まった。その工事の挨拶に工事を請け負った建設会社の現場監督が音吉に挨拶にきた。その監督はまだ30前と思われる色白美人だった。昨今はこの男の職場でもあった建設現場にも女性がかかり進出していることを音吉は知っていたが、こんな若い女性の監督まで進出していることは知らなかった。

その監督は田中建設の田中重子の名刺を音吉に渡してから、

「この解体工事は約20日かかります。それまでなにかと重機の騒音などで迷惑をおかけしますが、なるべく静かに工事を進めます。そこでもしこのマンションに空いている部屋があったら20日間ほど女性の更衣室、それに洗面所を使わせてほしいのです」

「はい、丁度1階の部屋が空いています。この部屋のリホームはそれ以後にしますから自由に使ってください。ところでこの工事の作業員の女性は何名ですか？」

「はい、この現場はすべて女性で作業員は3名、産業廃棄物を運ぶ4トンドンプが2台で運転手も2名、それにガードマンが2名の合計監督の私を入れて8名になります」

「ほう、すべて女性ですか？」

「はい、元受けの建設会社は大手ゼネコンの竹内工務店ですが、私ども田中建設はすべて女性で運営しています」

こうして解体作業は始まった。解体は大型のパワーシャベルで3階建てのマンションを容赦なくぶつつぶす工法だが、このパワーシャベルを操作しているのがあの華奢な色白美人の「重子」だったので音吉は目を疑っていた。やかで1日目の作業の昼になりこの8名の若い作業員らは音吉のマンションで食事と休息をしていた。

1日目の作業は丁度大型の重機が格納できる程度でこの重機は20日間はここに停めて置くという。そして作業を終えた後に重子は音吉に、

「私の家は向日町ですのでJRで帰ります。その西大路駅周辺で食事のできる店はありませんか？」

「はいはい、それなら私が経営している居酒屋があります」

「あらら、そうでしたの、それなら工事でご迷惑をかけていますから私をごちそうしますから一緒にいかがですか？」

現場監督の制服から私服に着替えた重子さんは花柄のヒラヒラしたワンピースで店にきた。音吉は一瞬重子さんとはわからずブログに記事を書いていた。重子さんはカウンターに座りママの幸

子に自己紹介している、

「へ～あのマンションの解体工事...そのマンションはここのマスターの真裏のことよね...」

「はい、その音吉さんに会いにきたのですが...無視されています」

そこでやっとわかった音吉は、

「へえ～あの重機を操縦していた重子さんとは思わないほど品がありますね～♪」

「そんな～でも、私の会社では仕事中は元より女としての化粧やお洒落を推奨しています。ほとんどの現場はやはり女性はまだ少ないのです。そんな現場に花を咲かす運動ですが、それが成功してもう現場では男同士の喧嘩や博打はなくなりました。そればかりか作業着で通勤して帰りに居酒屋で柄の悪い言葉で酒を飲むこともなくなり、みんな私服に着かえてお洒落するようになりました」

「そら～そうでしょう、現場にこんな綺麗な女性が出現すれば...」

「工事現場の近くの住民らとの諍いも女性のガードマンを配置することでほとんどなくなりました」

それから毎日のように重子はこのポン吉で夜の食事をするようになっていた。その間に幸子に色々な人生相談をしていた。それによると重子の家は小さな建設会社をしていたが父親がクレーンから落ちて来た鉄板の下敷きになって亡くなった。その後、長女の重子ら女3人姉妹で女性だけを雇用した建設会社に変更したという。それが成功して今では従業員50名を超える建設会社になりこの雇用している女性らの悩みも聞いていた。

この女性らの悩みというのはやはり愛とか恋の話にはなるが、これはそれなりに重子もそれなりにアドバイスをしていたが、こと男女の性の悩みについてはいいアドバイスはできなかった。それはこの重子はまだ男も知らない処女だった。父親が事故で亡くなったのは重子がまだ女子大学在学中のことで恋人さえいないまま稼業を継いできたという事情になる。幸子は重子に、

「そんなものを知らなくても性の悩みなんてものは愛とか恋の裏返しでそれを解決すればすべてが解決できます」

「そんなものですか...」

「そう、好きな男がどんなセックスを求めてきてもそれを女は受け入れられます。しかし、一旦、嫌いになるとキスさえ汚くなります」

「そうですか～私なんて現場で男の嫌な部分しか見ていないから結婚なんてものは絶対にしたくはありません」

「そうよね～私も男なんてものは懲り懲りだから...とはいってもそれは結婚を一度経験したからいえること、男のすべてがああ音吉さんのように優しければ日本で泣く女はいなくなるわ...」

「あの～ママさんと音吉さんの関係は？」

「それね～恋人でもないし、愛人でもないし、気の合う仲間同士の関係になるわ...」

「それはお互い束縛も干渉しないということですか？」

マンションの解体も予定通り終わった最後の日に重子は音吉に、

「音吉さん、ありがとうございました。次の工事は亀岡で約1年ほどかかる大工事になります。この20日間でママや音吉さんからの人生のアドバイスで私は自分でもわかるほど成長しました」

「いや～それはママのおかげだと思う。このママはすべての女性が幸せになることを心から願っている」

「それは私も同じです。女性を現場で雇用するのはこの運輸、建設業には賃金などの男女差別がないからです。そしてパワーシャベルなど重機のオペレーターには女性の細やかな感性が必要になります」

「そう指先一つであの巨大な重機がしなやかに動くのに私は時間を忘れて見ていました」

そこで幸子が重子に、

「どう、こんな老人だけど...音吉どんのそのしなやかな指先で男を体験して重子さんの心の中のモヤモヤを解消しない」

「はい。ママさん喜んで音吉さんをお借りします。そして私も結婚したいなと思う人生を送ります」

「そう、そうしなさい」

こうしてまたまた音吉は安物のホストのごとく幸子の策略にはまっていたが、男の現場で現場監督をするということは男そのものを知らなくては話にならないとこれは本当にそう思っていた。この20日間で理論的には成長した重子もやはり実地体験をしなければここぞという時にこれがハンデーになるのは経験上音吉は知っていた。重子のほうも男を知っているか?知らないかでなにかとハンデーを感じていたので男の戦場でもある工事現場でもう一つ迫力というか、押しがなかったことを悩みとしていた。たった一夜で人生が変わるということもないが、重子にとっては人生の記念の日になった。







きのこの山

いけ菜ばな イナコ流家元 イナコ

働く女性たち...「菜の花畑の女 真菜」 いけ菜ばな イナコ流家元 駆け込み寺居酒屋ポン吉  
44話

吉祥院天満宮がある吉祥院地区にはポツリポツリとまだ畑が残っている。その多くは九条ネギなどを栽培しているが、その中には数か所の畑で曜日を決めて直売の農家もある。JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉もこれらの畑で新鮮な野菜を買っていた。その農家の一軒が廃業したのか野菜の販売どころか農地は荒れ放題になっていた。

音吉は真っ黄色に染まった菜の花の写真を撮ろうとその畑に入っていた。その畑は大きな農家の裏にありその裏口から一人の若い色白の美人が出てきて音吉に声をかけた、

「その黄色い花は白菜の花です。まだ花が咲いていない蕾の下10cmほどで摘み取りさっと湯通しすればとても柔らかく食べられます。それに生のサラダにしても美味しいです」

「これって白菜の花ですか？」

「はい、こちらにはブロッコリーの花もありますから同じように摘み取ってください」

「しかし、食べられる野菜をこうして臺が立つまで放置するのはもったいない気がするが...」

「はい、私の両親が軽トラで市場に野菜を搬入する途中で大型ダンプに追突されて二人とも亡くなったのです」

「それはそれは、で、他にこの畑をする男手は？」

「それが...私は一人っ子です。それに畑仕事などはまだ一度も...」

こうして音吉は白菜とブロッコリーの花芽を農家の籠いっぱい二人で摘み取っていた。そこで音吉は、

「私は駅前でポン吉という居酒屋をやっています。もしよろしければ今夜この花芽を料理していただけますか?、店の客には若い女性が多くてこんな新鮮な野菜を皆さん待ち望んでいるのです」

この農家の女性は真菜といいまだ29歳だという。両親が亡くなったと同時に勤めていた証券会社を辞めて大きな屋敷とこの畑を遺産相続税のために処分する用意をしていると自己紹介していた。その夕方には真菜さんがまた別の野菜を持って店にきた。音吉は店の掲示板、ブログ、それにLANEで「今夜は新鮮野菜を無料で食べ放題」という記事を流していた。

そのせいで店は女の子で超満員御礼で男の客は立飲み状態だった。真菜さんとママの幸子は手際よくこの花芽や野菜を材料に数種類の料理を大皿に盛ってそれぞれ客はセルフで食べていた。一段落したころ真菜さんと幸子はカウンターの中で腰を下ろしていつもの身の上相談話を展開して

いた。それによると真菜さんは証券会社の同僚に英樹という恋人がいるが、真菜さんの両親はこの農家の後継ぎとして養子を希望していたが、その相手の両親は養子なんてものには絶対反対と  
していた。そこで幸子が、

「ご両親が亡くなってこんなことをいうのもなんだけど...真菜さんはその農家と畑を処分する  
というのなら養子でなくてもいいのではないの？」

「はい、そうなんですけど...親戚がやたら多くて、この由緒ある「菅原家」を継ぐのは子孫の責  
任になるというのです」

「菅原家？、菅原家ってあの菅原道真の子孫になるの...？」

「はい、そうなりますけど...私としてはそんなことはどうでもいいことです」

「それならその恋人の英樹さんとはまだ付き合っているの？」

「はい、英樹さんとは結婚の約束をしています」

それから10日ほど経ったある日真菜が店にきた。真菜は最近親戚で近所に住んでいる健二とい  
う男が毎晩のように家に来る。その健二とは幼いころからの同級生で親戚ということもありよく  
真菜の家に入ったりしていた。その健二がいうには私と結婚をしてこの家を継ぐことが親戚一同の  
意見で私と結婚してほしいということなんです。そして夜遅くなくてもなかなか家に帰らないば  
かりか襲いかかられたこともあるのです。

その話を聞いていた幸子は真菜に、

「そら～あの家屋敷と畑を処分すれば何億円にもなるからね～それが目当てでないの？」

「はい、それに親戚の人に聞いた話なんですけど、とりあえず力づくでも私と肉体関係を持てばい  
いという作戦だと聞いています」

「そうアホな男たちはそんなことを真剣に考えているのが相場なのよ～真菜...」

「それでタベ、健二さんが来た時に私には恋人がいます。それにお腹には赤ちゃんがいますと答  
えたの」

「そしたら...？」

「そんなことは嘘だというのは、それでそれならその男を今夜連れて来いというの...」

「それならその恋人の英樹さんに頼めばなにも問題がないじゃないの？」

「それが...英樹さんは東京本社に出向中で夏まで帰れないの」

こうしてこの偽物の恋人の役を68歳の音吉に真菜はなってほしいという。もちろんこんなこと  
を相手は信用しないが、現実には音吉が真菜の家で一晩を過ごせば健二も諦める可能性がないとは  
いえないとこの作戦を音吉に承諾も得ないで真菜と幸子で決めてしまった。時間は10時になっ  
ていた。音吉と真菜の二人は真菜の家の前まで来るとそこには健二が待っていた。そして、

「真菜ちゃん、そんな年寄りを連れてきて恋人という茶番劇はやめたら」

「いえ、私はこの音吉さんが大好きです。なんなら健二さんが納得するまで何日でもこの音吉さ  
んを家に泊めます」

こうして健二を残して二人で家に入った。そして真菜は音吉に二人でお風呂に入ろうと誘ったが音吉は、

「そらあかんわ～恋人の英樹さんに...」

「なにをいっているの!、そんなことはバレなければならないことと同じこと、それにあの健二さんはこの風呂場の場所も知っているからきっとお風呂の窓の二人の影を見ます。夕べも私の影を見ていましたから」

「しかし...」

真菜はそんなことを気にしないでさっさと服を脱いで下着だけになって音吉の手を引いて風呂場に連行していた。この風呂場というのはかなり広く窓もかなり大きく中庭に面している。この中庭には健二が潜んでいることは間違いはないと真菜はわざと大きな声で音吉とふざけていた。

やはり健二は中庭にいたが、この二人がキスをしたり、抱き合う影を確認したのか涙を流してこの場から撤収していた。風呂場では音吉も年は取ってはいるが、やはり男のメンツというのがあるのか積極的に真菜を愛撫して結ばれていた。そして風呂から上がってビールで乾杯していたが、音吉は真菜のあの一言が耳に残っていた。それは、

「なにをいっているの!、そんなことはバレなければならないことと同じこと!」

もちろん音吉もこんな台詞を批判する立場ではないが、女ってというのはこんなものかと考えていた。それを察知した真菜は、

「音吉さん、私の恋人の英樹さんも東京でなにをしているかはわかりません。でもそんなことを詮索するよりも信じたことのほうが楽しくなります」

「それなら今夜のことはまったくなかったことになる」

「そう、今夜どころか明日も明後日も健二さんが諦めるまでは...ママさんには了承をいただいています」

「あらら、また幸子に騙された、俺は安物のホストか!」

### ★...いけ菜ばな イナコ流家元が発足

真菜さんが持ってきてくれた白菜とブロッコリーの花芽には小さな黄色い花が少しあった。それなら活けて花を咲かせてみようと思って花瓶を探したが、そんなものはない。

そこでそこらにある適当なものに活けると一晩で花が倍になった。その花を2日ほど楽しんだ後には食べるという一石二鳥を発見した。これが病みつきになりついに「いけ菜ばな」という登録商標で「イナコ流家元」として活け花の流派を発足しました。↓の画像がその記念すべき家元の作品になります。



白菜の花

いけ菜ばな イナコ流家元 イナコ



ブロッコリーの花

いけ菜ばな イナコ流家元 イナコ



いけ菜ばな 生けた後は料理して食べるというの  
が、イナコ流



イナコ流家元 イナコ

働く女性たち...「京都タクシードライバー・さくら」 さくら個人タクシー 駆け込み寺居酒屋ポン吉 43話

元看護師で今はタクシードライバーをしている「さくら」が個人タクシーの事業免許を取得してそのお披露目にJR西大路駅近くの「居酒屋ポン吉」に来た。さくら個人タクシーは小型で少し濃いピンクの車体が可愛い。マスターの音吉はさくらに、

「もう、さくらと知り合ってから15年にはなるがもう何歳になった？」

「はい、25歳でタクシーに乗って丁度10年目の35歳で個人タクシーになりました」

「そか、さくらは財界や一流企業の会長や社長のお年寄りのアイドルなのになぜ中型や大型のハイヤーにしなかったの？」

「でも、さくらのファンはお金持ちだけではなく年金暮らしの独居老人の方々もおられますからなるべく安い小型でそれも認可運賃の下限で申請しました」

「そういえばその昔、さくらの客だったアメリカのGMモーターズの当時副社長で現社長夫婦とその家族も京都に来れば必ず「さくら」の小型タクシーをチャーターしていた」

「そう、どんな偉い人もこの京都の文化でもある小型タクシーに乗ってもらいます。少し外人には狭いが、それが夫婦や家族の絆になるといっている人もいます」

そんな会話をしているとさくらのケータイが鳴った。なんでもさくらの個人タクシーの記念すべき最初の客になりたいと駅前の一流ランジェリーメーカーの「フラワー」の社長からでこの社長の自宅がある下鴨までの予約が入った。その社長はさくらがこの店にいることを知ってフラワー本社からここまで歩いて来るという。それから10分もしないうちにその社長が来たが、そのお供には社長秘書など10名がぞろぞろ付いてきた。社長はさくらのタクシーに一人で乗るが、その後ろには社長専用車の国産高級車など3台がさくらの小型タクシーを先頭にさくら個人タクシー開業記念の祝賀パレードをしているように音吉には見えた。

★～このさくらと音吉の最初の出会いを書いた小説がある。(再掲載)、これとは別に「京都タクシードライバー・さくら」で検索すれば13話ほどある。

★～「さくらの看護師時代」～楊貴妃観音の微笑み

やがて人は死ぬ。突然の事故や脳溢血のような即死状態以外のほとんどの人達の臨終の場所は病院と相場が決まっている。その病院でたいがい人は妻や家族に「おじいちゃん、ガンバッテ！」と声をかけられながら死んで逝くものと思っていました。

京都の東山に御寺（みてら）泉涌寺がある。御寺と呼ばれるのはこの寺が天皇家の菩提寺だということからきている。この境内に中国から渡って来た仏像で「楊貴妃観音」が祀られている。

その楊貴妃にあやかってか、この近くにある病院の名前が「医療法人陽気日会観音病院」と付けられている。この地域の人達からはすこぶる評判の良い病院で、診察に行く場合でも「楊貴妃さん」にお参りに行くと言うほど親しまれている。

この病院を知ったのは、私の友人で趣味の写真の師匠でもあった80歳の市川さんからで、市川さんは口グセのように「私が死ぬ場所は楊貴妃観音病院しかない、ところがあの病院はもう2年先まで予約でいっぱい、あと2年間は健康でいかなあかん」と、足腰を鍛えるために歩こう会、ボケ防止に老人大学に参加している。ある日、市川さんにどうしてあの病院で死にたいかと聞くと、「そらあ～楊貴妃が～いや、それは秘密にしとく」と笑ってはぐらかしていた。

その2年後、市川さんは予定通りに願望の楊貴妃観音病院に入院していた。私は2、3回は見舞いに訪れているが、病院そのものは普通で変わっている点と言えば、入院しているお年寄りが看護婦さんを呼ぶ時に「さくら」と呼び、看護婦も患者を「市じい～!」と呼び捨てにしているくらいでこの病院の「秘密」は解けなかった。

入院して1年後の春。危篤の知らせがあり病院に駆けつけて見ると市川さんは、妻と子供たち、それに孫から「おじいちゃん、ガンバッテ!」と励ましの言葉を掛けられているが、市川さんは何の反応も示さない、そこで医師がさくらに目で合図をした。さくらは、

「市じい～、市じい、さ・く・ら、さくらよ～ほら目を覚まして市じい!」

と大きな声で叫びながら、市川の左の掌を両手で広げて、その掌をしっかりと握り前ボタンを外した白衣の中に入れ、さくらの豊満な白い胸に押し当てている。

「ほら、市じい～、さくらのオッパイよ、ほらもう一度触ってもいいよ!」

「市じい、ほらさくらと約束したじゃない!今日はお風呂の日だからさくらと一緒に遊ぼうって、ほら、市じい～目を覚まして、お願い!もう一回さくらと一緒にお風呂に入ろう～」

医師はもう2分近く止まっている心電図を見ている。そこに心電図の針がピクッと反応すると同時に市川の左手がさくらのオッパイを弱々しくまさぐっている。医師は心臓マッサージをせわしく始める。市川の青白い顔が薄いピンクになるとさくらら数名の看護婦の歓声と拍手が一斉沸き起こった。医師の「もうだいじょうぶです」の声を聞いた家族ら7～8名は、さくらに挨拶どころか軽蔑の眼差しで我先へと帰っていった。

私は、さくらさんにお礼の言葉と、私も最後はこの病院に入院して死にたいと言うと、さくらは「もしその時、伊奈利さんが不幸せだったら」と楊貴妃観音の微笑みを私にもくれた。

★～私はこうして「さくら」と知り合ったが、それから数年後にさくらが偶然に私のデビュー小説「タクシードライバージョッキーの竜」を読んでくれて私にすれば最初のファンレターというものがきた。

★～その手紙には看護師で病院で働いていたが色々あって...、もっとお年寄りのお世話をした

めにさくらもタクシードライバーになったと書かれていた。そして作家にもなりたいというので私の弟子となりました。

★～私はそのころ産経新聞系の「大阪新聞」に800字程度のコラムを約2年間連載をしていました。このコラムのネタの多くはさくらからのものでした。タクシーの中というのは、あらゆる階層の人たちが気をゆるす空間でもあり、もっとも人間らしさができるものですからネタには困らない商売どす。



「特集...幸せを呼ぶ紅白のつつじ 1号～8号・ロームのつつじ」

★...これは去年のものです。今年も私と一緒に「幸せを呼ぶ紅白のつつじ」を探しませんか?。街中を歩いていると結構あるものです。





働く女性たち...「セリ畑の女 平時子」千年の池 駆け込み寺居酒屋ポン吉 4 2 話

江戸時代の絵地図を見ると**JR**西大路駅辺りは「西七条村」とあった。そしてこの西七条村の特産品は「セリ」でこのせりは水田で育てられていた。私の子供のころはこのセリ畑が無数にあり、その畑の中の小魚などを獲って遊んでいた。その小魚はセリ畑でしか育たないという国の天然記念物でもあったが、そのセリ畑も最後の一つとなった。

私は**JR**西大路駅近くにあるセリ畑農家は他にも野菜を栽培しているので九条ネギやブロッコリーを居酒屋の食材としてよく買いに行っていた。いつもは70歳前後の男性が農作業をしていたが、この日は若い女性が腰までのゴム長クツを履いて水田で作業をしていた。この畑では野菜はすべて100円単位で代金は缶の中に入れるシステムになっていた。

ところがいつもの野菜が台の上にないのでその女性に声をかけた、その女性は25歳前後の色白の美人だった。日差しが強いのか顔の化粧もかなり濃くて音吉の好きなタイプだった。女性は水田の中から、

「すみません、この畑の私のおじいさんが脳梗塞で倒れて入院中なんです...」

「それはそれは、あの～お孫さんですか？」

「はい、それで私がこの畑をしているのですが、何かほしいものがあつたら教えてください」

「それではあっちの畑のブロッコリーを3個ほど...」

それを聞いたこの孫娘は畑からでようとするが足が土から抜けずに四苦八苦していたが、その瞬間に頭と顔を水田の中に突っ込んでいた。音吉はそれを助けようとして水田に入ったが二人とも倒れて濡れネズミになっていた。音吉がその孫娘に家はどこかと聞くが、家はここから遠い男山八幡だという。そこで音吉が孫娘が乗って来た軽トラを運転して音吉のマンションで風呂に入れていた。

そして店のママに電話して大至急女性用の下着一式と服を持ってきてほしいと頼んでいた。このセリ畑というのは綺麗な水で音吉は風呂には入らず着替えをしてママとその孫娘を部屋に残して店の開店の準備をしていた。やがてママが出勤してきた。ママの幸子は、

「あの人、25歳で「平時子」さんというらしいの？」

「平時子ってあの平家でなくては人でないといった平清盛の正妻であの辺りにあった平清盛の八条御殿に住んでいたと歴史にはなっているが...」

「そう、その平家の末裔で平家が源氏に負けた後、御殿は源氏につぶされて庭園の池の水はセリ畑に利用されたといっていたわ」

「そうか～それであのセリ畑が平家最後の遺跡として今も平家の末裔が守っているのか」



その夜、音吉が店を閉めて我が家に帰るとそのマンションの部屋の前には白い着物を着た若い女性が立っていた。音吉が顔を見ると今日の昼間のあの時子さんだった。時子さんは、

「今日はどうもありがとうございました。お礼に安芸の宮島の酒蔵が作った「千年の池」という銘酒をお持ちしました」

「いや～それはそれは、寒いですからまずは中に」

こうして音吉と時子はその日本酒で乾杯をしていた。時子は昼間よりもさらに透き通るような綺麗な肌でその着ている着物も平安時代調でマンションの部屋というのを忘れるほど雅な気分になっていた。やがて二人は愛し合うが、それは今まで音吉が体験したことがないほどの快感の波の連続に音吉は思わず声をあげていた。やがて朝になったが、その時子は帰ったのか姿はなかった。

その日の夕方に音吉は幸子と一緒にあのセリ畑にいった。そこには時子さんが乗ってきて音吉が運転した軽トラがあった。しかし、時子さんの姿はなくいつもの農家の老人が畑仕事をしていた。音吉は農家の老人に、

「あの～もう退院されたのですか？」

「あん？何をいっているの？わしはまだ一度も入院などはしたことがない」

「へえ～？おじさんは平さんですネ」

「いえいえ、わしはこの唐橋の井上といますが...」

「お孫さんの時子さんは？」

「そんなものはいない」

音吉は狐か狸に騙されたのかと思いながら、近くの平清盛ゆかりの「若一神社」に行った。その宮司にその昔にここで住んでいた平清盛の正妻の時子さんの絵なんかの史料があるかと聞くと、宮司はここにはないが、京都国立博物館にはある。その国立博物館が発行している本にその時子さんの絵の写真があるからと見せてもらった。

その絵には「平清盛の正妻、時子」と書いてある。その絵を見ると十二単姿の時子がこちらを笑顔でみている。その時子さんと目があつた瞬間にその時子さんは音吉にクインクをした。そして音吉の頭の中で時子さんが、

「夕べはありがとうございました。また、時々遊びにいてもいいですか？」

「それはいいが...時子さんは幽霊ですか？」

「あら、音吉さん、幽霊はお嫌い？」

もちろん横にいる幸子にはこの会話は聞こえない、しかし、音吉の顔がゆるゆるにゆるんでいるので何かを察したのか、

「音吉どん、こんな神社は大嫌い!早よ～帰りましょう」  
と、時子に挑戦するように幸子は音吉の手をしっかりと握っていた。





平清盛の正妻の時子さんが住んでいたといわれる

八条御殿址、若一神社

深夜11時ごろJR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉に警察から電話があった。なんでも音吉が経営する「初音第一ハイツ」の101号室のベランダに干されてあった女性の下着が盗まれた、それを偶然向かいのマンションから見ていた住人が110番したという。この101号室を借りているのは老人女装の玉ちゃん(21話)でこの部屋を女装の衣装置き場と着替えと化粧室に使っていた。そこにたまたま女装姿の玉ちゃんも店にいたので音吉と玉ちゃんは部屋に向かっていた。

そのマンションの前にはパトカーが2台とバイクに乗った警察官で8名ほどいた。それに各新聞社のチャーターしたタクシーが数台、もちろん野次馬も50名ほどいる。そこで玉ちゃんが立ち合い盗まれたブラやパンティーの数を警察官に教えていた。74歳の玉ちゃんとの他にも干してあったピンク系の下着との因果関係を刑事らしき人に説明をしていた、玉ちゃんは刑事に、「すみません、これすべて私のものではなくなんというか〜クラブの会員の分も入っています」「クラブって、玄関ドアに書いてある「西大路オールドニューハーフクラブ」のことか?」「はい、この会の会員の多くが妻帯者で家では着替えができないためにこの部屋を借りているのです」

こうして玉ちゃんは警察に被害届をだして解決はしていたが、家主の音吉はこの玉ちゃんらにベランダでの女装の下着を干すことを厳禁していた。この一件まではこの「初音第一ハイツ」のことを地域の人たちはバツイチハイツと揶揄していたが、今回の件から「お化け屋敷」とか「オカマハイツ」と呼ばれるようになっていた。そらま〜夜に化粧して夜出入りするが、なんせ6人がこの部屋を利用しているので夜でも頻繁にこの老人の女装を発見されていたからだ。

この女装クラブの会長は30名ばかりの社員がいる商事会社の社長の玉ちゃんだが、この玉ちゃんのお世辞でも綺麗だといえない女装に感化された店の客6名で組織されたのが「西大路オールドニューハーフクラブ」になる。京都にも女装の店が数軒あるが、それは祇園や木屋町の歓楽街で往復タクシーを乗らなければならない。しかし、この店なら玉ちゃんが借りたマンションまでは徒歩5分程度で近所に住む会員には便利になっていた。

このクラブの会員の2番手に入ったのが、これも妻帯者で60歳のキャサリンになる。このキャサリンも自家用車に女装グッズを隠して密かに楽しんでいたが、ある日、玉ちゃんが女装で店に来たことから長年の夢が叶ったと玉ちゃんの弟子になっていた。そしてこの2人からウイッグを借りて記念写真を撮る男がなんと多いこと多いこと?そしてその中からさらに4名が会員となって

いた。

こうなると不思議な物でこのお化けのような女装が女性客に大受けして店のブログや掲示板で今夜は誰が女装で店に来ると書けばその女装のファンが店に来るということになった。この会長の持論は、

「そもそも、動物のすべては男のほうが綺麗でお洒落になっている。ライオンも孔雀もそうだ、これは子孫を残すためにはどうしても雌の動物に愛されなければならないからだ。しかし、人間社会では男女の賃金差別で女は一人では生きてはいけない。そこで動物と逆転して女がお洒落をするようになった」

しかし、これとはまた違う意見の老人女装もいた。モンローという66歳の女装は、

「私は、ただただ、女性の下着を身に着きたいという欲望というか?性癖になる」

また、69歳のアトムちゃんは、

「私は子供のころから母が目の前でストッキングを履いているのを見て育った。それはそれは綺麗な脚でそれが母そのものだった。その母が亡くなってからあの母の綺麗なストッキング姿にいつかはなりたいと思っていたが、その夢が会長のおかげで叶った」

ただ、この6名の中にはいわゆる「性同一性障害」と医者によって正式に診断された人はいないしそれにすべて女性と結婚をして子供もいる。しかし、自己診断では私は性同一性障害という人は3名いる。

この店の女性客の中には大手化粧品会社の美容部員も数名いるのでこのオカマ6人衆はイオンの中の化粧品売り場や店で化粧の相談や指導も受けていた。さらに、大手のランジェリーメーカーの「フラワー」の社員もいるので年2回開催される社販の入場券をもらい一流メーカーのブラとパンツを市価の10~30%でゲットしていた。

そんなころママの幸子が音吉に、

「マスター、マスターも女装すれば...私が化粧をしてあげる!」

「いやいや、俺はそんな趣味も性癖もない」

「でも、こんなお化け屋敷を認めたのは音吉どんよ!」

「いやいや、それは個人の趣味を尊重しただけで...みんなが楽しければそれでいい」

「それなら1回だけこのウィッグを被って」

と、こんな会話でつい音吉も悪乗りしたのが運のつきでその写真がLINEに掲載された。それを見た女性客から絶賛の声が届きついにこの音吉も「オカマのイナコ」として会員ナンバー7番をもらっていた。その写真が下にある。笑ってやってください。

♥ [働く女性たち...「老人女装の玉ちゃん」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 21話](#)





右、玉ちゃん 左、キャサリン

2人とも顔出しOKだが、自粛しました。



初ウイッグを被った日の笑顔・イナコ



オカマのイナコ

オカマのイナコの記念すべき写真

2017・3月14日

働く女性たち...「衝動買いの女 梨花」 私はお礼になんでもします...駆け込み寺居酒屋ポン吉  
40話

JR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」は16室のワンルームマンションも経営している。その家賃の振り込みは銀行だが、なんせワケアリの女性は銀行口座も開けない。そこで来月分の家賃は月末にマスターの音吉のマンションか店に持って来るシステムになっている。そのワンルームマンションの203号室の田辺梨花は最近度々家賃を月内に持ってこなかった。そこで梨花のケータイに電話するがそこには「お客様の都合で...」とつながらなかった。

音吉は日曜日の午後に部屋を訪ねた、幸い梨花はいたが、家賃を今月は待ってほしいという。この梨花は大学の4年間をこの部屋で過ごしていた、それに会社に就職して2年ほどでまだ25歳と若かった。音吉は玄関先で梨花に、

「家賃はともかく電話もつながらないが、いったいどんな生活をしているのか?」と聞いたら、部屋中に入れてくれた。その部屋の中は簡易の洋服ダンスが3本もありベッドの他はやっと2人が座れるスペースしかなかった。梨花は、

「もう私...バーゲンで安いのを見つけたら後先考えずに買ってしまうのです」

「そら~私もそうだが、しかし、梨花さんは京都でも老舗の製薬会社の正社員だから、そこらのパートの女性よりは生活は豊かになるが...」

「あの~家賃を1か月だけ待っていただけたら...私はお礼になんでもします」

「おいおい、私はそんなことは言ってはいない。とりあえずそこまでお金に困っているなら駅前がやっている店があるから、夜の食事ぐらいはごちそうします。その代わりにっては何んだが1時間はママの指図で野菜を切ったり、料理、それに洗い物をしてほしい」

こうして梨花は仕事が終わるとその帰りに1時間働いて食事をごちそうになっていた。その1時間の間にママの幸子に色々話をしていた。それによると今はまだカードとかのローンには手をだしていないがこれは時間の問題だと判断できる。現在は月々の給料を家賃も払えないほど使い込んだ程度でまだ軽症だと音吉に報告をしていた。その給料までは一週間ほどだからとりあえずは未納のケータイの分の1万円を音吉は梨花に貸していた。ただ店で正式にアルバイトで働くということは会社がすぐ近くなのでこれはできなかった。

やがて月末になり梨花は2か月分の家賃と1万円を持ってきた。音吉はこれでは給料の約半分がなくなる、なんなら後1か月は食事を店でするか聞いたが、梨花はなんとかやっていますと答えていた。その後、この梨花の勤める製薬会社の男の客から梨花の噂を聞いた。その客は音吉に、

「あの本社の受付に座っている可愛い女子社員だが、これはウワサだが、食事をごちそうになったら誰とでも寝るらしい...」

「えっっ、受付って田辺梨花のこと？」

「そうそう、その梨花、なんでも妻子ある同僚が食事を誘ったらその梨花は「お返しになんでもします」というのが口癖らしい...」

「そう、たしかに私にも「お返しになんでもします」といっていた。それで？」

「それでその同僚は冗談で祇園の近くの安井のラブホテルに行きませんかといったら「はい」と返事してそのままホテルに行ったらしい」

「ほう～そんな尻軽女だったのか...梨花は？」

そこでママの幸子が、梨花を店に呼び出していた。梨花はそのことをアッサリ認めて、

「だってママ、そんなこと当たり前になります。私は学生時代から男友達などとはすべて割り勘ということになっていました。社会人になってもそれは同じこと、しかし、私がたまたまお金がなかったらその分はなにかでお返ししなければなりません」

「それって学生時代から？」

「はい、みんな一生懸命アルバイトしたお金ですから、そんなお金を無駄にはできません。そこでお金のない人はその人にお返しをするのがルールになっていました」

「それは体で返すの？」

「いえ、それは相手が望むものですから、女性同士なら相手の部屋の掃除、洗濯、それに料理になります」

「ほう、なるほど...それはなかなか合理的ですよ～音吉どん」

こんな話をママの幸子から振られた音吉は、

「それはあかんやろ～とはいってもこんな男女同権の時代だから、男が女に御馳走するのは当たり前の中から一歩前進しなければならない」

「あらら、団塊世代の音吉どんらしくはないね...それとも梨花さんからの「お返し」がほしいの...」

「いやいや、それは違う。しかし、誰とでも寝るというのはよくない。なんぼ「お返し」といっても相手が既婚の場合は「不倫」になる、それに妊娠や性病の恐れもある」

この音吉と幸子のやり取りを聞いていた当人の梨花は、

「いえいえ、私が誰とでも寝るというのは大間違いで私が食事を誘われて付いていく人はやはりそれなりに好きな人です」

「しかし、こうしてその噂は社内中に広がっているというから...これはこれでまだ若い梨花には問題になる」

「いえ、そんな噂を私は気にしません。ところでマスター、私...またバーゲンで買い過ぎてしまいました。今月のお家賃を夏のボーナスが出るまで待っていただけませんか？、お礼はなんでもしま

すから...」

そこで幸子が、

「音吉どん、こんな若くて綺麗な梨花さんのお願いを聞いてあげたら？」

「それならそのお礼は私のマンションの掃除を週に1回程度してください」

「あらら、結局のところ梨花さんをマンションに連れ込むの？」

「ママ、だからこれからの時代は物事を合理的に考えなければならない。ママだって俺の部屋がいつも汚いといっているだろう...」

そこで梨花が、

「ママさん、それは大丈夫です。マスターは私の好きなタイプではないので絶対安心してください」

「.....」

★...画像はその私もまたバーゲンで衝動買いしてしまいました。定価2980円が750円と安く...しかし、後から考えたらそんなに安くはなく、品物もそんなにいいものではなかった。しかもこれはイオンのバーゲン会場で買ったがなぜかレジは別でバツタ屋の業者のようだった。「買う前にもう一度よく考えよう」



また衝動買いをしてしまった。2枚で  
1500円



## 働く女性たち...「黒猫ドライバーの女 通子」巨大宅急便会社に風穴をあける 駆け込み寺居酒屋ポン吉 38話

---

### 働く女性たち...「黒猫ドライバーの女 通子」巨大宅急便会社に風穴をあける 駆け込み寺居酒屋ポン吉 38話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」には毎日午後5時半ごろ必ずといっていいほど宅急便が届く。これは店のアルバイトの娘やこの店の近くにあるワコールや日本新薬、それにGSユアサのOL達が通販で買った物の届け先をこの「ポン吉」にしていたからだ。マスターの音吉はその荷物の宛先の女性にLINEで知らせればそれらのものが退社後にこの店で受け取ることになる。

この地区を担当している宅急便のセールスドライバーは黒谷通子でまだ若い27歳だった。音吉はこの通子が配達に来るとなにかと飲み物を出していた。ある日、その通子が二週間ぶりの休みになったというので店に遊びに来ていた。そして音吉に、

「いつもお荷物を預かっていただきありがとうございます。こういうお荷物を預かっていただけるお店がほうほうにあれば荷主さんにも早く届き、そしてこちらも早く配達ができます」

「そう、荷物を送る場合は色々な店で送れるが、配達を受け取り窓口はそんなにない」

「はい、そうです。ですから私はこの「ポン吉」さんを例に上げて営業所の上司に進言しました。たとえば荷受け手数料があるように、配達時の荷受けにもなにかしらの手数料をだせばこういうお店が増えてメーカーも宅急便業者も荷主も喜びます」

「そう、それに宅急便のドライバー不足、それになによりドライバーの労働時間が減ります。それで上司は？」

「はい、ドライバーはそんなことを考えずもっと働けといわれました」

「そうかもネ...どうせ末端の管理職というのはそんなもんです」

「それで私は東京本社の企画課にメールで同じことを訴えましたが、その返事もつれないものでした」

それから10日ほど経ったある日にその通子さんが、これが最後の配達になります。長い間お世話になりましたと挨拶しているので音吉は、

「あらら、宅急便のドライバーを辞めるの？」

「はい、実はこないだの本社にメールを送った件が京都支社で問題になり私が上司を無視したということで嚴重注意を受けました」

「まあ～そんなもんやな組織というのは、それで？」

「それで私は頭にきて会社に辞表を叩きつけて明日付で辞めます」

この音吉はこの宅急便のトラックを売る自動車メーカーの京都販売の営業部長だった。この京都が発祥の佐川急便が最初の1台目のトラックを買おうと思ったが、佐川急便はそんな信用がない

とどのトラックメーカーも月賦では売らなかった。ところが音吉の先輩の営業部長が「この佐川は信用できる男」と判断してトラックを売った。これに恩義を感じた佐川は「わしの目の黒いうちはこのメーカーのトラックしか買わない」といった逸話があった。そしてこの音吉はこの佐川急便や黒猫の担当になっていた。その縁で通子が勤めていた黒猫宅急便の本社幹部たちともかなり親しかった。

そこで音吉はその現職の幹部に電話をしている。音吉はありのままを話すとその幹部は、

「いや、そんないいアイデアは私の耳には届いていない」

「これを考えた若い通子というドライバーが明日で辞めるというが...」

「わかった、その黒谷さんの企画の実現を本人にやってもらう。今からすぐに京都本社にフックスでその黒谷通子を東京本社直属の京都支社企画部に配属するという辞令を出す」

「ありがとうございます。このことが社内中に知れ渡るとまた若いドライバーたちも素晴らしいアイデアをだすと思います」

「そう、ここまで会社が大きくなると風通しが悪くなる。その黒谷さんのおかげで我社も風が通りやすくなる」

この夜、最後の配達が終わったのが夜10時、通子は東京本社直属の京都企画課勤務の辞令を京都支社の支社長が直接営業所まで来て手渡していた。この本社直属というのは通子が勤めていた営業所の所長よりも社内の位は上になる。通子はポン吉の店が閉まる時間を気にして風呂にも入らず宅急便のユニホームのまま店にきた。通子はその辞令を音吉に見せながら、

「音吉さん、京都支所の支所長さんに聞けばなんでもこのポン吉さんから本社専務への助言があったとっていました」

「いや、それはそうだが、その本社を動かしたのはやはり通子さんの会社に対しての情熱があったからです」

「いえ、それは違います。でも、本当にありがとうございました」

「それで京都支社勤務はいつからですか？」

「はい、それはその準備のために3日間の有給休暇をもらいました。そしてそのあくる日から一週間東京本社の研修があります。そして京都本社に出向という形で京都勤務になります」

その話をこれまた横で聞いていたママの幸子が通子に、

「それはそうと着替えは持ってきたの？」

「はい、こうして紙袋に...」

「そう、それなら音吉さんのマンションでゆっくりお風呂に入ったら？」

それを聞いていた音吉は、

「おいおい、ママ、通子さんはまだ27歳でワケアリの女性とは違う。そんな世界にひきずり込むのはよくない」

そこで通子が、

「いえいえ、私も実は20歳で結婚しています。その夫も宅急便のドライバーでしたが交通事故で亡くなったのです。その彼の仕事を引き継いでこの世界に入りました。しかし、私もこのことをいつまでもひきずってはいけないと思いかねてからママに相談をしていたのです」

「しかし、それは私ではなくて次の彼氏に期待してください」

「いえ、それでは私は音吉さんになんのお礼もできません。それにママさんも「女性がけじめをつける時は好きな人に抱かれることだと」言っていました。そしてその瞬間から新しい人生が始まるとも...」

「そうか〜、女というのは一生の内でも何回も「けじめ」をつけられからいいよね〜」

この時、有線から閉店を知らせる「蛍の光」が流れた。幸子は、

「ささ、店は私が閉めますから音吉さんは早く通子さんをお風呂に入らせてあげて」

と同時に通子は着替えの紙袋を持って満面の笑顔で幸子と抱き合っていて喜んでいる。音吉は心の中で、

「しまった!またママの策略に...」



クロネコをなめたらえらいこと  
になりますよ佐川さん

働く女性たち...「男装の麗人 伊音」...最終処分の半額...駆け込み寺居酒屋ポン吉 39話

マスターの音吉は毎日のようにこの大手のスーパーに食材を買いに来るのが日課になっていた。その前に2階の衣料品売り場で冬物最終処分のような特価品を見つけては買っている。冬物、夏物なら来年の冬と夏に着られるからだ、ただ、音吉はそんなに貧乏ではないが、なぜか?安い物を買うということがストレス解消になると信じている変わった性格のようだ。

その冬物最終処分セールには当初価格の12800円の衣類が3000円で売られていた。音吉は淡茶のダッフルコートを選んでレジに持っていくとそのレジの女の子が、

「あら、**JR**西大路駅前の「ポン吉」さんのマスターではありませんか?」

「はい、そうですが...」

「いつも「洋風居酒屋ポン吉」のブログを拝見しています。店の前をいつも通勤しているのですが、なかなか女1人では入りにくくて...」

「そんなことはありませんよ～たいがい女性は1人のお客さんが多いですから」

「そうでしたか～ああ、このダッフルコートですか、これ午後4時半から30分間のタイムサービスで半額になります」

音吉が時間を見るとまだ3時だった、そこでそのレジ係はこれ私が買って今夜お店に持っていきますとなった。音吉はそれなら儲かった分の1500円でビールでもワインでもお好きな飲み物を5杯サービスしますと約束をしていた。その夜、音吉のコートを持って来た女性は「伊音」と名乗り年は25歳だと自己紹介をしている。この伊音は背がすらりと高い色白の美人だった。その伊音が持ってきたダッフルコートを店で着たが、ママの幸子も伊音もよく似合っている、それを店のブログに載せると幸子が写真を撮ってくれた。

その後、この伊音はママの幸子と気が合うようで週に2回は店に来るようになったが、そのママから音吉にこの伊音を週に1日だけアルバイトをさせてほしいという申し入れがあった。音吉は、

「はいはい、それはいいよ～伊音さんはまだ25歳とこの店では一番若いからすぐに人気者になる」

「あら、私が39歳で悪かったネ、音吉どん」

「いやいや、そんなことは言ってはいない...」

「ところがその伊音さんは店では男装ででたいといっているのよ～マスター」

「男装...オカマの反対の男装?」



幸子はその伊音から直接伊音の悩みを聞いていた。伊音はまだ医療機関などの診断結果はないが、自分はどうも性同一性障害ではないかと思っている。今まで好きになった人はすべて女性でまだ男性とのセックスはなく処女だと告白していた。それで「男装とレズ」の同好会に入って男装を密かに楽しんでいるといていた。

その伊音は火曜日に店に入るようになった。伊音は宝塚の男役のような衣装で現れたので女性客には大人気になっていた。そのスーツの胸の膨らみは元々貧乳らしくてそんなに目立たない、その時たまたま店にいた客の30歳の麗子と気が合うのか、その後、この2人でよく店に遊びに来るようになっていた。幸子の情報によるとこの麗子はレズだという。そこで音吉がママに、

「しかし、伊音さんの好きな相手は女性になるが、その麗子さんの好きな相手は男装の男になるので少しこれは矛盾するのではないかい？」

「そうよね～私もそう思って聞いたら、なんでも麗子さんは男装する女性が好きだからこれは矛盾しないといっていたわ...」

「しかし、麗子さんは伊音さんを女性として愛しているなら、これは伊音さんにとっては侮辱になるが？」

そうこうしているうちにこの2人は一緒に住むことになったという。そこで伊音は音吉に相談をしていた。伊音は、

「麗子さんは私がまだ男の人を知らないことに気を使ってまずは私がそれらのことを体験してほしいといっているのです」

「それらのこと？、しかし、伊音さんは男が嫌いなんですよネ...」

「はい、麗子さんがいうのにはこの世界に私を引き込んだ責任がある。私が男の人のあれこれを知った上でそれを判断してから私との同棲を決めてほしいというのです」

「つまり、一応女としての体験をした上でのことですか？」

その話を横で聞いていた幸子は、

「音吉どん...出番ですよ～」

「おいおい、なんで俺がそんなリトマス試験紙になるの？それでやっぱし男なんてくだらんと思われたら俺のプライドがズタズタに切り裂かれる」

「何をいっているの！音吉どん、伊音さんは若い処女ですよ！これから先に天地がひっくり返ってもそんなチャンスはありません。しかもここは仮にも「駆け込み寺居酒屋」といわれているのに若い女性が困っているのに助けないの...」

こんなウソのような本当の話になって伊音と音吉は南インターのラブホテルにいた。この伊音は男との関係はないが、レズの麗子にはかなり色々仕込まれているから音吉もそんなに罪悪感はなかった。そして音吉の愛撫に身を任せて無事に処女喪失の儀式は終わっていた。

それから数日した火曜日には伊音のアルバイトの日になったが、なぜか?伊音はいつもの男装ではなく高校の制服のスカート以外には履いたことがないという花柄のスカートを履いてきた。これに幸子は、

「伊音ちゃん...どうしたの?そのスカートは?」

「はい、ママ、どうも私は性同一性障害ではなく、私が勝手にそう思っていたけでした...」

「あらら、それはよかったけど...それはどうして?」

「はい、音吉さんに抱かれて私はやっぱり女だということがわかったからです」

「それなら麗子さんとのことはどうするの?」

「はい、それはそれとして麗子さんともお付き合いをすることになりました」

「あらら、まだ若いのに両刀使いなの?...それはそうとあの音吉どんはどうだった?」

「はい、それはそれは優しくて...ママ、音吉さんを私にください」

「伊音、あんたね~たった今、この店のアルバイトをクビにします!、二度と店にこないで!」

「.....」

なぜか?幸子のご機嫌が悪くて今回は後味の悪い結末になった。

## 1500円のヨートを着て喜ぶ伊奈利



一般的な値引きのサイクル

9800⇒7800⇒4800⇒最終処分の3000円



さらにタイムサービスで半額の1500円になる

働く女性たち 「壬生菜古漬けの女 華子」...純京漬物の古道駅 駆け込み寺居酒屋ポン吉」 37話

京都観光土産の一番の人気は「京漬物」になる。しかし、これらの有名漬物店の多くの漬物は京都以外の契約農家から塩漬けしたものを京都の工場加工、袋詰めされている。もちろん京都で加工されていれば「京漬物」にはなる。その昔は町内には必ず漬物屋さん豆腐屋さん、それに乾物屋はあったといわれている。しかし、もうこれらの商売はスーパーなどの進出でほぼなくなってしまった。

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉はこの漬物が好きで店用と自分用に自転車で10分ほどの漬物屋さんに週に1回は買いに行っていた。この店は江戸時代(慶応元年・1865年)からの創業でもう152年の老舗になるが、そんな能書きは店のどこを探しても見つかからない。店も農家の家のように派手な看板もなく遠慮気味に「壬生菜古漬け、朱雀屋」とあるだけだった。

この店の裏にはマンションに囲まれた畑があり、ここで野菜を栽培しているが、この畑だけでは漬物にするだけの収穫はないから同じ農家仲間が漬けた漬物を寄せ集めてこの店で売っていた。これを買うのは地元の人だけで仮に贈り物や土産にしたいといっても化粧箱も洒落た包装紙もなくナイロンの袋に入れるだけの質素なものになる。この店は老夫婦がやっていたが、今ではその孫娘の華子が野菜を育てたり漬けたりしていた。その華子がポン吉の店に遊びにきた。華子は音吉に、

「マスター、マスターの好きな壬生菜の古漬けを持ってきました。それに今年最後の「すぐき」もです」

「ほう、それはありがたい、そのすぐきは華子さんの畑のもの？」

「いえ、これは上賀茂の親戚が漬けたものです。もうこの京都で純粋に京漬物といわれるものはこのすぐきと柴漬けの紫蘇程度になりました」

「そうですね～中には中国産の野菜を加工して「京漬物」としているのもあります」

「はい、今日伺ったのは少し音吉さんにアドバイスしてほしいことがあって...」

この華子は四国の青年と恋愛結婚をして四国のある町に嫁入りしたが、子供がいないままに離婚して京都に帰ってきた。まだ42歳だった華子はその店を引き継いだか経営はかなり苦しかった。そんな折、東京の漬物店が店の看板を買い取るといってきているという相談だった。音吉は、「そう、その東京資本というのは京都の老舗の看板を買い取って、たとえば華子さんの店なら「創業慶応元年・京漬物朱雀本舗」として東京の出版社とタイアップして京都人も知らない有名店

にしてガッポリ稼ぐという商法になる」

「そうすると大量生産になるので近所のお爺さん、お婆さんの漬ける本当の意味の京漬物はなくなります。それに漬物を漬けてくれる約10数軒の農家の収入もなくなります」

「そうですよね～伝統と文化というのはその土地の風土やそこで採れたものをいうのです、それに京漬物の漬け方の伝承がここで終わってしまう」

音吉はこの老舗の看板を売ることに反対してこの漬物の販売をせめて20%程度上げる作戦を考えていた。それは、漬物を漬けてくれる農家の名前をその漬物に記して「山田トメ」「尾崎義明」さんの漬物という風に売る。そしてPCでの宣伝はするが、PCでの販売、地方発送はしない、つまり、店にこなければ買えない「京漬物の古道」という付加価値を付けることを提案していた。もちろんこれには「創業慶応元年・純京漬物」というブランド力を前面に出す。その漬物をナイロン袋に入れて売るということも京の文化にしてしまう。つまり、この漬物は京都の人々が毎日食べている漬物でこれが本当の「純京漬物」というブランドを作ってしまうのです。

これを聞いた華子は、

「それならなにも投資はいらない、ただPCで「これが本当の京漬物」という宣伝ではなくて記事にするのですね」

「そう、私が華子さんの店の漬物が大好きですが、これと同じ味を求める人々にしか売らないという大宣伝にするのです」

「これなら東京発ではなく本当の京都発の新鮮な記事になります」

「そうそれに、タクシーの運転手さんもこの店を知っていますから、観光客を案内してくれるかもわかりません。もちろん京漬物の本当の味、穴場としてネ」

こんな夢のある話で盛り上がっていたが、華子はもう一つ悩みがあるという、華子は、

「壬生菜の古漬けだけは私しか漬けていないのです。この古漬けというのは乳酸菌が自然発酵してできる発酵食品になります。ところがたまには新しい菌を入れないと味がまるやかにならないのです。この菌はやはり私の信頼する人の菌でなければ...」

「ほう、そうでしたか?それで新しい菌とは?どうするの?」

「はい、それは簡単です。音吉さんの菌を私の身体に移すだけです...その手を壬生菜の古漬けの樽に入れてかき混ぜるだけです」

これを横で聞いていたママの幸子は、

「あら、こんな音吉どんの老菌及び雑菌でよかったらいつでもお使いください」

これを聞いた音吉は、

「おいおい、老菌、雑菌とはひどい...」

「いえ、わたしももう42歳の古漬けになりました。こんな古漬けは音吉さんの好みではないのですか?」



「いえいえ、華子さんはとても綺麗で素敵です」

「それなら今夜その菌の培養をよろしくお願いします」

「うん...????...なんの話？」

そこで幸子が、

「音吉どん、最近私がああの接骨医(36話)に通っているんで相手にしないでゴメン、その代わりに華子さんとのことを私が許します。ささ、さっさと華子さんとマンションにあってよ、それともラブホ?それならタクシーを呼ぶよ!」

「おいおい、俺は種馬ならぬ、種菌か？」

この音吉の考えたアイデアは大成功して「京の本当の京漬物」として新聞、雑誌、それにテレビで取り上げられて「純京漬物の古道駅バスツアー」まで企画されて大繁盛したお話しをした。ちなみに「壬生菜の古漬け」には音吉の菌は絶対に入ってはいません。



京都市内では珍しいセリ畑

## 働く女性たち...「医療事務 詩織」...セクシーマッサージ 駆け込み寺居酒屋ポン吉」 36話

---

### 働く女性たち...「医療事務 詩織」...セクシーマッサージ 駆け込み寺居酒屋ポン吉」36話

石を投げれば接骨院に必ず当たるほどこのJR西大路駅周辺には増えた。またこれとは違ういわゆる町医者 of 電気療法にほぼ毎日通う男女の高齢者も多くいる。一方で女性を対象にした30分健康体操に通う人もいる。つまり、高齢者の足、腰を治療または鍛える姿はそんなに美しくはないが、微笑ましいものだ。

その地域にある「洋風居酒屋ポン吉」の客にも女の老人の客がかなり多い。これらは店のマスターがお目当てで嫁の悪口を聞いてもらえるのか開店の5時半には近所の健康体操のジャージ姿のままビールを注文している。その中の68歳の梅子さんが、

「息子の長男の嫁に詩織というのがあるが、その詩織は近所の接骨医のパートにでている。私はその接骨医にはいかないが、ここに通っている年寄り仲間に聞くとどうも嫁と先生との仲がいと噂されています」

「ほう、よくある三文小説の世界ですね...しかし、それは噂でしょう?」

「いえ、その接骨医は先生が1人で治療ベッドは3台しかないそうです。そのベッドに嫁が寝かされて何かをされているのを偶然私の仲間が見たそうです」

「それは暇な時間に詩織さんの腰や体をサービスで治療しているのかもわかりません」

「いえいえ、あの嫁から腰や肩がこったなんてことは聞いたことがありません」

そのころ丁度この店のマスターの音吉が50肩で左の腕が上がらなかったでその偵察を兼ねて治療をすることになった。その接骨医は民家を改造したもので受付にはその詩織がいた。ここは完全予約制で30分ごとに予約が入っている。音吉を治療しているのは60歳前後の青木という先生で欲目で見てもそんな女にもてるタイプではない。一方の詩織は30歳前後の色白美人でピンクのナース服がよく似合っていた。その青木が音吉に施術をしながら、

「近所の方ですか?」

「はい、駅近くの居酒屋をやっています」

「ああ、あのポン吉さんですか...私も一度は行きたい店だと思っていました」

この青木とポン吉はなんとなく気が合うのか?青木はそれからすぐに飲みに来た。青木は焼酎が好きでその酔い方も陽気でママの幸子もこの接骨医に通うことになっていた。青木もママが気に入ったのかそれから数回も店に来ている。そこでママが青木に、

「あの受付の詩織さんは綺麗な方ですね...」

「はい、それはそうですね...」

とこの件では青木はこの話には乗ってこなかった。それならなお怪しいと音吉が、

「あの詩織さんの義理のお母さんが、嫁が先生と不倫しているといっているのですが、先生はそれになにか覚えが？」

「いや～それはないようなあるような...しかし、マッサージが好きな女性でいつも週に1回30分はしています」

「ほう、マッサージですか？」

「そうですが...マッサージといえばマッサージです」

音吉とママの目を交互に見ながら青木は実は....

「あの詩織さんは医療事務の資格があって保険請求のすべてを任しています。ある時、詩織さんが健康保険証を持ってきて私にも治療をしてほしいというのです。それで腰の治療をしたのです」

「それなら別に...」

「それが...なんとなく奇妙なムードになって私は詩織さんにセクシーマッサージをしてしまったのです」

「セ、セクシーマッサージ？」

「はい、なんていうか...女性を感じさせるテクニックですが、これは私のまったくの趣味になります。ところがこれを詩織さんが気に入ったのか週に1回ほど前後に予約が入っていない時間に自分の予約を入れています。まあ～私も開業資金で借金をしていますので詩織さんがそれでいいというならと...」

「そ、それで青木さんは詩織さんとの...Hのほうは？」

「いえ、それはないです。指だけです...」

そこでママの幸子が身を乗り出して、

「先生、そのセクシーマッサージというのは別料金ですか？」

「いえ、別もなにもこんなことは元々やっていませんから、でも...ママなら国民健康保険の3割負担のみで腰と肩などの治療の名目で喜んでやらさせていただきます」

「あら嬉し、最近この音吉どんが私をかまってくれないの、ですから私は青木先生の治療を受けます」

こうして幸子も週に1回の治療を受けていたが、その詩織さんの姑の梅子さんには、

「梅子さん、心配しないで私もあの青木先生の治療を週に1回は受けているの、これがとても優しくて紳士ですから、そんな詩織さんとの不倫なんてのは絶対にありませんから安心してください」

「そうですよね～私もあの青木先生を素敵だと思っていましたから、駅前の接骨院から転院をしようと思っていたところです」

「そうなの～それなら詩織さんについて予約を取ることを私も勧めますのことよ～ホホホ」

そんなころ音吉の50肩もかなり良くなったので最後の治療で肩を揉んでもらっていたが、音吉、青木のどちらともなく、

「女っていうのは欲が深いというのか環境にはすぐに順応するからみなさん長生きされますね...」と、思いながら顔を見つめあっていた。その青木先生に治療してもらったママの幸子は血行がよくなったのか?、化粧ののりが良くなったのか?益々綺麗になっていた。





おいおい、なんぼマネキンだとしても  
裸で4時間の放置は人権侵害だよ!

働く女性たち...「無毛の女 高校女教師 純子」 駆け込み寺居酒屋ポン吉 35話

音吉は店の食材を買いに近所のスーパーをはしごしていた。公立の城南高校の裏側には非常出入口なのか鉄柵の門扉がある。この場所は校舎からも見えなくて教師や職員の喫煙の場所になっていた、その場所に目立たないように男の教師が煙草を吸っていた。このシーンはもう音吉は何回も目撃しているが、音吉も愛煙家なので見て見ない振りをしていた。

ある日、この場所を自転車で通りがかったが、その時、女性教師らしい人が、

「いゃん～音吉さんじゃないの」

と声をかけて来た。この女性は純子といってまだ30前後で数年前に店にきたことがあった。その後、結婚をしてからは音沙汰がなかった。その純子さんが、

「たしか～音吉さんはワンルームマンションを経営していたわよね...そこ空いてます？」

「いや～あいにく満室です。それよりもう離婚したの？」

「はい、25歳で結婚をして30歳で離婚するのです...今のマンションを売って夫と半々になります。それに4月からはこの高校に赴任しますのでその打ち合わせに今日は来たのです」

そして、その夜に純子さんはJR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」に遊びに来た。音吉は、

「あの高校の教師らが裏門で煙草を吸っているが...」

「ああ～あれネ、なんでも校長も教頭も愛煙家でそれに教師の約半分が煙草を吸うらしいの、それで学校の敷地の外ならいいという暗黙の了解らしいの」

「純子さんは前は煙草を吸っていなかったよね～」

「はい、夫のとの仲が悪くなってからイライラして煙草を覚えてしまいました。音吉さん、それより私の悩みを聞いてよ...」

純子は熱烈な恋愛をして12歳年上の男と結婚したが、その男の性癖がなんとアソコの毛がない、つまりパイパンが趣味だったという。純子もその男が大好きで風呂場でその毛剃りプレーを楽しんでいたが、その毛が生えてきたころにはチクチクして痛いということがあった。それなら一層のこと脱毛の施術を受けたらと夫婦が合意してある専門店でパイパンになったという。その後、夫が浮気したのが発覚して離婚を決意していた。純子も純子でそのころ好きな男ができていた。しかし、それは心の中の浮気でその男とはなにもなかったが、こうして離婚が決定してからは堂々とお付き合いするようになったという。

そこで純子が音吉に、

「実は...その男の人にネ、私の無毛のことをまだいっていないの...マスターはもしこれを聞いたらどう思います」

「うん～実は俺もその気があって前の妻に剃らしてくれと頼んだが、変態とってののしられたことがある」

「あらら、そうだったの、ほな私と気が合うじゃないの」

「いやいや、その手術というのは永久脱毛なの？」

「そう、もう絶対に生えないと医師は言っていましたから...」

「そうか～それこそ若毛のいたりやな～」

この店のママの幸子もこの話を興味をもって聞いていた、そして純子に、

「相手の人は独身なの？」

「はい、33歳ですが独身です。智也という名前とその人も他校の公立高校の教師です」

「独身なら正直に打ち明けたらとはならない問題よね～」

「そんなことをどういう顔でいうの～ママ、元々の無毛症なら病気でやむをえないとなるのですが...」

そこでママは純子にその智也をこの店に連れてきたらということになった。そして何気なしに音吉どんが、智也にパイパンはどう思うと探ったらということになった。音吉は音吉で趣味のパイパンの画像をネットからかき集めてスマホに保存していた。そして純子と彼は店にきた。純子はママと話し込んでいる間に音吉はそのスマホの画像を智也に見せている。そして智也に、

「私の趣味はこういうものだが、智也さんはこういうのは嫌い？」

智也は右隣に座っている純子を気にしながらその画像を見ている。そして、

「いい写真ですね～どうですマスター、私の保存している写真と交換しませんか？」

「ほう、智也さんもこういう趣味ですか？」

「ま～ま～しかし、こんなことは口が裂けても純子さんにいえないから二人だけの秘密にしませんか？」

「了解、男の約束です」

と、音吉と智也が盛り上がっているのを見て、ママは、

「あらら、二人で何か？いやらしい写真を見ているの？」

といって智也のスマホを取り上げて、それを純子に見せているので智也は大慌てでそれを取り返そうとしていたが、それは後のまつりだった。そして智也は急に元気がなくなってきた。

その智也を元気づけるために店の地下にある「スナック たんぽぽ」に誘っていた。そして音吉は智也に、

「実は～これ全部、私とママと純子さんが仕組んだドッキリでした」

「ドッキリ？～しかし、そんな恥ずかしいことを純子さんに知られて私は...どうしたらいいの」

「しかし、もし純子さんがパイパンだったらどうしますか？」

「そら～毎日が楽しいでしょうが、そんなことは絶対にありえません」

「そう、それなら今夜は純子さんをラブホテルに誘ったら...」

「いや～もう恥をかいたから無理でしょう...こんな変態の男に...」

「そんなことはない、ささ、店に戻って純子さんを誘いに行きましょう」

こうして純子と智也の目出度い初夜になったが、なぜかそれを見届けるとママも一緒に行くといっている。音吉は、

「おいおい、3人でラブホテルはないよ～ママ」

「何をいっているの音吉どん。4人ですよ、ささ、早く店のシャッターを閉めなさい」

「うん?...それならママのも剃らしてくれる?」

「はい、いいですよ...私は音吉どんの前の奥さんのように変態だとは思わないけど～剃るなら私と結婚してくれる?」

「.....」





働く女性たち...「雪女 ゆき」自己破産に自力で挑戦・駆け込み寺居酒屋ポン吉 34話

京都の金閣寺がある北とJR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」の南の標高差は約55mはある。これは東寺の五重塔が約55mだからこの塔と同じぐらいの所に金閣寺があることになる。たかが55mとはいいが南で雪がチラチラ舞えば金閣寺は積雪5cmの雪景色になる。そんな雪の夜に「駆け込み寺居酒屋」といわれているポン吉の掲示板に美山の「ゆき」という27歳の女性から今から美山を出発して明日の朝に京都に着きますという連絡があった。

ポン吉のマスターの音吉が時間を見ると午後10時だった。そこでゆきのケータイに電話するとゆきは、

「借金の追い込みの男たちが実家の周りで私の家を探しているという情報が友人からあったの。その男たちの車はノーマルで雪で動けなくなっているそうだが、明日の朝になると家に来るから今夜中に実家に迷惑がかからないように脱出するの」

「もしもし、脱出はいいが、もう美山からJR園部駅のバスはないだろう」

「はい、雪でバスも電車も動いてはいません。だから自転車で京都まで走ります」

「おいおい、車でも1時間半はかかる、それに大きな峠が二つもある。自転車では無理だ！」

「いえ、私はロードサイクルでインターハイに出場して優勝していますから、それと美山をでると山の中でケータイは圏外になります。音吉さん心配しないでゆっくり寝てください」

というなり電話は切れた。

このゆきは美山の高校を卒業したのちに京都市内のコンピューター専門学校を卒業して大手のアップルメーカーに就職をしていた。この会社で大手のカード会社のカードをもらいお洒落にかなりの金を使っていた。それが消費者金融のカードに手を出すまでに2年もかからなかった。毎月これらの返済に追われて同僚からの誘いもあり夜のスナックのアルバイトを始めていた。

その生活は派手になる一方で借金も雪だるま式に増えてその額も500万円を超えていた。ゆきはそれらを返すためにはより高給なセクシーキャバクラに勤めていたが、その時の客で会社の総務部の課長に見つかりゆきはあえなく解雇されていた。そしてついに闇金融にも手を出していたが、この闇金融が経営する売春クラブで働いて借金を返せという脅迫が連日あった。このゆきはまだそこまでは堕ちたくはないと駆け込み寺居酒屋で知られる「洋風居酒屋ポン吉」の音吉に相談をしていた。

音吉はそれなら「自己破産」をしてゆきの人生のやり直しを勧めていた。この自己破産というのは弁護士に依頼するのが普通だが、その弁護士費用ももはや工面できないというので音吉はゆきに、

「ゆきさん、それなら少し手間はかかるが自分で自己破産の申請をすれば3万円ほどでできる」

「でも...そんなこと私に...」

「いやPCで[「京都フラワーランジェリー物語 13話\(完\)」](#)で検索してその小説を読めば誰でも自分で自己破産できます。もうこれを読んで成功した人は数多いと聞いている」

ゆきは音吉のいう通りにこの小説を読んでいた。そこで決心してゆきは美山の役場に戸籍謄本を取りに実家に帰っていた。そして両親や家族に誰が来ても「もう京都地裁に託してある」といってほしい、それでもなんかあればすぐに110番してほしいという説得をしていた。なにはともあれ大至急「自己破産」の申請をして即日受理されればもう暴力団系の闇金融といっても手も足もだせなかった。その裁判所への申請が明日と決まっていたから、ゆきはこの大雪の中を自転車で京都まで走ってくるという。

音吉は友人の武竜という個人タクシーで国道162号線を美山に向かっていった。タクシーはチェーンを巻いて高尾まで来たがここから先は雪で通行止めになっていた。時計を見ると午前3時になっていたが、その通行止めの国交省の役人に聞いてもまだ女性の自転車、もしくは歩いている姿は見えないという。ゆきのケータイはまだ通じていないから山の中だと判断していた。

午前6時ごろタクシーのライトになにか人影が見えた。それは頭からすっぽり雪を被った女で顔は雪より白くまるで雪女が歩いて来たように音吉も武竜にも見えた、音吉は通行止めの柵から這って出て来たゆきを抱きかかえていた。ゆきは音吉のマンションで風呂に入ってやっと顔に血の気が戻ってきた、そして、音吉に、

「京北町の最初の峠の下りで自転車がパンクしてそのまま歩いてきたの、そんなことより裁判所に出す「上申書」を読んで」という。

そのゆき書いた「上申書」には、ゆきが最初に手を出したカード会社から始まりそれがやかで消費者金融になり、そして何に使ったか、その借金を月々支払うためにどんな仕事をしたか、そして暴力団金融から売春をせよと迫られたことまで事細かく書いてあった。そして最後には、もし自己破産が認められたら私は今後一生懸命働いて二度と借金をしないという誓約で終わっていた。そして債務者一覧表には14社565万円と書かれてあった。音吉は、

「よし、これは完璧です」

音吉とゆきは一睡もしないで午前9時の一番で自己破産の申請書を提出していた。裁判所の書記官はこのゆきと音吉が弁護士事務所の事務員と勘違いしたのか、

「ご苦労様です。はい、完璧ですから受理します」

もうこの受理が終わればよほどの詐欺的行為がなければ自己破産が認められないことはないが、この判決はこれより数か月はかかり、ゆきは新たな気持ちで当面は「洋風居酒屋ポン吉」でアル

バイトをすることになっていた。ゆきは美山から高尾までの8時間もかけて歩いてきたことを一生忘れないと音吉にも更生を誓っていた。

[...この小説にでてくる「京都フラワーランジェリー物語」↓から読める無料の電子書籍になっています。「京都フラワーランジェリー物語 13話\(完\)」音川伊奈利](#)



働く女性たち...「ダンプ姉ちゃん 理恵」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 33話

J R西大路駅前近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」の店の前の大通りには朝早くから大型ダンプが走っている。そのダンプの車体はピンクに塗装されて運転手はすべて女性だった。このダンプの会社は「田中建設」で社長は40歳の理恵だった。理恵のダンプ会社は50台の大型ダンプと4トンダンプを10台保有して京都府ダンプ協会の会長もしていた。

その理恵が駆け込み寺居酒屋といわれている「ポン吉」のマスターの音吉に会いにきた。音吉と理恵はその田中建設がまだ4トンダンプ3台のころに理恵が大型ダンプを1台買いたいと申し入れていたトラック会社の営業課長だった。そのころも不景気で理恵は京都にあるトラックメーカー4社の内3社から信用がないとローンでの販売は断られていた。その時に唯一営業課長の音吉の全責任として理恵に新車のダンプを売ることが半ばゴリ押しで東京本社に掛け合って理恵にダンプを売っていた。

その理恵が、

「音吉さんにあの時ダンプを売ってもらっていなかったら今の田中建設はありませんでした」

「いえいえ、それは理恵さんの人柄です。それにしても田中建設は大きくなった、いつも店の前を走るピンクのダンプを見ながらいつも理恵さんのことを思い出していました」

「実は今日相談したいのは音吉さんの店のブログや掲示板に女性のダンプ運転手の募集を掲載してほしいのです。特にワケアリの母子家庭や独身女性などです。母子家庭には母子寮、独身にも寮があり家賃は無料でそれこそバック一つで寮に入れます」

「そうですか～それはこの駆け込み寺居酒屋としても幅が増えます。しかし、ダンプというからには中型、大型免許がいるが？」

「その条件は普通免許の経験2年さえあれば中型も大型もこちらの費用で免許を取得できます。その免許取得まではなにかと仕事もあります、それに免許を取るまでは日当8000円は保障しています」

理恵はさらにこのダンプ業界というのは男女の賃金差別はまったくなく中型免許でも23万円、大型免許なら30万円を保障しています。実際には早出、残業代、それに年に2回のボーナスもありこれ以上になります、さらに母子家庭には京都府建設業界が運営している保育園も無料で入れます。

理恵そのものはダンプに乗る前は信用金庫の行員で車は軽四輪しか乗っていなかった。その理恵も前の夫からいじめられて離婚をしていた。2人の子供を抱えて当時日当8000円の田中建設の社長に拾われてダンプの修行をしていた。その後、この田中建設の社長として活躍してきた。

そして、この駆け込み居酒屋のような女性にやさしいダンプ会社を目指して来た。

さらに今の大型ダンプは運転にはなんら筋肉など使わなくてもいいほど楽に運転はできますから女性の仕事にはピッタリなんです。みなさん思い思いのファッションと化粧でバリバリ働いています。音吉は、

「そうですね～ただ女性のダンプ運転手募集だけでは人は集まりません。こうして理恵さんや母子家庭の運転手さんが元気で働いているという生の情報がなければ...」

「そうです、それで悩んでいる女性に大人気の音吉さんのブログになにかと記事を掲載してほしいと思ったのです」

こうしてポン吉のブログには現在大型ダンプの運転手で働いている母子家庭の生活や仕事の内容が次々紹介されていた。そしてなにより女性に関心がある工事現場のトイレや更衣室、それに休憩所の諸問題も画像付きで紹介されている。それは今まで男の現場では女性には耐えられない不潔なトイレが一般的で当たり前だと思われていたからだ。


理恵はこの問題を20年に渡って大手ゼネコンや京都の中堅建設業者、それに国交省、労働局まで日参して訴えてきた。その成果はやっと実になってこのほど国交省から「女性が働く工事現場には必ず、女子専用トイレと更衣室及び休憩所を設置するように」と決まっていた。しかし、これは公共工事現場に限るという制約もあるが、理恵は京都府ダンプ協会の会長として女性が一人でも働くすべての工事現場には適用するようにと運動をまだ続けている。

音吉は、

「東京五輪まで後3年、音吉のように団塊世代の工事現場の熟練技術者、職人も70歳を超えて大量の退職者が予想されている。こうなればどんな工事でも女性の手を借りなければそれこそビルも橋もできなくなる」

「そう、音吉さんのいう通りになります。それには女性が元気に働ける環境が一番になります。建設業界はビルも橋も作るのにそこで働く女性たちの母子寮や保育園さえ作らないのは建設業界の自滅になります」

こうしてポン吉のブログを見た女性たちはダンプ運転手に限らず、重機のオペレーター、鉄筋工、とび職、ガードマンになりたいという人まで現れてその返事に田中建設の理恵は嬉しい悲鳴を上げていた。今、建設業界はこの人手不足にロボットの活用を考えているようだが、女性を活用してその技術を後世に伝えるという考えのほうが正しいと音吉は思っていた。

 [...この小説の完結編は「トラック3姉妹・ダンプ姉ちゃん理恵」にあります。この小説は無料の電子書籍で超ロングヒット中で完読者は1万人を超えています。](#)





建設業の方々

読んでネ〜♪

♥働く女性たち...「痔の女 ひふみ」 駆け込み寺居酒屋ポン吉 3 2 話

音吉は毎日ように店の食材を近所の手スーパーで買い物をしていた。野菜は産地直送の専門店、魚類はこれも専門店の「魚嘉」になる。そしてサービスカウンターで煙草を買っていた。ここは約150種類の中の煙草の番号を告げるシステムで音吉は「123」番といつもいていた。

このカウンターには常時10名ほどの女性がかかり忙しく働いているために煙草を買う客となかなか目が合わない時もあった。ところがいつのまにか同じ女性が音吉が煙草の番号を言う前に「123」の煙草が目の前に出されていた。この女店員は30歳前後で真っ黒な髪にストレートパーマをかけている上に化粧も少し派手目になっていたから遠くからでもすぐ発見できた。

音吉はその色白の美人に、

「いつもお綺麗ですね...」

「はい、ありがとうございます。お客様はいつも3時45分ごろにここにこられますので私はいつも時計を見ながら煙草売り場を見ていたのです」

音吉はこの店員の胸のネームを見るとそこには「ひふみ」と書いてあったのを見ると同時にその「ひふみ」が、

「お客様のお買い上げの煙草が123番なのでつい覚えてしまったのです。私は1月23日生まれのために両親が「ひふみ」と命名したそうです」

数日後、JR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」の店の前を「門掃き」していたら偶然にもこの「ひふみ」さんが店から駅へ歩いていた。そのひふみさんは、いつもならこの道路の東側を歩いて帰るが今日は珍しく西側を歩いてきてよかったと偶然の出来事を喜び店に入ってきた。それから週に1回は店に来てママの幸子と気が合うのかなにかと幸子に悩みの相談を持ち掛けていた。

ひふみの悩みを幸子に訴えていたが、その悩みとは、

ひふみは大学を卒業して大手の冷凍食品のOLになった。営業部に配属されてからは外回りが多くてその1年後に肛門に歩いていられないほどの痛みがあり母親に連れられて肛門科にいった。診断は「いぼ痔と切れ痔」となり最低でも二週間は入院しなければならないという。その病名を会社にいうことさえできずにひふみは退職して痔の手術を受けた。それから2年ほど経ったころひふみにも恋人ができて結婚を前提に婚前旅行した。

その婚前旅行で相手の男から、

「なんや〜ひふみは処女でなかったのか？それに尻の穴が真っ黒で気色が悪い」といわれてその夜

はショックで一睡もできなくてその朝一番に彼と別れて一人で帰って来たという。その悩みに幸子は、

「なんて男なの?今時に処女崇拜の男がいるの?それに「尻の穴が黒い」というデリカシーのない男なんて...そんな男と結婚しなくてよかったじゃないの...ひふみ」

「でもね~やっぱり私のお尻は7年前の手術の傷口が黒くなっているらしいの...今でも時々痛くなって薬を付けているの」

「でも...そんなことぐらいは誰でも経験しているから気にしないで...ひふみ」

ところがこのひふみにも新しい恋人ができてこれもやはり結婚を前提にお付き合いしたという申し入れがあったという。これも当然ながら婚前セックスを求められているが、前のことがあってそれもできないという深刻な悩みだった。幸子は、

「私だったらこの婚前セックスは受けるは...だって相手がどんな性癖かもわからないじゃないの、それに肌の相性もあるしね...」

「それは相手も同じだから、もし、また私のお尻が黒いと分かったら...」

幸子はマスターの音吉に一般論としてこの問題の相談をしていた。音吉は、

「この痔の手術のことを正直に打ち明けたらどうかな~」

「そんなことをいったら、相手がそれを気にしてお尻の穴ばかりに目がいきます...それは女にとってはガマンができません」

「しかし、そのお尻が黒いって本当のことなの?俺はまだ幸子の肛門は見ていないからわからないが...」

「もう、音吉のどアホ!...しかし、それもそうよね~手術してもう7年だから、それにひふみさんも被害妄想で黒いと信じ込んでいることも考えられる...そ、それならマスター一度ひふみさんのお尻を見てあげたら?」

「おいおいおい、なんで?俺が人の尻を見るの?」

「だってここは駆け込み寺といわれているのよ、この「痔」は「やまいだれ」に寺と書くのよ、だから当然ながらこの店のマスターがお尻を見るのです」

こうして音吉はひふみの尻を覗くことになった。ひふみは音吉のマンションでお風呂に入りベッドでお尻の穴の周りを丁寧に観察してもらっていたが、ひふみにいった結論は、

「ひふみさん、手術の後なんてどこにもないです。それに色も肌の色で黒いと思っていたのはひふみさんの思い込みでした...綺麗な肛門です」

というひふみは涙を流して喜び音吉に抱き付いてきた。それから数日後に煙草を買いに行ったが、ひふみは、

「音吉さん、ありがとうございます。無事に彼との婚前交渉も成功して結婚の日取りも今年の秋にきました」

「そうか~それはおめでとう」



## 「下ネタに…」

最近、「働く女性たち…駆け込み居酒屋ポン吉」の小説が「メンズパンツ」「痔の女」と下品な下ネタになってきました。これにはかなり反省して次回からは「清純」な愛の小説を書きたいと思っはいるが、さて、どうなるかはわかりません。尚、画像はまじめなNHKのものです。  
(ためしてガッテン) より



これは...目からウンコが落ちる  
ぐらいのいいお題だ〜!



## 働く女性たち...「お年寄りにやさしいメンズパンツ 律子」...駆け込み居酒屋ポン吉 3 1話

---

### 働く女性たち...「お年寄りにやさしいメンズパンツ 律子」...駆け込み居酒屋ポン吉 3 1話

駆け込み居酒屋と有名になった**JR**西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉は68歳になっていた。見た目には若くは見えるが、やはり年のせいかな？小便が近くなってきた。それも小便がしたくなったらすぐに膀胱が痛くなるほどしたくなるのでいつもトイレに駆け込んでいた。

しかるに音吉はジーンズとロングパンツ、それにボクサーブリーフの3枚を履いている。つまり、ナニが表にでてくるまでは3枚の関門を通らなければ小便ができない構造になっていた。その3枚ともナニの出口が微妙に違う、しかも寒い冬はナニが縮小しているので左手の指で引っ張り出すという行為がなかなか難しい。そうこうしているうちに間に合わないこともしばしばあった。こういう時は子供が小便をするようにズボンと下着のすべてを下に降ろして用を足すことになる。

これが家であったりまたパジャマなら簡単だが、外出先のトイレではちと恥ずかしくなる。これらを解消するには最低でもロングパンツとボクサーブリーフの出口が同じコンビになった下着を開発してもらわなければならない。もちろんこの音吉の悩みなどは若い人にはわからないが、この先高齢社会になればこれが必要になるとこれらを書いて「フラワー」のお客さま相談室にメールで送った。

この「フラワー」とは西大路駅前にある一部上場のランジェリーメーカーだが、最近、メンズの下着にも力を入れているということを聞いていたからだ。しかし、その返事はつれないものだった。

「我社にはメンズ下着が多くあります。それらの中から選んでください。係は、今井律子」

その夜。たまたまフラワーの女子社員が店に遊びにきたのでこのメールを見せていた。その女子社員は、

「この今井律子さんなら私と同期で仲がいいです」

そこで次にここに来るときは誘ってきますということになった。

そして何日か後にその律子さんはポン吉の店に来た。律子はお客さま相談室の前の勤務は本社受付で働いていたというほど色白の美人だが25歳でこの部署に配属されて5年目だという。律子は音吉に、

「私もその音吉さんのメールを見て私の祖父にこんなことはあるかと聞いたのです。するとまっ

たくそれで困っているという返事があったのです。それで上司にこれは研究の価値があると進言したのですが、その上司はそんな年寄りの下着を開発しても儲からないといったのです」

「そうでしたか...実は私もフラワーでは無理とは思ったが、なんせ近所ですからメールをしたのです」

「ところが、私...来月から商品開発部に配属されることになったのです。ですから、私がお年寄りの下着を開発します」

「ほう、それはありがたいが、若い女性では無理になる。なにせナニのことですから...」

「そうですね～しかし、マスターの音吉さんなら安心ですから私がなんとかします。音吉さんも協力してください」

「おいおい、そんな年寄りでもないが...まだまだ若い女性の尻を追いかけているよ...なっママ」  
そのママの幸子も、

「そうよ～マスターなら安心、それにもし商品が開発されたら「音吉ブランド」として有名になるかもよ～ホホホ」

数日後、こうして音吉は商品開発部の部屋に通されていた。そこには女性ばかりで律子と他に3名の若い女性がいた。その部屋は暖房が効いているのか少し暑いぐらいだったので音吉は、

「あの～これではナニが縮小しないのです。実は普通の時でもナニは出にくいのですが、やはり、縮小している時こそこの研究になるのかも...」

「そこらへんが...私たち女性には理解できないのよね～」

この日は実地調査は行われず聞き取りの調査とマネキンを使った実験だけで1日が過ぎていた。律子は、

「それなら私が音吉さんの自宅で調査します」

ということになった。

律子が実地調査に来るといので音吉は部屋の窓を開けて冷気を入れていた。この日は雪がチラチラ舞う日で部屋中温度は8度だった。律子にだすコーヒーも冷たくしていた。音吉はジーンズではなく普通のズボンとそれぞれ違うメーカーのボクサーブリーフとロングパンツを履いていた。もちろんナニは縮んでいる。音吉は立小便をしているという設定で律子は前で座りそれを見ていた。

やはりこれはなかなかでないが、その原因は2枚目のロングパンツと3枚目のボクサーブリーフの窓の位置が微妙に違うためにその出口が指で探ってもひっかからないということがわかった。そこで律子は持ってきた自社のパンツを履かしていたが、これもまったく同じだった。律子は縮んだナニを見たのは初めてだった。もちろん30歳だから過去に恋人がいたが、それは立派になった時しか見るチャンスはなかったからだ。律子も音吉のパンツに指をいれてナニをひっぱりだそうとしてたがそれは慣れていないので無理になる。

次に縮小時ではなく普通の状態を見たいと律子はいうので窓を閉めて暖房を入れた。そうすると普通のナニに復元したが、それも音吉のいう通りでなかなか出すのには苦労している。これも律子が指を入れて出そうと思ったがこれは先の縮小時よりは手の指にナニの反応はあったが、やはり3枚目のパンツの窓に指がひっかからなかった。律子は少し考えていたが、このロングパンツとボクサーブリーフ及びお年寄りがよく履くトランクスとの統一した窓の規格とその窓の縁が指に引っかかりやすくすればこの問題は解決すると考えていた。そうなるとセットで買わなくなるからこれはこれで儲かることになる。

その音吉のナニは律子に触られて少し反応してきたが、これを必死に堪えている姿に律子は悪ふざけをしてきた。窓からでたままになっているナニをパクリと啜えたものだから音吉はたまらず、

「り、律子さん、それは反則です」

「いえ、これは縮小、普通、勃起の三段階の研究になります」

こうして律子は「お年寄りにやさしいメンズパンツ」の新商品の開発企画を上司に提出していた。この上司も定年前だが、この問題を抱えていたからこの企画は通り、現在商品開発部がさらなる研究をしていた。そしてその試作品を持って律子はまた音吉のマンションに来ていた。



カラフルなボクサーブリーフ

働く女性たち...「バニーガール うさ子母娘」駆け込み居酒屋ポン吉 30話

音吉の店「洋風居酒屋ポン吉」の客はどちらかといえば男より女性の方が多い。それはこの店が駆け込み居酒屋という女性に優しい店だからかも知れない、その悩みを相談され解決をするのはいつのまにかママの幸子の役目となっていた。店はカウンターとテーブル席とで20席とやや狭い居酒屋になる。

この店に金閣寺から来た45歳前後の上品な女性がママに相談を持ち掛けている。この女性は「うさ子」といい店のブログを数年前から読んでいいながら幸子に、

「あの～バイトとかパートでなく私と娘をこの店で週一回程度使ってほしいのです...」

「それならなにかの店をされるのでその修行ですか?」

「いえ、少し恥ずかしいのですが、私たち母娘は...なんていうか...露出症というか、実はバニーガールのコスプレが大好きでいつも家では主人を相手に楽しんでいたのですが、主人が昨年急死したもので...やはり、こういうものは男の人に見てもらわなくては...刺激がないので...」

これを聞いたマスターの音吉は昔大ヒットしたテレビドラマ「愛の水中花」を思い出していた。この主演の松阪慶子がこのバニーガールの役で音吉は大ファンだったからだ。それで音吉もこのバニーガールのいる店によく通っていた。そんな店も京都ではもう少なく音吉は懐かしく思いこの母娘の申し入れを快く許可をしていた。これを知ったうさ子は店の掲示板にうさ子の二十歳のころのバニーガールの画像を載せていた。これを見た音吉は、

「たしか～この写真は俺が撮ったものだ、店は祇園のクラブ「貴公子」だったと思う」それをうさ子に確かめるとそうだとわかった。

そしてこの二人のバニーさんのデビューの日が決まりその画像とともに案内をすると店は男の客で満員御礼の上、ポン吉名物立飲みも行われていた。この母娘は自宅で着替えてコートをはおり店の前のコインパーキングで待機して出演の時間を待っていた。午後9時からの初の顔見世バニーガールショーの時間通りにこの母娘のバニーさんは拍手に迎えられ店に入ってきた。母親のうさ子は真っ黒なバニーさん、娘の沙織はピンクのバニーさんで可愛いセクシーポーズと満面の笑顔を楽しみなく客に与えていた。

常連の家具屋の74歳の会長はやはり母の色気がいいのか?1万円札のチップをうさ子の胸の中に差し入れていた。うさ子はそれに応えるように白い豊満なオッパイを会長の鼻先に押し付けていた。やはり若い客は沙織に千円札のチップをこれまた豊満な胸に次々差し入れていた。約30分のお披露目興行が終わったので音吉はこの店の地下にある「スナック ひまわり」で話をしていった。うさ子は、



「私が大学生のころアルバイトでバニーさんを数か月していたが、その時の客の視線が心地よくてそれから家でそれを楽しんでいたの。それから結婚をして沙織が生まれてその沙織が音吉さんが撮ってくれた唯一の写真を見つけて私もお母さんのようにバニーの姿になりたいといったのです」

「そうでしたか～もうあれから25年、私もうさ子さんのバニーが見たくてよく通ったものです」

そこで沙織が、

「母娘ともこれにハマッテしまって父親を相手に家で遊んでいました。私たち母娘はなんていうのかしら～二人とも軽い露出症なんです、母は45歳にもなってまだ胸の谷間を露出した服にミニスカートで買い物をしていますので近所では色気おばさんと陰口を叩かれています」

「ほう、それはいいことです。女が色気を忘れたらもう終わりです」

「音吉さん、これからも月に2～3回はこのバニーさんの姿で店に遊びにきてもいいですか？」

「はい、それはもう～私も元々、バニーガールが大好きですから～」

そうことしているうちに沙織が彼氏とこのバニー姿のままデートするのだという。そして彼氏が車で迎えにきた。うさ子はお酒を飲んでいるから車は明日の朝取りに来る。それにこの姿ではポン吉に戻れないから音吉のマンションで着替えさせてほしいというが、音吉は、

「いや～それは...そんな姿で部屋の中をウロウロされたら私も男ですから...」

「あらら、ウロウロなんて...失礼ですよ音吉さん、25年前は私の変なところをなぜなぜしてくれたのに？」

「そうでしたね～しかし、このまま二人で消えるとなにかと問題が発生します」

「やはり、45歳の色気おばさんではダメなんですか？」

「いやいや、まったくそういう意味ではないのですが...」

「もう、私のハイテンションな気持ちを抑えることはできません。店に戻ってあのチップをくれた家具屋さんの会長と今夜デートします」

これに根負けした音吉は、「ただ着替えるだけですよ!」と念を押してから店から徒歩8分の音吉のマンションまで歩いてきたが、なにせ HALF コートの下からニョキリと素足がでて、それに派手なヒールに頭には大きな耳が...前から駅に向かって歩いてくる人たちもビックリして二度三度振り返っていた。そこに店の常連客がいたからこれはすぐにママの幸子の耳に入った。

幸子はすぐに音吉に電話をしていた。

「もしもし、音吉どん。また浮気どすか？」

「いやいや、うさ子さんが着替えをしたらすぐに店に戻ります」

「あいにく店は超満員でもう立飲みのスペースさえありません。マスターはもう上がってください」

というなり電話は切られていた。



松阪慶子



これを可愛くてセクシーだと思う私は異常ですか？それとも正常ですか♡

働く女性たち...「美容師の復讐 理子」...駆け込み寺「洋風居酒屋ポン吉 29話

駆け込み居酒屋で有名な「洋風居酒屋ポン吉」の店の道路の向かい側の角地には京都の美容室チェーン「くるみ美容室」の西大路店がある。この店の店長でもある35歳の理子はこの居酒屋の常連客でもあった。店のママの幸子らもこの理子先生の客でかなりこの美容室は繁盛していた。ある日、理子が浮かない顔をして店に来た。マスターの音吉は、

「どうしたん...店の営業時間中に？」

「マスター聞いてよ、私があこの店の店長から山科の店に転勤でそれも店はセット椅子が3台の店でこの「くるみ美容室」チェーンの5店舗の中でも一番客数が少ない店よ〜」

「ほう、それまたなんで？たしか〜理子先生はこの店のベテランで美容学校を卒業してもう15年も勤めているのに...」

「それがね〜オーナーの二代目で谷山洋一というのがいるのだけど、その45歳の社長から私が誘惑されたの。そんなのまったく趣味でないから断ったらこの左遷のような人事になったの」

「ほう、振られた腹いせの報復人事なの？」

「はい、それに副店長だった直美とそのオーナーができたらしく、その直美をこの西大路店の店長にしたの〜もう、あんなに面倒を見た直美に裏切られて...それで店に辞表を叩きつけて辞めたの、もうなんか復讐をしないと腹の虫が収まらない...」

この話はこの地域のサザエさんといわれているパン喫茶のママ発のニュースとして学区中の噂になるのには一週間もかからなかった。またこの噂話はこの地域密着型の洋風居酒屋ポン吉の客にも知れ渡っていた。その話を聞いた常連の74歳の留吉がオーナーをしているワンルームマンションの1階のテナントの借主が経営不振から夜逃げしたとこで、しかもその店は美容室とネイル専門店だった。つまり、店は狭いがセット椅子が2台とシャンプー台、それに美容器具一式がそのまま残っているという。

さらにこの店は理子が勤めていた「美容室くるみ」とは5軒ほど離れるだけの立地条件になる。理子はこの店に勤めて15年にもなるが、どんなに忙しくても残業をしても月に20万円以上の給料はもらったことがないという。そのために貯金も僅かしかなかったが、これなら改装費はほとんどかからず、しかも家賃は8万円という格安だったので店をオープンすることになった。

この話を聞いた新店長の直美は激怒して開店準備中の理子に文句をいいにきた。直美は、  
「理子さん、15年もお世話になった店の目と鼻の先で商売をするなんて常識が外れているわ...」

「なにをいっているの、直美こそ妻子がいるオーナーとできているじゃないの...」

「それとこれとは話が違います。それに理子さんは店の顧客の情報を無断で持ち出して開店のお

知らせを郵送しているでしょう。しかも、店の名前は「理子の美容室」というが、理子先生として有名になったのは「くるみ」のおかげよ!]

この話も京雀のかっこうの材料になり、理子先生が1人で店をするのだからみんなで時間が合わないように連絡を密にしましょうと「理子の美容室」のHPの予約の欄にそれぞれが判断して記入をしていた。それでオープン初日から約一か月分の予約が埋まっていた。この客というのはもちろん元「くるみ美容室」の客だったために直美店長の「美容室くるみ」は閑古鳥が鳴いていた。

店が月、火と連休になる月曜日に理子はささやかな店の開店パーティーを音吉の店でしていた。これは音吉の提案で会費制として近所の有力マダムを招待していた。そのパーティーの挨拶で音吉は、

「これはどんな商売でもそうだが店が流行る流行らないのは扱っている商品が安いとか高いとかではなく、その店の店長のキャラ一つにかかっている。それが店の人格になり人々は安心してその店に行けるようになる。この理子さんはその磨き上げた美容の腕もそうだが、やはり理子さんという人格があってこそ、このように沢山のファンが新開店の店にかけつけたくれたことでもわかります」

という挨拶と乾杯でパーティーは始まっていた。

やがて1年が経って「美容室くるみ」は経営不振で西大路店を閉鎖することになった。理子はこの店の7台のセット椅子と5台のシャンプー台のままここを借りたいとビルのオーナーに交渉をしていた。これらも売れば中古としての商品価値はあるが、その他の撤去費用を考えればトントンになるというのでビルのオーナーと「美容室くるみ」の社長とが話し合っただけでこれらが無償で理子に譲ると決定していた。そしてその代わりとして美容師の直美以外の5名をそのまま理子が雇用することになった。もちろん、看板は「理子の美容室」になる。理子先生わずか1年でセット椅子7台の美容室のオーナーになったのです。

そんなころ理子が最高級の赤インを持って音吉のマンションを訪ねて来た。音吉は理子にこのマンションを教えたこともないのにと不思議がっていたが、理子は、

「このマンションはママの幸子さんに教えていただきました。私はどうしても音吉さんに恩返しをしたいと幸子さんに前からいっていたの。それなら音吉さんが好きな赤ワインと料理を持って、それに音吉さんが泣いて喜ぶ...あの～その～」

「もしもし、理子さん、私はそんな理子さんにお礼を言われるほど今回の件では活躍はしていない」

「そんなことはありません。前の店のビルのオーナーも「くるみ」のビルのオーナーも音吉さんから頼まれて私にテナントを貸したと白状してくれました」

「そ、それは～まま、あいつらとは私は友達だから...」



そこにママの幸子から電話があった。幸子は、

「その理子さんね～私からマスターへのバレンタインのチョコです。ゆっくり味わって食べてね～そら～私も音吉さんが大好きだけど、やはり美味しいものは私が独占しないでみんなで分かち合おうと話あったの...わかった音吉どん、女に恥をかかすとどうなるかはわかっているよネ...」

こうして幸子からのチョコのプレゼントと赤ワインを味わうという音吉にとっては最高のハッピーバレンタインデーとなった。



理子の美容室西大路店

働く女性たち...「赤ちゃんポスト 涼子」(こうのとりのゆりかご) 28話

駆け込み居酒屋として有名になったJR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」のブログ及び掲示板には全国からの女性の深刻な悩みの相談が月に10回は来ていた。このブログのコメントや掲示板は公開されているのでプライバシーに問題がある場合はマスターの音吉やママの幸子のEメールでのやり取りになっていた。

その掲示板には宮崎の23歳の涼子が18歳から23歳の5年間住み込みのスナックのホステスをしていた。そしてまじめに働いてお金も少しは貯まったので京都の音吉さんのマンションに入居したいという簡単な問い合わせだった。音吉の経営するワンルームマンションは1棟16室で今は満室だが、来月に一室空くがこの部屋の元の女性が再婚するために家具や電化製品、それに調理器具、ベッドまで置いていくといっているのだからどうかという「涼子」は喜んでそれらを使わせてほしいといった。

そして部屋が空くと同時に宮崎からダンボール5個の涼子の荷物が届いた。本来入居には親または兄弟の保証人が必要だが、この音吉はここに来るすべての女性が訳アリだと知っているからそれらも要求しなかった。この涼子も他の仕事が見つかるまでは週に3日は店を手伝うようになっていた。この涼子は色白美人の上になんせ23歳と若いから駅近くの一流の会社の独身サラリーマンの話題の人になるのには半月もかからなかった。

この涼子のアルバイトは週に3日だから残りの4日はほとんど外出していた。幸子も涼子が京都観光をしているぐらいだと思っていたが、ある日、涼子は幸子に身の上話を打ち明けた。

この涼子は母子家庭で育ち生活保護を受けていた。高校に進学したころ家が生活保護を受けているというのでなにかと「いじめ」を受けていた。そして登校拒否にそうなる不良からの誘いがありこの転落への道筋はここに書かなくても相場が決まっている。そのころ二つ上の俊也というトラック運転手の安アパートで同棲をしていた。やがて涼子は妊娠に気が付いたが、すでにその時は妊娠七か月で医師からは墮胎は無理だといわれていた。この二人は生まれてくる赤ちゃんのために産着などの用意はしていたものの知識はまったくなかった。

そんなころ涼子が急に産気づきアパートで女の子が生まれた。俊也も涼子も気が動転してその赤ちゃんを産着と毛布にくるんでとりあえずは俊也のトラックで走り出した。涼子はてっきり近所の病院に行くのだと思っていたが、俊也の行先は隣の熊本県の病院の「赤ちゃんポスト」だった。そこにまだ名前もついていない女の子は俊也の手で入れられていた。

涼子は産後すぐの出来事になんら抵抗もできないままに俊也のことを黙って聞いていた。

「涼子、お前はまだ17歳だ、俺も若い、こんな俺らに子供を育てることはできない。お前もそうだが、こんな貧乏人の家で生まれたばかりに俺は中卒で働いた、涼子もそんないい目はしていない、この女の子もいずれ涼子と同じ人生になるより、どこかの金持ちに育てられたほうがいいに決まっている」

その数か月後に俊也は交通事故で亡くなっていた。涼子は住み込みのスナックのホステスとして5年間を暮らした。幸子はこの涼子のお話を涙を流して聞いていた。そして、涼子、なぜ京都に来たの？」

「はい、それからテレビの「赤ちゃんポスト・こうのとりのゆりかご」という特集番組を観たの、その時に5歳の女の子が特別養子縁組をして京都府のどこかで元気に育っているという話があって、もしかして私の子供かと思いこの京都にきたのです」

「しかし、それって～涼子の子供を探しているの？これはこれで問題よ...」

「いえ、探しているというより、同じ京都で同じ空気を吸いたかったの」

「う～ん、それも、わかる気もするが...」

「それで、京都の街をブラブラ歩いて5歳ぐらいの女の子を見つけたら、親に許可をもらって写真を撮っていたの...もう、その数も1000枚ぐらいになります。この中にきっと私の子供がいると信じて...」

「そうだったの～しかし、私はそんなことより、涼子がいい人を見つけて幸せな家庭を築くことがその「赤ちゃんポスト」に入れた赤ちゃんへのお詫びになると思うの...」

「はい、ママ、私もそう思うようにします」

それから半年ほど経ったが、涼子は店の客で駅前の一流企業の「フラワー」の30歳の田口義一と付き合っていた。義一は結婚を前提に付き合っほしいという涼子に愛を打ち明けていた。涼子にとっては忘れようとしても忘れられない過去があった。そこでこの過去を義一に打ち明けるかという相談をしていた。ママの幸子は、

「なにをいっているの涼子、過去といっても戸籍が汚れているわけでもないのに...」

「でも、もし義一さんがそれでもいいといってくれれば...」

「あのね～その昔に「貴女の過去など知りたくないの、済んでしまったことは仕方がないじゃないの」という歌があったが、そんなものは大嘘で男というのは何かがあるとそれをネチネチ持ち出すのよ!涼子!、で、それが嫌になって離婚すれば母子家庭に生活保護、それなら涼子の人生の振り出しにまた戻るだけよ～」

それを聞いていたマスターの音吉も涼子の過去は知らされてはいなかったが一般論として、

「ここは駆け込み居酒屋といわれているが、ここを卒業したものはすべて幸せになってまだ一人も戻ってはいない。どれも壮絶な人生を経験したものばかりなのに...過去を振り返るより未来を見つめるほうがいい」

涼子は、

「そうでしたか～あれは過去だったのですネ～ところでママさんのその壮絶な過去の人生ってなんだったのですか？」

「過去ねえ～私もママ業で忙しく、それにこうして涼子などの悩みを聞いているうちに忘れてしまったは～ホホホ...あんなに苦しみ悩んでいたことなのに」

「そんなもんですか...過去の悩みって...」

「そう、「済んでしまったことは仕方がないじゃないの」は、男がいう台詞ではなく女がいうものよね～マスター」

「そう、女は賢くしたたかに生きなければならない」

というママの専売特許の台詞を音吉も涼子に伝授していた。

(ママの幸子の壮絶な人生は 18話)←ここからこのドラマは始まりました。

JR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉はたまにしか店にでてこないが、店で使う食材はママの幸子の指示で買い出しに毎日いていた。この指示はネットの掲示板に書かれている、たとえば「蛸のお造り」「かつをのたたき」「ブリのお造り」「イカのお造り」の短冊をそれぞれ5人前ぐらいなどと書かれている。

この掲示板は客にも解放されているのでこの食べたいお造りがあれば予約ができるというシステムで、例えば仕事が遅くなり午後10時半しか店にこれない客は目当ての生ものを予約できるし、また本日のメニューの情報にもなる。この居酒屋にとってはこの生ものを余らすというロスが最大のネックになるからだ。それに完全に売ればこのお造りなど生ものも1人前500円程度の安さで売っても儲かることになる。

音吉は魚類の買い物は近くのスーパーの鮮魚専門店「魚嘉」で買っている。いつも20人前程度のお造りを買っているので店のレジの女の子とも仲良くなる。ある日、その鮮魚店の店員が、「いつも買っていただいてありがとうございます。このお造りなどはどこのお店で使っているのですか?」

「ああ～これは駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」という居酒屋でお客様におだししています。店のブログがありますので一度見てください」

それから一週間ほどしてこのブログの付属掲示板に、

「魚屋の店長の妻で「真澄」と申します。ブログ等を拝見いたしました。一度姉のことで相談したいことがあります」と書かれてあったので音吉はそれの日時を掲示板に書いていた。そして真澄が店に来た。

この真澄は28歳でこの鮮魚店の経営者の長男の嫁でこの長男は京都の直営5店の総括店長をしているという。真澄は姫路の出身でこの姫路の鮮魚店で夫と知り合い結婚をしていた。この真澄の二つ上の「鮎子」がいるが、この鮎子はかなりの不良で風俗店に勤めていたが、同じ姫路のホストに貢いで借金まみれになっていた。しかし、この鮎子もこれらを反省して新天地にこの京都で働きたいということだった。真澄は、

「この姉が風俗で働いていたことや借金があったことなどを夫には絶対に相談はできないのです...」

「そら～あの鮮魚店「魚嘉」は100年も続いている関西でも50店舗を展開する有名な老舗になる」



「はい、借金は私の両親と私のへそくりでなんとかしましたが、姉が風俗店で働いていたことがわかると...それにもう両親も私もお金がありません」

「しかし、一度風俗のポロ儲けを経験したら時給800円や900円では働けずまた風俗に戻るものです」

「それが私も心配でもし京都でなにかの摘発で姉が逮捕されたら名前が「鮎子」というのですぐに夫やその家族にバレます」

「それで私の経営するマンションと店で監視してほしいというの?真澄さん」

「はい...マスターなかなか察しがいいですね~本当にたのもしいお方です」

「おいおい、こんな老人をおだてて...」

「お礼といってもなんですけど...音吉さんが「タラバガニ」が大好きだとブログに書いてありましたから、根室で獲れた最高級のタラバガニをお持ちしました」

こうしてタラバで買収された音吉は家具と電化製品、それに台所用品がすべて揃っている103号室に鮎子を迎えていた。当面は居酒屋で働くという約束で家賃は社宅として免除していた。その鮎子は30歳だが、これより5歳は若く見える化粧なのかイケイケネーチャンの雰囲気だった。店のママの幸子と気が合うのか?それともフルタイムで働くのでわずか半月で「チママ」と呼ばれる人気ものになっていた。それでも前科者?として音吉とママは鮎子を1人にさせずに監視していた。

ある日、店の開店前のひと時に、鮎子は音吉とママに、

「なんとなく私を監視しているようだけど、マスターもママも安心して私はもう風俗に勤めたりホスト遊びは絶対にしませんのことよ~ホホホ」

ママの幸子は、

「いえ、監視しているつもりはないけど...やっぱりマスターも私も心配なのよね~」

「私はママの接待や料理、それに着物の着付け、お品書きのお習字などを覚えて2年後には祇園の一等地に「割烹 魚嘉祇園店」のママになることがもう決まっています」

「えっ~魚嘉って妹さんの店の支店?」

「はい、妹の旦那の高広さんとの約束なの」

音吉はそんなことは初耳なので鮎子に聞いていた、

「なんで?妹さんの夫の高広さんとそんな約束をしたの?」

「うん~これは絶対に妹には内緒だけど、実は姫路の私の勤めていた風俗店に偶然だけど高広さんが遊びにきたの、それで二人ともビックリ仰天したけれどもお互い内緒にしておこうとなったの。それで店で禁止されているサービスなどをして十数回も指名で来てくれたの」

それから高広は口封じのために鮎子がまじめになって料理の一つでも覚えてくれれば真澄のお姉さんとして店の一軒でも出すと約束をしてれたという。それで妹に京都に住みたいといったらこ

のポン吉さんを紹介してくれて私は今一生懸命にママから水商売のイロハを習って一流の女将になるという。幸子は、

「それで、今は高広さんとは？」

「ううん、それっきり何の関係もないわ～だって、その時は風俗嬢だったけど今は妹の旦那じゃないの～ホホホ」

「そうよね～女は賢くそしてしたたかに生きなければならないのよね～」

と、幸子と鮎子は手を握り合ってこの話のすべてを共感していた。その時、その噂の真澄とその旦那の高広の二人が店に現れた。その高広は、音吉に、

「真澄の姉がここで大変お世話になっていることを聞いてご挨拶にきました。いずれこの鮎子を私の方で引き取りますからそれまでなにかとご指導をよろしくお願いいたします」

それからこの5人で仲良く乾杯をしていたが、幸子がポツリと、

「世の中捨てる神あり拾う神ありというけれど...なんとなしにうまくいくのよね～」

というと、5人全員がそれぞれ違う意味で納得をしていた。



神は懺悔すればすべて許してくれます

働く女性たち...「京のいけずに泣く女 朱美」 駆け込み寺「洋風居酒屋ポン吉」 ... 26話

JR西大路駅前、近くには約50軒の飲食店がある。いわゆる都会の飲食ビルというのは一つで残りは民家を改造したテナントになる。したがってほぼすべての店は1階にあり店は道路に面している。この店の前の歩道の掃除は当然ながらその店の管轄であって常に綺麗にしとかなければならない。

京都の有名な日ごろの習慣に「門履き」(かどはき)というのがある。これは毎朝のように自分の家の前をホウキで掃くのだが両隣の境界線より少しだけ侵入してそこも履くという京都流エチケットがある。しかし、これをしなかったその家は「無粋」だとしてこの狭い町内からも村八分まではいかないがなにかと「いけず」をされる。

この「洋風居酒屋ポン吉」も1階にありこのこのマスターの音吉が店に出勤して最初にする仕事はこの「門掃き」になる。履いた後は水を撒いて玄関には盛塩をするのが日課になる。この行為とは道路の表であるから町内の人々とも会って立ち話などのコミュニケーションもできるし、通行人も観ることになる。これこそこの店の人格の宣伝になって京都人が安心して行ける店の証拠となっている。

このポン吉の並びの空き店舗にまた新規の店ができた。店の工事の規模からして改装費は確実に一千万円は超えているとこの地域の人々の噂になっていた。店のオープンには派手に祝いの「蘭」が飾られ、有名人の花輪も並べられていた。店の名前は「和風居酒屋 朱美」でママは30歳前後の超ベッピンだということだが、この超ビククな噂の割にはポン吉の客はまだ誰も行ってはいないという。

それから半年ほど経ったある日、その「和風居酒屋 朱美」という店のママが挨拶に来たというのでマスターの音吉は店に行った。そこにはやはり噂の超ベッピンのママがいた。朱美は、

「ご挨拶が遅くなってすみませんでした」

「いやいや、こちらこそ、それで店はうまくいっていますか？」

「それが～開店当初は前の店のお客様が来てくれましたが、それも三か月ほどで...」

「そうですか～この京都は商売が難しいのです。で、どこの出身ですか？」

「はい。宮崎県の都城ですが、色々あってそれで木屋町のビルの4階のビルでスナックを営んでいましたが、私も35歳になって料理をウリにした居酒屋をしようと決心したのです」

「そうですかビルの4階だと「門掃き」は知らなかったのですネ」

「えっ？その門掃きとはなんです？」

「それはまたおいおい教えます。それと朱美さんはここの町内会費の月にすれば500円ですがこれを払っていますか？」

「いえ、町内の方が集金にこられました、私は住まいのマンションで町内会費を払っていますからとお断りしました」

「そうですか～こういう店をしていますと客が近所で立ち小便をしたり大声を上げたり、煙草をポイ捨、それに夜中に出す業務用の生ゴミ袋を猫やカラスが荒らしてその後始末もこの町内の誰かがしてくれています。その迷惑料というか町内とのコミュニケーションとして町内会費は必要なんです」

「そうですか～それはいいことを教えていただきました。生ゴミのことまでまったく気がつきませんでした」

この町内費を払わないということを各町内の集まりである学区連合会の集まりで雑談として店の名前が発表されることがよくある。そうすると学区の体振や消防団、それに福祉、ママさんバレー、老人会などの各種団体の宴会やその二次会には絶対に使われぬ。またこういう話には必ず尾ひれがついてあの店のママは暴力団の愛人だという噂にもなりかねない怖さがある。つまり、町内会費を払わないというだけでこの村の仲間に入れてもらえなくなる。

たしかに全国チェーンの居酒屋やコンビニはこの町内会費を払っている店は少ない。しかし、もしこの地域密着で商売をするならまずその店の町内、それに近所の飲食店に開店の挨拶ぐらひはするのが京都の一般常識になるが、こういうことを教えてくれないで陰口で仕返しするのが京都の「いけず」でもあった。それを聞いていた朱美は赤面しながら、

「そうでしたか～このポン吉さんとは同じ並びなのに...挨拶が半年も遅れてすみませんでした」

「いやいや、こういう挨拶の中でこの地域の仕来りを覚えるのです」

それからママの朱美は開店前には必ずゆっくり時間をかけて「門掃き」をするようになっていた。元々、この地域ではNO1の美人だからそのママが店の前で掃除をしていればこの付近の会社帰りのサラリーマンが見つけないわけがない。それが客となり一人増え二人増えて店もやっと赤字ギリギリの経営までに盛り返していた。そんなころ音吉は朱美に店の休日に招待されていた。そして朱美は、

「音吉さん、おかげさまで新規のお客が増えてきました。それでも赤字なので住んでいたマンションを引き払ってこの店の二階に引っ越しをしてきました」

「ほう、そうでしたか～それはよかった」

「はい、もし店がオープンして順調だったら私は天狗になっていたと思います。そしてこの京都の仕来りも知らない「無粋」な女のままだったかと思うと今でも赤面します」

「それで町内会費は？」

「はい、これはこちらから頭を下げて町内会に入らしてもらいました。するとすぐに消防分団の懇親会の二次会に貸し切りで使ってもらいその中の何人かが常連客になってくれました」

「それはよかった...もし、なにか困ったことがあったら言ってください」

「はい、実は～二階のベッドの位置が悪くて少し動かしてほしいのです」

この店は元々民家の二階建てだった。その分家賃も2倍していた。その二階に上がるとやはり綺麗好きなのか部屋はピンクで統一され、そのベッドにはほのかな色気が漂っていた。そして朱美が、

「音吉さん、私は何もマスターに恩返しができません。もしあの時に音吉さんに相談していなければ私は莫大な借金を抱えて路頭に迷ってしまいました。恩返しというのもなんですけれども私を抱いてください」

というなり朱美は音吉に抱き付きキスを迫ってきた。音吉はこういう場面でこれを拒否するとその女性のプライドがズタズタに切り裂かれて取り返しがつかなくなるのは経験から知っていた。しかし、頭の中にはママの幸子が現れたが、音吉はここに招待をされたことはママは知らないというより、知らせていないので安心して朱美を優しく抱いていた。

 **男の安くて不味い料理...北海道産の蛸(4 2 7円)**

これはタイトルとは違い高くて旨いタコになる。年金支給日まで後5日、今月もなんとかいけそうなので清水の舞台から飛び降りるつもりで買った。ところがこの魚屋さんの女店員があまりにも綺麗だったので、次のこの小説の主人公は魚屋さんの「鮎子」さんにした。やっぱり人間は旨いものと綺麗なものを見ると創作意欲というか妄想が沸いてくるものだ。(合掌)





働く女性たち...「イナリスミレ 堇という女」...駆け込み寺「洋風居酒屋ポン吉」 25話

JR西大路駅近くには一部上場企業のワコール、日本新薬、GSユアサ、堀場製作所、第一工業、ロームなどの本社や工場がある。この駅の乗降客数は3万人を超えているから駅前はかなり賑わっているかといえばそうでもない。賑わうのは昼のランチ時だけで夜は全国チェーンの安い居酒屋はともかく小さなテナントの店は閑古鳥が鳴いていた。

元々この京都のテナントというのは民家を改造したもので店も狭く客席も最高でも20席ほどだった。駅前、駅近にはこんな店が約30軒ほどあるが、改装費1000万円もかけて開店したが、多くの新規の店では1年ももたなかった。そんな中でもこの「洋風居酒屋 ポン吉」は連日満員で立飲みもそう珍しくはなかった。

ある時、白い和服が似合う30歳前後の色白美人の女性が店に現れた。その時はたまたまこの店のマスターの音吉がいた。その女性は堇(すみれ)と名乗り、大阪の十三で「スナック風居酒屋 すみれ」を経営していたが、店の立ち退きで半年先には閉店するという。マスターはその堇に、「すみれさんですか、私も花の堇を育てています、ほれ、そこにあるのが私が名付けた「イナリスミレ」でこの花を伏見稲荷大社のお山で見つけてそれを栽培しています」

「まあ～なんと透けるような可憐な白い花が可愛い...私もこんな雑草といわれる花が大好きです。それにこのきものの柄もすみれです」

「そうですか～それならそれをお持ち帰りください。まだ自宅には10鉢ほどありますから」

「はい、ありがとうございます。私も店でこのすみれを育てます」

「ところでなんで?こんな田舎に?」

堇は立ち退き後の店を探していたが、大阪では家賃が高いと他を探していたが、たまたまこの店のブログを見て連日満員の画像からこの西大路駅近くの店を探していた。それがなんと保証金も家賃も大阪の三分の一だった。堇は、

「あの～失礼ですが、ここのお家賃は?」

「ああ、ここね、ここは10万円です。でもこの通り狭いですから...」

「いえ、私の店もこことほぼ同じで家賃は3倍です」

「そら～大阪は絶対的に客数が多いからです」

「でも、このポン吉さんはよく流行っていますよね～」

「いや～失礼ですが、堇さんのような考えでここに店を構える人はここ20年で50軒はありました。でも長くて5年、早ければ半年で撤退しています。儲けるのは店を改装する工務店だけです」

という話を董と同じように店を物色している人にはいってはいたが、そのすべてが「私の料理、接待」に自信があるとこの忠告を聞かなかった。董は、

「そうでしたか～私はマスターの事を信じてここに店を出すのはやめます」

「まあ～それが賢明です」

「その代わりに私をこの店で使ってください。もう店の経営で苦勞するのは正直嫌になっていたのです」

「それは～しかし、こんな綺麗な方ですから大阪のどこで店をだしてもきっと流行ります」

これを横で聞いていたママの幸子はなんとなしに危険を感じていた。腹の中では「この女...ただ者ではない」。しかし、この幸子の考えは董にも伝染していた。その董の腹の中も「このママは私より5歳ほど上だが、なんとなく気が合わない」そうなるとどちらも一歩も引けないというのが女の意地であり性だった。これをまた察知した音吉は幸子と董を引き離そうと、

「どうです董さん、こちら辺りで比較的流行っている居酒屋を案内します」

「はい、ありがとうございます」

そこで幸子がぶっちぎれた。

「マスター、その女とどこかに行くなら私はこの店をでていきます～」

というなり、バックを持って本当にでていった。この奇妙な展開と雰囲気音吉は目を白黒させていたが、董が、

「はい、私は喜んでマスターとお供します」

董を音吉はいきつけの居酒屋に案内していた。そして終電がなくなる少し前に音吉が、

「董さん、もう最終電車ですから帰りましょう」

「いやです～私はマスターが自宅で育てている「すみれ」の花を観たいのです」

「いやいや、そんなことをしたら大変なことになる...」

「あらら、マスターとママの幸子さんとはそんな関係ですか？」

「いやいや、そんなことはないが、店にとっては大事なママになる」

「それなら私がママになります。私の店のお客様は大津や坂本、それに堅田からの通勤でそれも一流の企業の人たちばかりです。その人たちはここで私がママをすればみんな西大路駅で途中下車して店に来てくれます。それにあのママより私は若いし料理も私のほうが腕は上です」

「いやいや、それとこれとは問題が違います」

そうこうしているうちに最終電車の時間は過ぎていた。音吉は友人の個人タクシーに電話をしてこの女性を十三まで送ってほしい。それにタクシー代は私が払うから明日でも店に取りにきてほしいといていた。すぐタクシーは来たが、この董は「帰りたくない～」とダダをこねてなかなかタクシーに乗らなかったが、音吉と運転手とで無理やりタクシーに乗せていた。

音吉はやれやれと思ってマンションに帰ったが、その玄関の前には幸子が涙を流して立っていた。音吉は優しく幸子に、

「いや～すまんすまん、こんな寒い所で...ささ、寒いから中に入ろう～」

というと幸子は泣きじゃくりながら部屋に入ってきた。もちろんこの涙はほんまもんだが、心の中では、

「勝った...!」という勝利の味を噛みしめていた。





成長したスミレ 3年目で高さ約20cm  
イナリスミレ  
2015・4月15日

人の1日の行動というのはかなり規則正しいものです。その私の朝の行動はまずPCをチェックしたりコラムを書いたりですが、それを7時半に切り上げて駅前のパン喫茶で新聞を読みながらモーニングコーヒーを楽しみます。その途中で駅から各職場に向かう人たちもすべてとっていいほど同じ人とすれ違いますが、私の家から駅までは歩いて約7分ほど、すれ違う人たちは約50名ほどになる。

その10年ほど前にまだ幼さが色濃く残る可愛い少女とすれ違っていました。その少女は色白で髪は長くて背が低く少し斜めに傾いて歩く癖がありました。この少女が勤めている会社などはまったくわからなかった。そのすれ違いざまに私は「可愛い」というテレパシーを発信していたがそれが少女に届いていたかはわからない。

やがてその少女とすれ違い3年ほど経ったぐらいからその少女は薄い化粧から大人びた綺麗な化粧に変身してきた。高校を卒業して就職したのならもう21歳ごろの大人で彼氏の1人や2人は経験しているのではと妄想しながら楽しんでいた。そしてその彼女が25歳になったころから顔も大人になり赤い口紅が似合うお姉さんの雰囲気が出てきた。

それまでにもこの彼女はファッションに敏感なのか着ている服装も毎日のように違う雰囲気のお洒落屋さんだった。一方の私は年中ジーンズで上に着ているものはほぼ毎日同じだった。その朝のすれ違いざまに私の愛のテレパシーを送り続けて10年目の朝にこれは偶然だが、電車が少し遅れたのか私がいつも行くパン喫茶の前で会った。その時は通り雨なのか雨が降ってきて人々は急な雨に走っていたが、私はその彼女に傘をなんとなしに手渡していた。そして彼女に、

「これ、使ってください。で、その傘はこの店の傘立てに置いてみてください」

その彼女は、

「はい、ありがとうございます。でもこの傘は今夜あのお店に持っていきます」

「ああ、私の店を知っていたの？」

「はい、毎日会社の帰りにお店の前を通ってましたから」

その店とはJR西大路駅近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」でこのマスターが私こと音吉でした。その日の夜、その彼女は店に来てくれた。そして音吉に、

「今朝は傘をありがとうございました。私はそこの塔南病院で検査技師をしている田淵静香といいます」

「いえいえ、やはりあの病院でしたか、私もねえ～静香さんが通勤する方向からしてJA塔南かあ



の病院かと山をはっていました。それに検査技師さんなら病院の待合室でも発見できない」

「私も毎日お会いしていましたから、多分、音吉さんは駅から電車にと思っていましたが、6年ほど前にこの店の前を掃除している音吉さんを発見していつかは勇気を出してこの店に来たいと思っていたのです」

「そうでしたか～それで10年前から私が愛のテレパシーをすれ違いざまに出していたのを知っていましたか？」

「はい、それはわかっていました。もうあの病院に勤めて10年です。私もおばさんになりました」

それから静香はこの店に度々来るようになったが、マスターの音吉は5時半の開店と同時にママの幸子とバトンタッチして店には顔を見せなかった。この静香とママは気が合うのかなにかと相談をしていた。幸子が、

「静香さんももう28歳だからそろそろ結婚だけど...彼氏はいるの？」

「うん...彼氏どころかまだ1度もデートをしたことがないの...」

「あらら、それならまだ処女？」

「はい、両親や親戚から毎日のようにお見合いの話があるの～それが嫌で嫌で...」

「病院ならドクターを捕まえたら？」

「あの病院は少し異常で政治的な活動ばかりしているドクターばかりで...とても私にはなじめません」

「そうよね～それは有名なものネ、で、好きな人は？」

「はい、もう10年も前からお慕いしている人が」

「へえ～誰？一度この店に連れて来たら、私とその男の性格を判断したげる」

「それが～この店の音吉さんです」

「な、なに～マスター、あの音吉どん、あのね、静香、あのマスターは若くは見えるけどもう68歳なのよ!40歳も年上よ!正気なの？」

「はい、私は女子高を卒業してすぐにあの病院に就職したのですが、その通勤の最初の日に眼が合って一目惚れしました。この病院では色々なことがあってもう何回も辞めようかと思っていましたが、そうなれば音吉さんと毎朝会えないからと我慢して10年にもなりました」

「へ～あんな老人ドスケベのどこがいいの？」

「うん～なんていうのか～すれ違う時にオーラを感じて胸がドキドキするの～」

「そらあかんわ～病気やわ～」

それから静香は火曜日の夜と金曜日の夜は決まって店に来ていた。ママはこの静香のことを音吉には伝えていなかった。それはママの幸子の「やきもち」もあったが、これは禁じられた恋と判断していたからだ、その音吉と静香はそれから毎朝すれ違ってテレパシーの交換をしていた。それはそれで静香は楽しかったがある日、ママに、

「私～もう一生涯独身で暮らすことにしたの」

「でも、ご両親は？」

「そら～毎日口うるさく見合いを勧めてくるわ...それで私もう家を出て音吉さんのマンションで暮らそうと決心したの」

「おいおい、こら～重症だわ～それでマスターは許可したの？」

「ううん、それをママにってもらおうと考えているの...ママお願いします」

これは音吉に責任があるついにママは今までの事を打ち明けていた。そして、

「マスターこれはマスターにも責任があるのよ!、そんな若い娘に愛のテレパシーを贈るからよ!」

「しかし、それは...」

「いつもの定番なら、私は静香を抱いてあげなさいというが、まだ静香は処女よ!そんなことは犯罪になるのよ!マスター」

「いやいやいや、誰も私は静香を抱くなんては言ってはいない」

「そうなの?それなら今夜は私を抱いて？」

「うん、なんでそうなるの？」

こうしてとりあえずは静香に刺激を与えず音吉も朝のテレパシー以外には店で静香に会わないようにして、そしてそれとなくママの幸子と音吉が仲が良いと感じてもらい静香を諦めさせる大作戦というのを静香は提案していた。この提案に反対してまたいい考えも音吉には浮かばなかったものでこれを受け入っていたが、心の中では、

「ううん...これはなんかおかしい？」

ひょっとして幸子と静香のデキレースではなかったかと疑っていたが証拠はなく音吉と幸子を乗せたタクシーは南インターのラブホテル街に消えていた。



楽しそうです～この先、苦勞の連続なのに...もし、苦しくなったらこの写真をみなさい～♪

「働く女性たち...「ゴミ屋敷の女 美幸」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 23話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」にまた一人の女性が現れた。この女性は名古屋でモデルと歌手をしていたという35歳の美幸だった。この店のマスターの音吉が経営しているワンルームマンションの前に名古屋ナンバーの4トントラックがこの美幸の荷物を降ろしていた。

音吉はこの引っ越しの確認をしていたが、今までポストンバック一つや軽四輪の赤帽、多くても2トン車ぐらいだったが、この美幸の荷物は4トン車に満載乗っていた。この初音第一ハイツは8畳一間のワンルームだったので音吉は美幸に、

「この荷物はなんですか？それに家具は少なくてダンボールばかりだが？」

「はい、これは私の18歳からの舞台衣装でなぜか？捨てられなくて？」

「しかし、これらを置くと寝るところもないが？」

「いえ、前のマンションも8畳一間でしたからすべて入ります」

引っ越し業者は美幸の指示にしたがった大きなタンボールを押入れのない反対の壁に積んでほしいといっている。やがてそのダンボール箱は50箱で天井まで積み上げられてダンボールの壁ができていた。他の荷物は簡易の洋服ダンスとベッド、それにホームコタツにテレビ、机が一つでその上にパソコンがあるだけだが、これで8畳の間のすべてが埋まっていた。

音吉は、

「これが衣装なら京都でもモデルや歌手をされるのですか？」

「いえ、私ももう35歳ですからモデルも歌手も引退します」

「それならこのタンボールを少し整理しなければ地震でもあればこれの下敷きになって死んでしまいます」

「そう、今まで付き合いしてきた男性のすべてが音吉さんと同じ意見です。それに私の両親も兄弟も同じことをいいます。でも、私はそれができないから家族とも疎遠になってこの京都にきたのです」

なにはともあれ落ち着くまではアルバイトがてらに「洋風居酒屋 ポン吉」で暫く働くことになった。この美幸はさすがに元モデルだけあってスタイルはいいしそれに化粧がプロ級で店でもピカリと光っていた。男の常連客は当然メロメロになっていたが、これが駅前の一流企業のOLの人氣になり女性客が一気に増えていた。この美幸は元々は東京生まれ東京育ちだったが、このモデルの仕事というのは東京と大阪に集中していた。そこでこの中間地点の名古屋に住むモデルが多いという。

それから一か月、駅前に一部上場企業でランジェリーメーカーの「フラワー」がある。その営業第3課の課長の長澤博光がこの美幸をみて一目惚れというより我社の専属モデルになるように口説いていた。長澤は新製品の開発をしているが、その新製品とは「ミセスのためのお洒落ランジェリー」という企画で35歳～50歳のミセスをターゲットにするという計画だった。長澤は美幸に、

「美幸さんの過去の経歴を調べましたが、輝かしいものでその若さでモデルを引退するのはもったいないと私は思います。どうか我社の専属モデルになってほしい」

「しかし、ランジェリーというからには下着のモデルも...ですよ...」

「はい、それはもちろんですが、でも我社のテレビCM、それにポスターでもそんなに過激なものはありません」

それを聞いていたママの幸子も美幸にこの話を信じて長澤さんにお世話になったらと勧めていた。この話はトントン拍子に進んで長澤は契約内容を美幸に説明していた。そして美幸にこの契約は身元調査を含めて美幸さんの自宅で締結するというのが我社の決まりです。その契約には顧問弁護士も立ち会います。それに美幸は、

「えっ!自宅ですか～それは困ります」

「ど、どうしてですか～たしか～ここのマスターのマンションでしたネ」

「はい、それが～私の部屋は散らかっていますから...そんな恥ずかしいことは...」

「しかし、部屋が散らかっていてもこの契約とは関係がありませんから安心してください」

「いえ、やっぱりこのお話はなかったことに...」

これを聞いた音吉は美幸に色々事情を聞いていた。その美幸が、

「実は私は病的な「もったいない症」で私のことが掲載された新聞や雑誌ならまだしもすべての物を部屋の中に溜め込みます。たとえば、買った洋服、ヨレヨレの下着や糸がみえているバスタオル、ハンカチ、それに包装紙の紙や紐、古い鍋やフライパンなどの調理器具から陶器まですべて溜め込んでいました」

「それって～ひょっとして「ゴミ屋敷」の話なの...美幸さん」

「はい、ここに引っ越しするために散らかったゴミのすべてをダンボールに詰めてそれが50箱にもなったのです」

「そうか～あのダンボールの中身は衣装ではなくて...その...ゴミだったの?」

「それは音吉さんからすればゴミだけど...私にとっては捨てがたい宝物になります」

「しかし、そうであってもダンボールに入っているから...」

「いえ、私もここに引っ越しをしてから一か月になります。必要な物を探してダンボールを開けたのですが、それがまた部屋中に散らかり元の足の踏み場もないゴミ屋敷に戻ってしまったのです」

音吉はそのゴミ屋敷を訪ねた。やはりそこは足の踏み場もない「ゴミ屋敷」だった。とりあえず

二人はベッドに腰かけて話をしていた。音吉は、

「これでは火事の原因にもなりますし、それに不潔ですからゴキブリの巣にもなります。これは家主として見過ごすことはできません」

「そうですか～それならここを出ていきます」

「いや～そんなことはいいはない、どうです私も手伝いますからこのゴミをすべて処分しませんか？」

「そんなことは絶対にできません」

これは手に負えないと音吉はママの幸子に電話で相談していた。幸子は、

「なにをいっているのマスター、そんなことで音をあげて～女なんてものはネ、上の口でいうことを聞かなかつたら下の口でいうことを聞かしたら、それで何人もの女を助けたのでしょうかマスター、まあ、私もその1人だけど...とりあえずその美幸さんの欲求不満を解消したげてからでいいのではないかい...音吉どん」

という返事だったが、音吉の隣には美幸がいる、その幸子の電話の声は美幸には丸聞こえになっていた。その美幸はそれを聞いて顔を赤らめていたので音吉はためらわずに美幸をそのままベッドに倒していた。そのベッドの周りはゴミだらけでそのベッドがゴミの海の島のようにになっていた。その島での音吉の愛撫は優しく美幸もそれに抵抗もせず愛されていた。

美幸は音吉が買ってきたゴミ袋に美幸の宝物のゴミを一つずつ涙を流しながら捨てていた。その数は100袋にもなり店の常連客のゴミ収集業者が無料で廃棄してくれていた。その綺麗になった部屋に長澤と弁護士が訪れて美幸が「フラワー」の専属ミセスモデルになるという契約が交わされていた。その二人が帰った後、美幸と音吉はワインで乾杯していた。美幸は、

「マスターありがとうございました。もう、絶対にゴミ屋敷には戻りません」

「そうですね～とりあえずフラワーとの専属契約おめでとう」

「ところで私と音吉さんとの専属契約はいつしてくれます？」

「はあ～？なんのこと？」

「私はなんでも収集するクセがあります。一度部屋の中に入れた物は絶対に捨てません。あの私の宝物と音吉さんを交換したのですから、私の宝物は音吉さんになりました」

これは困ったとまたママの幸子に相談の電話をしていたが、その返事は、

「マスターもゴミ同然になったのね～」

と笑って電話を切られていた。





「働く女性たち...「眼科医 瞳」...鋭利な剛毛は凶器にもなる」...2 2話...フランス食パン(ハードトースト) ブラザーベーカリー西大路店

「洋風居酒屋 ポン吉」のマスターの経営するワンルームマンションの「初音第一ハイツ」に東京の眼科医の瞳が引っ越しをしてきた。この瞳は27歳で出身校の大学附属病院の眼科で働いていたが、この店の掲示板に色々な悩みを書き込んでママの幸子からアドバイスを受けていた。この瞳の両親と親戚のほとんどが医師の一族でこの瞳の悪い噂が嫌になり新天地を求めて京都に来たという。

この瞳は年よりも5歳ぐらいは若く見えるほど幼さい顔立ちと白い肌でフランス人形のようにも見えた。マスターの音吉は引っ越しの確認とゴミだしのルールなどを教えていた。ただ、この瞳の悩みというのは音吉は幸子から聞いてはなかったので知らない。でも、これは男には相談できないという悩みだということは容易に判断していた。瞳は音吉に、

「お世話になります。仕事の方は京都観光などをしながらゆっくり探します」

「それがいいです～なんなら私が京都案内をしてもいいですよ～」

「あら、ありがとうございます。そうそう、いつもママの幸子さんにお世話になっています。それで今夜はお店に行きたいのですが？」

「はいはい、店は5時半からです」

瞳がママに相談していたのは、この瞳が医科大学の1年生の時に2年先輩の神原義之と恋愛していたが、その義之の右眼が炎症を起こして治療を受けていた。その炎症も左目までにも発症してそれが度々あって義之の右眼は網膜剥離という病名で手術を受けて入院していた。病院は学校と同じ敷地にあり瞳は毎日見舞いに訪れていた。ある日眼科の医師からショッキングな話を聞いていた。それは、

「榊原さんの眼の炎症の原因は...なんていうか、その鋭利な陰毛が目は何回も突き刺ささって起きたと考えます」

「えっ?陰毛...あのアレですか？」

「はい、そのアレです。こういうことは若い女性によくあることです。なんていうか～剛毛というか?、毛の先が異状に鋭利になったものです。それがセックスの最中に相手の目を傷つけるのです」

瞳はこの話を聞いてからは義之の病室どころか学校にも行かなくなった。そして「洋風居酒屋 ポン吉」の掲示板で色々幸子に相談していた。幸子はこの相談に、

「そら～先生に恋人の瞳さんの剛毛が原因といわれれば誰でも心に傷がつくよね～しかも同じ大学の先生だからこの噂には歯止めがきかないことになるものよ～世の中は」

「そうなんです。そのことは義之さんも知っていたらしくて...それから疎遠になって」

「しかし、そんなことで疎遠になる男なんてたかが知れています。それより学校に行って勉強するほうが自分のためになります」

そんなことがあって瞳は大学2年目からは「眼科」の医師を目指すようになった。そして卒業して付属病院の医師になったが、瞳の頭にはたえず「鋭利な剛毛」という言葉が支配して恋人もできなかった。さらに、やはり広いようで狭いこの大学の医師らもこのことをなにかと飲み会などで話題にしているということを目にして東京から逃げ出していた。

この夜、瞳は音吉の店のカウンターにいた。瞳は赤ワインを飲みながら幸子と話をしていたが、

「あの～マスターは？」

「ああ、マスターね～あのマスターは店にもでてこないでこの近くの居酒屋で飲んでいます」

「そうなの～私、あの話をマスターにも聞いてもらいたくて...」

「そうねえ～男の側からはどう思っているのか私も少し興味があります」

「ええ、私も色々世間にもまれてかなり大人になってしまいました。それに27歳ですから結婚をして子供ということも考えなければなりません」

こうして音吉はいきつけの店から引き戻されていた。しかし、話が話だけに店ではできないと瞳は音吉のマンションに来た。音吉は話の流れを聞いてから、

「その昔に吉原などの遊郭でこの遊女の陰毛を刈る「下刈屋」という商売がありました。これは女性の陰毛が客の眼に刺さらないように毛の先を線香で焼いて丸くするという技術になります」

「そうでしたの～昔からこんな眼の病気もあったのですネ」

「はい、かなり古典的な眼の病気になります。その昔はセックス年齢が若かったために一気に成長した陰毛は先が鋭利だったからです。しかし、現在は栄養とホルモンの関係か剛毛は少なくなってきました。それに今はピチツとした下着、それにジーンズなどで先が擦れてそんなに鋭利な陰毛はありません」

「そうなの...」

「瞳さんが最初にその彼とセックスしたのは大学1年生でしたからまだ若毛の成長期だったもわかりません。それから数年も経っていますから安心して彼氏を見つけてください」

瞳は少し安心したのか赤ワインを美味しそうに飲んでいた。そして瞳は、

「そうですね～私も眼科医になってまだ陰毛が網膜に突き刺さるほどの患者はいませんでした」

「そもそも、あの陰毛というのはセックスの時の衝撃を和らげるために神様が人間だけに残してくれたものです。ですから、その衝撃で相当な剛毛でも結婚すれば柔らかくなります。もし、次の彼とのセックスが心配なら彼に水泳用のゴーグルを着けてもらったら彼の眼を守ることにもなります」

「もう～そんなゴーグルを私が持ち歩くの～」

といいながら瞳は笑い転げていた。

さらに瞳は、

「でもマスター、私が自分で自分の毛が柔らかくなったかという診断はできません。それに私は眼科医ですから...ですから...マスターに診察していただいてマスターのお墨付きをいただきたいのです」

「えっええ...しかし、この家にはゴーグルはないし...」

「もう～京都の人は「いけず」ですね～マスター」

「それなら瞳さん、私も実は「加齢黄斑変性症」という眼の病気でもう数年も眼科に通っています。その私の眼の診察と瞳さんの「鋭利な陰毛」の診察との交換でしたらお互い気も楽になります」

「はい、マスター、当分は週に1回の診察ということでいいですか？」

「.....」

 ...ハードトースト(フランス食パン)...ブラザーベーカリー西大路店

この食パンの食感は私にピタシだった。なんというか少し荒いパン生地とバターとの相性もいい、しかもパンの耳が歯を刺激するが、このフランスパンを食べるとなぜか?差し歯がポトリと取れる、そう思いながら今回も食べたが、やはりポロリと取れた。6枚230円(税込み)とお安い、また歯の治療費で貧乏になるワタシ。



フランス食パン(ハードトースト)

食感がすばらしい、私の故郷の味がする

働く女性たち...「老人女装の玉ちゃん」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 21話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」の常連客は最寄りの駅から近い会社の社員は少なくこの地域の商売人や定年退職した中高齢者が多い。この店のマスターの音吉も68歳でそんな地域密着型の居酒屋をしないと6年前からこの居酒屋を始めていた。もちろん当初はホステスさんなんかを雇う気はさらさらなく音吉が一人で料理と接待をしていた。

ところが今ではこの店のことを「キャバクラ ポン吉」と呼ばれるような色気のある店になっていた。そうすると音吉はもう店でする仕事はなくなり開店前にママの幸子から頼まれた料理の材料やトイレットペーパーを買いに行く程度で店が開店と同時に家に帰っていた。その開店前に常連の74歳の玉村芳樹という会社社長が店に入って来た。

この玉村は玉ちゃんと呼ばれていたが、その玉ちゃん、  
「マスター、少し店の中で着替えをさしてほしいと」大きな紙袋を見せている。  
店の開店は午後5時半からでまだ30分はあるからと気持ちよく応えていた。

その玉ちゃんはテーブル席に大きな手鏡を置いてなにやら化粧を始めた。玉ちゃんの顔は皺だらけでどんな欲目で見ても「お化け」にか見えない。それを察した玉ちゃんは、  
「マ、マスター、今夜は女装の集まりがあって家で着替える時間がなかったので会社から直行してきたの...」

「へ～玉ちゃん、最近ここら辺りで噂になっているオカマちゃんは玉ちゃんだったの?」  
「そうかも...でも、善良な市民を脅かすわけにはいかないから私はいつも移動はタクシーなの、そのタクシーを待つ間にパン喫茶のママに見つかって、そのママが客に広めたの...」

そうこうするうちに顔が完成したのか頭にウィッグを付けてこれまた豪華な真っ赤なドレスを着ていた。音吉は何を思ったのかスマホで玉ちゃんの顔や全身を撮っていたが、玉ちゃんはそれを拒否しなかった。そこで音吉は玉ちゃんに、

「あの～これを店の女の子や客に見せてもいいのか?それに店の掲示板にも載せていいの?」  
「あらマスターも興味あるの?いいのよ、でも、この格好で店に来てもいい?マスター」  
「いやいや、それは個人の自由だからいつでも玉ちゃんを歓迎するよ!」  
「それなら、女装の集会の帰りに仲間を誘ってきます。ホホホ」

この話は店の掲示板を通じて京都市内の常連客や近所のこれまた常連のOLたちで店は満員御礼の立飲み状態でこの玉ちゃんの出没を心待ちしていた。もちろん女装といっても綺麗処でないのは掲載された画像でわかるからその期待はなかった。店の前にタクシーが着くとそこから3人の

女装が店に入って来たと同時に全員総立ちで拍手で迎えていた。それを受けるように3人の老年女装はドレスをひらひらさせながら踊るというパフォーマンスに酔いしれていた。それをまた客からはスマホのカメラでパチパチ撮っていたからこの玉ちゃんらの3人は一夜にしてこの西大路駅界隈の有名人になっていた。

その玉ちゃんはある日には普通の姿で現れた。そのカウンターにたまたま同席していた駅前の上場企業でもあるランジェリーメーカー「フラワー」の女子社員がいた。その娘は28歳の詩織で会社では女性下着のデザイナーをしているという。その詩織が玉ちゃんに相談をしていた。

「あの～私も昨日の玉ちゃんらの画像を掲示板で見せてもらいました」

「あらら、そら～お恥ずかしいのを見てもらってありがとう」

「その～実は私の父が私の下着を勝手に履いているらしいのです...なんていうのか...こんなことを他人に相談もできなくて...それで...」

「それで...変態の私に相談ですか?この女装の趣味といっても色々あってネ～私も最初は首下女装でブラとパンティーだけでした。それが妻や娘に見つかって家を追い出されて今は会社近くのマンションで一人暮らしをしています」

「そうでしたの～私も母もあの画像を見て笑ったけれども父を許せません」

「ですよ...私の妻も娘もそうでした。でもね～あの性癖というか趣味はなかなか治らない物です。それでも我慢して下着だけという男性のなんと多いことかと私も感心しています」

「そうなの～だからといって父と母の離婚も...」

「そう、こんなことぐらいで離婚してもお互い不幸になります。どうです一層の事、お父さんの女装を家族で楽しんだら?」

「えっ...そんなこと...」

「でも、さっきは私の女装を笑ったといっていたでしょう。一度、お父さんの女装で笑って見ては?」

詩織がそれなら近い日にフラワー社内販売というのがあってブラやパンティーが市価の10～30%程度で売られるが、その時に詩織がデザインしたブラとセクシーパンティーを数枚買って父に身に付けてもらうという約束をしていた。そして数日後に詩織からメールがあって「洋風居酒屋 ポン吉」で会うことになった。詩織は、

「これ、私のデザインしたブラとショーツなんですけど玉ちゃんとマスターに3組ずつプレゼントします」

当然ながら玉ちゃんは喜んだが、音吉はそれを手に持ちながら顔を赤くしていた。詩織は、

「マスターそれを付けて見て...きっと世界が変わるから」といっている。

そこで玉ちゃんが、

「どうでしたお父さん?」



「そら～娘がデザインした物をプレゼントしたのだから喜んだわよ～」

「いや、そうではなくて、その～あの～」

「ああ～母ね～そら～涙を流して笑いころげていたのよ～父がポーズをとって母がスマホでパチパチ写真を撮る...」

「ほう、それはよかった」

「それに母と私でお父さんの顔を化粧したのよ!ほら、これ」

そこにはこれもお世辞でも綺麗な顔とはいえない詩織のパパがVサインをしていた。そのパパがこの店にも来たいといっているのですが...

「マスター、玉ちゃんも私の父を仲間に入れてくれますか？」

それには玉ちゃんは大喜びとしていたが、音吉は、

「いやいや、その私はその気はないし...仲間と呼んでほしくはない」

「マスター、何をいっているのその私のパンツを一度履いてから判断して見たら？」

「.....」

その後、この西大路駅界隈では「洋風居酒屋 ポン吉」のことを「オカマBAR」とか「お化け屋敷」と揶揄されていたにも関わらず、この地域に勤める若いOLの大人気の店になっていた。



「洋風居酒屋 ポン吉」マスター・音吉

働く女性たち...「女の愛の計算は複雑怪奇 恵梨香」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」20話

JR西大路駅近くの「洋風居酒屋 ポン吉」はブログ仲間の間では「京都の駆け込み寺」として有名になっていた。そのブログの付属「掲示板」には仮名だが全国の悩める女性からの相談が殺到していた。その悩みに答えるのはこれまた全国の女性からで自分自身の経験からアドバイスをしていた。そしてそれが解決できない女性らは京都の逃げてきた人が多い。

そしてその女性らにこの店のマスターが経営するワンルームマンションの「初音第一ハイツ」の部屋をあてがい仕事が見つかるまではこの居酒屋で働いていた。その一人の女性に静岡から逃げてきた恵梨香がいる。恵梨香は看護師で静岡の民間病院で働いていたが、なにかの拍子に妻子持ちの医師と不倫関係になっていた、それが病院内で噂になり新天地を求めて京都にきていた。

恵梨香は貯金もありそんなに急いで看護師として病院で働く気もなく「洋風居酒屋 ポン吉」で気楽にアルバイトがてら楽しく過ごしていた。恵梨香は色白の美人でまだ29歳と若いからすぐにこの西大路駅近くの店主ら常連客のアイドル的存在になっていた。その恵梨香に足しげく通うこれまた病院の医師の新谷徹がいた、恵梨香もこの新谷のことが好きでもう数回も食事に誘われていた。そしてまた高価なプレゼントももらい恵梨香ももしラブホテルに誘われたらいつでもOKの心の準備はできていた。

この店のママもマスターの音吉も新谷が妻子持ちだとは知ってはいたが、そこは大人の関係と双方割り切ったの付き合いだと心配はしていなかった。ところが恵梨香が浮かぬ顔をしてママの幸子に相談をしていた。恵梨香はママに、

「あの新谷さん、もう、毎日2回の定期電話があるの...それがもう3か月も続いているの...」

「あら、新谷さん、それだけ恵梨香が好きなの?」

「そうかも~でも~ママ、そら~私も数回も食事誘われてそれなりに楽しかったの、そしてそのあくる日には必ず電話があるの、もちろん私はその都度、昨日はありがとうございましたと愛想を込めて電話の受け答えをしていたわ」

「ママ、それは礼儀というもので当たり前になるが、それが?」

「それが、それから毎日、朝と昼に2回も電話がくるの、ある時にたまたま私が電話にでらなかったの、そして次の電話で怒ったように「なにをしていた!」と自分の女にいうような命令口調になったの...」

「でもまだ恵梨香は新谷さんとはセックスもしていないのでしょうか?。もし関係があれば男ってもっと横柄になるものよ...」

「そう、それでも私は愛想よく受け答えをしていたの。その電話も一昔前の台詞で「1日に2回

は恵梨香の声を聞きたい」というものに、ママ私はどう答えたらいいの？、そんな内容も伝達事項もない電話にこちらが毎回愛想よくするのに疲れたの。それで私は新谷さんからの誘いのすべてを断ったの」

「そうよね～新谷さんは恵梨香に御馳走やプレゼントをしているからどうしても上から目線になるのよね～それにこちらの気分も体調も無視して電話で毎回愛想よくするというのも辛いよね。でも、結局のところ恵梨香がそんな男とセックスの関係にならなくてよかったじゃないの？」

ママの幸子は新谷に電話をしてその事情を話してはいたが、新谷はその意味がわからず怒りながら、

「そんな馬鹿な、それならなぜ私の食事の誘いに乗ったのだ、それなら食い逃げになる」

「新谷さん、落ち着いて、恵梨香との食事は新谷さんもそれなりに楽しかったはずよ、それに恵梨香も楽しかったとっているのよ、でもね...人にはそれぞれ自分の時間というものもあるの、たしかに新谷さんは1日2回の愛の電話が愛の証と感じているようだけど、それは相手の事情を無視した考えで女には迷惑にもなるのよ」

「しかし...それならもう電話をしてほしくないといえいいのに...」

「そこはそこで恵梨香は新谷さんに恥をかかさないようにしていたようよ」

こうして新谷は恵梨香への電話をしないばかりか店にも顔をださなくなった。恵梨香はママに、

「すみません、私のために大事な常連客を失って...」

「何をいっているの、この店は女を困らせる客はいらないの」

「あの新谷さんはまじめ一本で来た医師だから、こういうお遊びの恋愛には慣れていなかったのかも？」

その話を聞いていたマスターの音吉は、

「いやいや、たいていの男というのは女に御馳走をした、プレゼントをしたという優越感で生きているようなものだ。それが知らぬ間に「俺の自由になる女」だと錯覚するものだが、あの新谷さんは恵梨香とセックスするまでに被っていた猫を脱ぎ棄てた慌てものになる」

そこで恵梨香が、

「あらら、マスターはやっぱり男の味方なの？」

「いやいや、私もママもあの新谷さんはもっと大人だと思っていたから交際を注意していなかった」

「あら、マスターは大人なの？それならなぜ？私の愛のメールに返事をしてくれないの？」

「いやいや、私はそれは嬉しいが、そんな恵梨香を満足させるテクニックを私は持ち合わせていないからだ！」

「れれれ、それは私の過去の医師との不倫のことをいっているの？私はそんなにアバズレ女のように遊んではいません！」

「いやいや、それとこれとはまったく意味が違う」

「でも私と妻子持ちの新谷さんとの恋愛を許すというなら私と独身のマスターとの恋も許してほしい...」

そこでママの幸子が、

「あらら、恵梨香はマスターが好きなの？」

「はい、マスターの気を引くためにあの新谷さんとお付き合いしていたの...それなのにそのお付き合いを許すなんて私にすれば侮辱じゃん!」

「そうよね～その責任をマスターは取るべきだと私も思います、マスター」

「しかし、そうなればやはりピエロはあの新谷さんになるが...」

「そう、マスターその通りよ、女の愛の計算は複雑怪奇なものよ」

マスターの音吉はあの新谷に悪いことをしたと思っていた。その夜、店が終わったところにママから電話で、

「もしもし、店を閉めました。本日も売り上げは快調です」

「はい、それはお疲れさまでした」

「そうそう、あれから恵梨香と色々話し合いましたが、その結論としては今夜恵梨香をマスターの部屋に派遣することになりました。どうかよろしくお願いします」

そこで電話はプチリと切れたと同時に、玄関のチャイムが鳴った。そこには恵梨香が笑顔で立っていた。





## 小説...「働く女性たち」...「めんどろ婚 瑠璃子」 19話～「洋風居酒屋 ポン吉」 駆け込み寺 音川伊奈利

---

### 小説...「働く女性たち」...「めんどろ婚 瑠璃子」 19話～「洋風居酒屋 ポン吉」 駆け込み寺 音川伊奈利

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」はブログで女性の駆け込み居酒屋として有名になっているのか悩みの多い女性客がかなり増えてきた。この店のマスターは68歳の音吉だが、店はママの幸子に任して店にはほとんどでてこない。店の女性店員は常時2名はいるが、この店員はお洒落好きばかりで客の駅前の商店主からは「キャバクラ ポン吉」と呼ばれていた。

ママをはじめ店員のすべてはなにかしらの事情があって離婚、または男から逃げるために京都にきていた。そういう事情がある故、悩みがある女性から相談を受けいたが、そのアドバイスには信頼があった。その女性が今夜も一人来ていた。その女性は京都市内からで28歳の瑠璃子といった。その瑠璃子はママに、

「高校2年から付き合っていた男と去年の9月に結婚をしたの、高校を卒業してからも付き合いは続いて彼は食品問屋に就職して私は地元の信用金庫で働いていたの」

「あら、それならば10年以上も付き合っただけの結婚だったの...もちろん愛し合っていたからよね...」

「まあ～両方の親の公認で共にどちらの家にも泊まったりしていたからなんとなしに結婚が前提になってしまったの」

「それならなにが？問題なの？」

「ううん～なんていうか彼も私も結婚にはそんなに乗り気ではなかったの...でも、周りがそろそろだということで私は信用金庫を退職して花嫁修業をしていたの...」

「でも、去年の9月に結婚したのでしょうか」

瑠璃子は彼以外の男性を好きになったことがないが彼との結婚は考えてはいなかった。しかし、今更また彼氏を作るという作業にも自信がなくというよりそれが「めんどろ」にも感じて結婚をしたという。ママは、

「その「めんどろ婚」って～よくあるの、でもそれで結婚して幸せになったカップルもあるから...そんなに珍しいことでもないよ...瑠璃子さん」

「そうですよね～でも...」

「でも...って、なにか旦那に不満があるの？たとえばセックス？」

「はい...私が求めるというより、赤ちゃんを早くほしいという意味ですが...」

「もう、新婚3か月でセックスレス？」

「はい、彼がいうには私とのセックスは高校2年からで週に2回していたとしても年に100回、10年で1000回もしたからもう私との一生涯の「ノルマ」を果たしたといって相手にして

くれません」

「な、なんていう男なの...!」

それを横で聞いていた店のホステスの美香が、

「その旦那って付き合っているときは体を求めてきたのよね〜?」

「はい、そら〜チャンスがあればどんな時でも、でも私はそれが男だと思っていましたからそんなに嫌ではありませんでした」

「それにしても1000回?私なんかもう30歳だけどまだ100回程度しかしていない」

「ですから私も結婚してもセックスは義務だと思っていたのに拍子抜けになります」

「あ、なるほど...それが瑠璃子さんの今日の悩み事なのね〜」

ママは瑠璃子の悩みはそんなに深刻ではないが、それを解決するアドバイスも浮かばないとマスターの音吉に相談していた。それで音吉は店に来ていた。音吉は瑠璃子に、

「旦那は子供がほしくはないのか?」

「いえ、やはり両方の親から子供はまだかと催促を受けていますから、今夜は子供が授かる日だといえ月々に1回ぐらいいいやいやセックスをしてくれます」

「それならば子供ができる可能性はあるよね?」

「はい、子供ができれば私は育てる自信はあります。それにこれも今更離婚なんていうのも「めんどろ」ですから...」

音吉は瑠璃子に夫とのセックスの不満なんてものは女なら誰でももっている、しかし、そんなことを口が裂けてもいえないから何か違う不満を探している女が多い。しかし、瑠璃子さんは彼の不満はセックスだけだから男としては90点ぐらいい点を上げられるいい旦那です。しかし、それでも何かモヤモヤしたものが残るのなら今夜のようにこの店でママや女の子と話をして不満を爆発させてください。その時は私の心から協力します。瑠璃子は、

「ありがとうございます。今夜は何となく気分がスカットしました」

「そうですか、それはよかったです」

「マスター...その心からの協力を今夜していただけませんか?」

「いやいや、でももう今夜は遅いから家に帰られては」

「いえ、今夜は夫が出張で家にはいません。今夜がチャンスです。音吉さんの心からの協力を今夜ください」

この話を聞き耳を立てて聞いていたママもホステスも、それに常連客全員が吉本新喜劇のずっこける真似をしていた。そしてみんな、なんや〜おもしろいわ〜帰ろ帰ろといって音吉に挨拶もしないで全員店から撤収していた。

そして瑠璃子と二人きりになった。音吉は瑠璃子に、

「瑠璃子さん、今夜限りと約束してください」

「はい、マスター約束します。私もこれから子供を産んで幸せになります。もう彼との「めんどろ」な駆け引きをやめます」

「そう、瑠璃子さんが悩んでいるそのことが頭が離れたら反対に彼がその気になるものです、そしてこれは彼の結婚後の一時的なセックスレスと信じることです」

「はい、そうします」

こうして瑠璃子と音吉を乗せたタクシーは京都南インターのラブホテル街に消えていた。



ひとりかくれんぼうが趣味なの～♡

アホーバ実喜村

## 小説...「働く女性たち」...幸子の復讐 18話～「洋風居酒屋 ポン吉」駆け込み寺 音川伊奈利

---

### 小説...「働く女性たち」...幸子の復讐 18話～「洋風居酒屋 ポン吉」駆け込み寺 音川伊奈利

JR西大路駅の近くに築40年の3階建てで部屋数は12部屋のワンルームマンション「初音第一ハイツ」はなぜか?近所の人たちから「バツイチマンション」と呼ばれていた。女性専用ではないがこれもなぜか?独身の女性だけで常に満室だが、入居者の出入りは激しくたえず引っ越し業者のトラックが目についていた。それに3か月に1回ほどなにかしらの事件がありパトカーの出動もあった。そこで小さなマンションだが防犯カメラが合計7台もありこれも異様に光景になっていた。

このマンションのオーナーは65歳の伊吹音吉でこの近くの自宅で「洋風居酒屋 ポン吉」を経営していた。洋風といってもそれは古い建物だけで料理については和風の居酒屋メニューしかなかった。この料理を作るママはこのマンションの入居者で色気のあるホステスさんも同じ入居者のメンバーのシフトだった。

この音吉はブログが趣味で多くのファンがいたが、このブログを読んだ全国のいわゆる理由ありの女性たちの駆け込み寺でもあった。家賃は4万円程度で保証金を入れても15万円ほどですぐに入居できる、それに仕事がなくても音吉の居酒屋で食事付で働いていた。現在のママは103号室の幸子で料理の得意な33歳だった。

この幸子は福岡県の小倉で夫婦で洋菓子店を経営していたが、その旦那が店のパートの子とできて幸子は追い出されたという。それに腹を立てた幸子は同じ町内でこれまた対抗するために「洋菓子 ポン幸子」という店を出していたが、客の取り合いから共倒れになりこの2つの店はあえなく倒産していた。この身の上話を幸子は音吉にしていた、音吉は、

「同じところにケーキの店を出すなんて無茶をしたよね...」

「そう、それは最初からわかっていたは、でも...どうしてもあの2人は許せなかったの、元主人のあのケーキ店も私のOL時代の貯金と私の両親の出資で始めたもので私なんか朝の4時から夜遅くまで年中無休で働いて10年、やっとそれなりに福岡でも有名な店になったの...それで私もやっと子供を作れると思った矢先のことで...」

「そうだよね～幸子さんの店のブログは人気があったから」

「そう、そのブログで音吉さんと知り合ったのネ...それで私は旦那の店をつぶしてから京都に逃げようと誓ったの...」

「莫大の店の出資金を無駄にしても復讐をしたかったのか？」

「そう、おかげで元夫はその女にも捨てられて借金だけが残り悪質な借金取りに追われてこれも逃亡しているらしいの」

幸子は協議離婚の際に元夫から500万円の出資金を取り返していた。それに自分の貯金の500万円とで店を開店していたので店が倒産しても借金は残らなかったが無一文になった。そこで幸子は音吉の居酒屋に駆け込んできた。当面の仕事が見つかるまでのママ稼業だったが、これがまた30過ぎの色気のある幸子の接待で西大路近くの商店主や会社経営をリタイアした元社長さんなど常連客の大人気で店は大繁盛していた。

音吉は将来また京都でケーキ店をやりたいという幸子に月に20万円の給料を支払っていた。それにマンションの家賃も社宅として免除していた。食事もすべて店で食べていた、それに客からのチップなどもあるので幸子は月々20万円の貯金をしていたことになる。それから半年ほど経ったある日、それも店の閉店と同時に元幸子の旦那が現れた。その旦那は幸子のブログを知っていたのでここから見当をつけてきたと容易に判断できた。幸子は元夫の顔を見たと同時に音吉に「すぐ店にきてほしい」と電話していた。

音吉が店に着くと客は閉店でその元夫だけがカウンターにポツリと座っていた、音吉は元夫の里井修平に、

「里井さん、もう離婚は成立しているのだから幸子さんの目の前に現れてほしくはない」

「いや、しかし、私は貴方にそんなことを言われる筋合いはない」

「いやいや、私はこの幸子さんを雇用している。その雇用主としての責任もある」

「ほう、そういうことか!それなら幸子とお前はできているのか？」

そこで幸子が、

「はい、里井さん、その通りで私は音吉さんが大好きです」

「そんな馬鹿な、このおっさんはもう70近いだろう...」

「そんなことは関係がありません」

「俺はお前に店をつぶされて人生が狂った、その責任を取ってもらうための話をしたい...」

「いやです。話もなにもかもすべて弁護士さんを通して解決しています」

「まあ〜今日のところは帰るが、その話をしなければ俺は死んで死にきれない」

音吉と幸子は考えていた。まだ里井は幸子の部屋を知らない。下手にこのままマンションに帰ると部屋が里井に察知される。そこで幸子がマスター今夜はタクシーで南インターのラブホテルで泊まりましょうという。音吉は友人の個人タクシーの大塚を呼んでいる、そしてこの2人がタクシーに乗ると同時にその後ろから福岡ナンバーのワゴン車がついてきた。幸子は、

「あの車は里井の車です...」

「大塚ちゃん、あの後ろの車をまいてくれ」

「ほう、これはおもしろい...」

と運転手の大塚はなぜか？喜んでいた。



幸子と音吉を乗せたタクシーは1号線を南下して京田辺の山の中を疾走している。この山の道はカーブが多くて危険な道だが元々この大塚は京田辺出身で道を知り尽くしていた。運転にはど素人の里井はついていくだけで必死だが、そこで大塚はカーブを曲がり切ったところで急ブレーキを踏んでいた。人間とは不思議なもので前に障害物があるとハンドルを切ってそれを避けようとする習性があった。里井もそれで右にハンドルを切ったがそこはガードレールがない崖だった。

幸子と音吉はそれを見てから運転手の大塚に、

「悪いけど、ここから南インターに行ってほしい」

「ほいほい、さっき自損事故があったようだけど、一応、110番しとくネ」

「そう、事故を見ればすぐ110番だから、...」

「もしもし、たぶん事故だと思います。崖の下の谷底にハザードランプがチカチカ光って見えます。えっ...私？いえ、事故は見ていません、ただ、走っていたら下に明かりが...あっ、はい、私は個人タクシーの大塚です」

音吉と幸子はラブホテルの朝のテレビで昨夜の事故を知った。それによると

「福岡県警から詐欺で指名手配されていた男が単独の事故を起こして死亡した」という動画もない簡単なニュースだった。

...この「働く女性たち」は、不定期でまだまだ続きます。

働く女性たち...「中流階級の落とし穴、離婚しても地獄・紀子」 17話

私にすれば少し遅い午後5時にいつものスーパーに買い物にいった。寿司のコーナーで高い鯖寿司を見つめていると私の尻に買い物籠の角がコンコンと当たっている、うん?と思い後ろを振り返ると30半ばの背の高い美女がつんとすまし顔で立っている。髪は長くピチピチのジーンズはかなりセクシーだが、私はそれを無視して3切400円が4切500円の鯖寿司のどちらを買うかと悩んでいた。この店の鯖寿司は旨くて安くてなにより私の大好物だった。

すると後ろにいたその美女が特上の鯖寿司1本1980円を手にもって私のカゴに入れた。えっ?と驚く私に、

「もう、伊奈利ちゃん...水臭い...私よ～」

その美女はこのスーパーのレジ係で紀子といい私服では初対面になる。もう3年ほど前からレジの間のほんの数秒間の会話を楽しんでいた。そのころは朝から6時間ほど働いていたが、シフトが変わって午後5時からだと聞いていたのでそれ以後会ってはいなかった。その紀子さんが、  
「いや～私の勘違いで今日は勤務がなかったのにでてきてしまったの。これもたまの息抜きだと思って今夜は11時30分までは家に帰らないと決心したの...」

「ほう、それはいい」

「はっ?...それはいいって伊奈利ちゃんは女に恥をかかすの?」

「うん...ん?～はっ?...」

私の頭はパニックになっていた。たしかに私はこの紀子さんが好きで買い物のレジには必ずこの紀子さんを探してまた休みのシフト、休憩時間も知っていたのでその日、その時間を避けて買い物をしていた。しかし、それは老人の唯一の楽しみであって同じレジでも気が合った女の子のほうが気分がいいからだ。それにこの紀子さんは夫と2人の子供がいる。この展開に言葉もなく私はチンプンカンプンのことを言っていた。

「いや～私は独身だからこんな鯖寿司1本も食べられない...」

「だから、私もこの特上の鯖寿司は大好物なの...」

「はっ?あああ～いいよ、いつも楽しくお話ししてくれているから私が紀子さんにこの鯖寿司を買ったげる」

「ほ、は、へ...い、伊奈利さんたしか?作家ではなかったの?呑み込みが悪いのネ～」

「ふむ...そういうことなら、ほな、居酒屋でも行く?」

「ダメダメ、旦那もお酒が好きでどこで会うかはわからないし...伊奈利さんの家でこの鯖寿司を食べましょう」

こうして2人は少し離れて自転車で我が家に来た。紀子さんはワインが好きということでワイン

で乾杯して色々話を聞いていた。紀子さんの家はすぐ近くでいわゆる少し高級な建売住宅に住んではいるが、旦那の車のローンと家のローンで家計は火の車だという。そして紀子さんは、「あのスーパーでは最大8時間しか働けないの、それではやっていけないから午前中の6時間は事務のパート、そして家に帰り家事や夜ごはんの支度をしてから午後5時から6時間をあのスーパーで働き1日に12時間働いてやっと生活ができるの...」

「そうなの...それなら子供たちとの時間もないよね～」

「幸い、旦那の母と同居だから子供の面倒は見てくれる」

「旦那の給料は安いのか？」

「それが結構いいのだけど車が好きな上、次々乗り換えてそのローンが...」

「しかし、それでは紀子さんの身体が持たない...」

「そうよね～うちの旦那はそこがわからないらしいの、そればかりか我が家は家もあるし車もある中流階級だと自慢しているの、嫁がパートを2軒もはしごしているのに何が？中流階級なのよ、それに煙草も酒も飲むし、それに小遣いを月に5万円も取るのよ～伊奈利さん」

紀子さんは少し酔ってきたのか、さらに自問自答のグチをいっている。

「私もね～そら～一時は離婚を考えたが、でもね同じスーパーで働く織江さんも私とまったく同じ境遇で織江さんは離婚の道を選んだの。しかし、母子家庭になって小さなアパートで母子3人が暮らしているがやはり生活は苦しくて結局のところ1日に2軒の店の掛け持ちでやはり12時間も働いているの...」

「それなら離婚の意味がないね～」

「そうでしょう...私も旦那と同じでやはり家もある車もある中流階級の意識はあるの。それに二人の子供の大学の入学金、学費の貯金もしなくてはいけないし、それにこの二人の子供が結婚の時に安いアパートではこれも親として恥ずかしいし...」

「しかし、それでは...紀子さんの人生が...」

「そう、でもね～それしかないの伊奈利さん」

その話を聞いていた私のほうもその悪い旦那と同じことをしていた。その私の元妻もこの紀子さんと同じことを悩んでいたのかと思うと反省の弁もでてこない。それでも母親は子供を育てなければならない、女性のすべてがそうだとは思わないがなんと女性は強いものだと思った。それを察してか紀子さんが、

「ねえ、伊奈利さん、私も離婚など考えずに仕事を頑張るわ...だから、今後もこうして時々私のグチを聞いてくれる？」

「ああ、いいよ～私もこんな若くて綺麗な紀子さんとこうして酒が飲めたら嬉しい」

時間はもう10時半になっていた。いつも間にか紀子さんは私の横に座っている。私も酔ってきたのか私の手はジーンズの太ももからビーナスの丘を撫ぜていた。こういうシーンでは男より女のほうが堂々としているものだ。紀子さんは私に命令口調で「電気を消して」というから私はそ

れにしたがうしかなかった。狭い部屋にはベットとホームコタツがあるが、その間の狭い場所で二人は愛し合っていた。この2人は今日が初めてだが、もうかれこれ3年もの間にレジで色々話をしてきたから2人ともテレも遠慮もなく親しい恋人同士のような愛撫になにも抵抗はなかった。

紀子さんとメールアドレスを交換していた。そして紀子さんは私が伊奈利さんに会いたい時はメールの暗号で「鯖寿司」と打つから...といいながら満面の笑顔で自転車に乗って帰っていった。その数日後、紀子さんのいる時間にスーパーに行くと紀子さんは小さな声で「この前は、ありがとう」といつてくれた。その時の買い物は「鯖寿司3切」の400円で次の鯖寿司1本買いの日が楽しみである。

最近、女性のトラックの運転手さんをよく見かけます。宅配便などの小型、中型トラックはもちろん、建設現場に生コンを運ぶ大型ミキサーカー、そして市バスの運転手さんまでかつて男性の仕事と思われていた職場に進出しています。このドライバーの仕事というのはまったく男女の賃金差別はないから女性も働き甲斐があります。

私の住んでいるところは国道1号線、171号線から京都市内に入る入り口になり早朝などは時間待ちのトラックが駐車している。そしてケータイなどの指示で現場に向かっているようだ。ある朝、早朝散歩をしていると大型トラックの女性運転手さんが地図を持って北の方向を指差してなにやらブツブツいっている。この女性というのは方向音痴が多いようで道を聞かれた場合はほとんど反対に歩いている場合が多い。

その女性が私に声をかけた、

「すみません…久世工業団地とはこの先ですか？」

「あかんわ…行き過ぎでUターンして久世橋を渡って5分ほど走るの」

「はい、わかりました」

とはいうが、この大型トラックで迂回する道を一応教えたが理解していないようだ。京都の道は幹線道路以外は狭くて大型トラックが走るようにはできていない。そこで私がトラックに乗り込み案内することになった。

彼女は北九州の小倉から来たという。なかなかの美人で長い茶髪でヤンキーがそのまま大人になったという雰囲気を持っている。彼女は若林博美と自己紹介しながら

「すみません～このような案内を…いつもは大阪まで荷物を運んでいます、京都は初めてで…」

トラックは硝子会社で荷物を降ろした、昔のようにロープもシートもない、荷台が両方に開き大型リフトが荷物を降ろすがその時間は10分もかからない。そして博美ドライバーは九州の会社に荷下ろし完了の電話をしている。

「はい、京都市内で待機…了解」

博美さんを大型トラックが無料で駐車できる京都中央卸市場まで案内して朝ごはんを食べようと食堂にいた。博美さんは、

「ありがとうございます、おかげで無事仕事ことができました」

この博美さんは30才でバツ1だという、子供は1人いるが実家で面倒を見てもらっている。元々は化粧品会社の美容部員だったが、結婚を機会に辞めた、そして離婚したがパートでは生活ができずトラック運転手になったという。そんな話をしている間に会社から電話があつて帰りの荷物は明日の朝の9時に〇〇運送の配送センターで積み込むという連絡があつた。博美さんは、

「よかった明日の朝までお休みよ～伊奈利さん、〇〇運送配送センターって知っていますか？」  
「ああ、それって俺の家の近く…しかし、今夜は泊まりだが、どっかのビジネスホテルに泊まるの？」  
「なに～そんなことないよ～泊まっても会社は費用はくれない、いつもはトラックの中で寝るのよ～」  
「トラックの中か…でもそれは仮眠程度にしかならない、それでは疲れは取れないだろう～」  
「それが宿命なのよ～日本のトラック業界の…」

トラックを〇〇運送配送センターに回送して博美さんは汚い我が家にいる。とりあえずタベ―睡もしないで走ってきた疲れをとりなさいと私のベッドで寝てもらった。私はその間は京都市立病院で眼の治療を受けていた。

その帰りに夕食の買い物をして家に帰ると博美さんはもう起きていた。しかも、シャワーを浴びたのか下着のままで綺麗に化粧をしている。そこからは大型トラックの運転手という雰囲気の一欠けから見つけられない。もっとやらしくいえば高級ヘルスのナンバーワン嬢といっても過言ではない色気にたじろいでいる私に、

「伊奈利さん、次からは会社について京都便の専門になります。京都便は運賃もよく帰りには必ず荷物があります。その分収入も増えます。ですから、次から京都に来たらここで休憩したり泊まってもいい…」

私は、それに返事もせず元美容部員の赤い唇にキスをしていた。

(その14話完)

♥このミニ小説も「愛の人妻ウォッチング」「小説 スーパーの女性たち」とこのお話で合計34話となった。2日に1回の更新だが、これすべて完全書き下ろしになっています。まだまだ続けるつもりですが、もし、こんな話があると簡単なヒントがあれば掲示板に書いてください。私が小説にします。尚、ヒントをくれた人の名前も書きますから必ずHNをお書きください。掲示板は↓

掲示板その1 [http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs ?](http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?)

その2 <http://8710.teacup.com/kyotoinari/bbs>



京都の理髪店の料金は3800円～3900円ぐらいに統一されている。20数年前から安い散髪屋さんがあったことはあったが、数はそんなになかったし料金も2000円前後で安い悪いのイメージがあった。その後、リーマンショックぐらいからスーパー銭湯の中に1000～1200円の理容室ができたことから散髪は散髪屋さんですという文化が消えてきた。

さらに1600円前後の店が林立、そしてカット10分1000円の店までできたものだから家内工業的な街中の散髪さんは大打撃を受けている。私も年金生活を始めたと同時にこのカット1000円の店で散髪をしている。この店は朝から客が椅子に座って並んでいる、私は並んでまで何かを食べたり買うという文化はない、これは私だけでなく京都人の多くがそうで、テレビなどで行列ができる店を紹介しているが、何で並んでまで物を買わなければいけないのかが不思議でならない。だからスーパーにある店だから、買い物ついでに空いていたら店に入るということにしている。

店は四つの理容椅子があり男女2名づつが働いている。私は女性の理容師にやってもらったが、わずか10分だから話すこともないし顔は大きなマスクで隠れている。やがて散髪の終わりかけにその理容師が店長に、

「このお客様で上がってよろしいですか？」

と聞いている。そして私に、

「伊奈利さん、居酒屋を付き合っ...」というが、誰だかはまったくわからない。その女性はマスクを下げて、

「ほら、伏見稲荷の奥川の娘の理子よ～」

そして2人は駅前の居酒屋「ポン吉」にいた。稲荷の奥川とは「奥川理容室」のことで私が伏見で住んでいたころの古くからの友人がやっていた。その娘が理子さんで10年振りぐらいの再会になる。聞けば理子さんは理容学校を卒業して両親と3人で理容室を経営していたが、安い散髪屋に客を取られて経営ができなくなったという。そこで私が、

「理子さん、それはそうだが、なにも憎い商売敵のカット10分1000円の店にいかなくても...」

「それでもね～仕事はかなりハードだけど、あんな店でも月に40万円になるときもあるの...それにお父さんの店はもう古いし～あれでは客もこない...それで改装するお金を貯めているの...」

「いずれ景気が良くなって格安の理容室も淘汰されるが、まだ先になる」

「そう、あそこで働いている人たちはみんな自分の店を持ちたいという夢があるの、手っ取り早く稼ぐにはあれしかないし歯を食いしばって働いているの...」

この理子さんは30才近くになるがまだ結婚の意思はないという。なにはともあれ店をリフ

オムーして1人娘として両親の面倒をみないといけない。それにはお金もいるし...でも、その反面、女としてなにかを忘れているといつも悩んでいると私に涙目で訴えているが私にはなにもできないという。理子さんは、

「いいのよ～まだ店がいそがしかったころ私は高校生で不良になりかけたときに救ってくれたから人生の恩人よ！」

「そういえば、私が消防団員のころ夜回りでいつも公園でたむろしている不良どもに説教していたが、あのときのこと？」

「そう、あの時は私もメチャクチャで煙草は吸うは、男とも遊んだわ～」

そして理子さんは、

「はあ～伊奈利さんに話を聞いてもらってスッキリしたわ～これから伊奈利さんの散髪を私がしますから～家に行きましょう...」

「さ、散髪ってさっきしてもらったからいいよ～」

「なにいつているの...心の散髪よ～あんな10分1000円の散髪で心までスッキリしないでしょう？元々、散髪屋さんというのは町内には必ず1軒あってその町内の情報が集まり、どこに寝たきり老人がいるとか、徘徊老人を監視したり、あそこの息子が不良に誘われているかの情報基地だったのよ～」

「そうか～その役割も大事だね～」

「私はそんな散髪屋さんをしたいのよ～」

「し、しかし、それと私の頭の散髪との因果関係は？」

そこでこの居酒屋「ポン吉」のママが、

「伊奈利ちゃん～相変わらず鈍感ネ、女に恥をかかすの～この理子さんに心の散髪をしてあ・げ・て・」

「.....」

(その15話完)

駅前に京都限定チェーン（8店）の眼鏡屋さんがある。その店は店長とパートの女性だけの2人体制でどちらかが休みの時だけ他の店から応援がくる。応援の女性はパートで制服なのか黒のスーツを綺麗に着こなしている。かなりの細身で背が高くて制服のミニスカートからニョキリと綺麗な脚が、それもストッキングにラメが入っているのかキラキラしている。通勤は家が近いのかピンクの自転車に乗ってくるが裏に自転車置き場はなく店の端に遠慮がちに置かれている。

そのピンクの自転車があるとその娘が出勤していると分かるのだが、これは私だけでなく客を駅待ちしているタクシードライバーや近所の商店主まで気にかけていた。その人気の女性は瞳ちゃんはまだ24歳と若くこれらのギャラリーにも笑顔で接していた。だから冷やかしの客も多く無料サービスの老眼鏡の度数計や視力の検査にと店はなにかと賑わっている。

男の店長が休みの日は男の代理が、女店員が休みの時はこの瞳さんになるからもう1人の女性パートとは顔合わせがないが、店に来る客は店に入るなり「あれ、瞳ちゃんは？」とくるからこの幸子というパートは相当頭にきていた。そこで私に、

「もう～誰もかれも瞳ちゃん、瞳ちゃんですわ～ほら、伊奈利さんもそうでしょう？」

「いやいや、私は幸っちゃんの大ファンよ...幸っちゃんは眼鏡が良く似合うし、その知的な顔がいいよ～ネ店長」

と、話を店長に振ると店長も、

「そう、眼鏡屋には眼鏡美人が一番、幸っちゃんのファンも多いよ～」

この眼鏡店のチェーンも将来の人手不足を予想してパートを正社員にすることになった。その希望者を募集していたが、この店勤務では瞳さんと幸子さんが応募していた。しかし、一つの店舗には店長ともう1人までとなったので店長は頭を痛めていた。たしかにレギュラーのメンバーとして幸子が有力だが、それは本社が決めることであって店長には権限はない。そして結果は瞳さんが選ばれたものだから幸子さんは頭にきて私に飲み連れていけとメールがあった。

眼鏡店のすぐ近くにある居酒屋「ポン吉」で幸子さんは、

「私はこの店でもう5年、瞳さんは違う店の所属でまだ2年、なのになんで瞳さんがこの店の正社員で私が違う店に勤務して瞳さんが休みの日にここに応援に来るって少し話の筋道が違うのではないの伊奈利ちゃん」

「そら～そうだ、しかし、本社は若手を育てたいという方針らしいと店長はいつていた」

「若手？私はまだ28歳、瞳さんはもう24歳、そんなに変わらないよ！」

時間は夜の10時になっていた。パートの勤務は20時までで店長は10時に1人で店を閉めて帰るが、この居酒屋からはその様子が見える。ところが店のシャッターの前には人影が2つ

ある、私と幸子さんは目を凝らして見たらその人影は店長と瞳さんだった。この2人店の前でタクシーを待っているようだ、幸子さんは、

「ほれ、伊奈利さん、追跡...」

店長と瞳さんを乗せたタクシーは南インターのラブホテル街に向かっていているようだ。私は、  
「たしか～店長は奥さんがいたはずだが...」

「そう、本社の専務の娘さんと聞いている」

「それなら不倫やな～あんな可愛い顔をした瞳さんが...店長と不倫」

「ほらほら、やっぱり伊奈利ちゃんも瞳さんのことが...もうキライ！」

前のタクシーはホテルに消えた。それでどうすると考えていたら幸子さんは運転手に同じホテルに入ってとっている。瞳さんらの部屋は103号室、そして私らが入った部屋は102号室で隣り合わせになった。幸子さんは壁越しにコップを当てて聞き耳を立てているがなにも聞こえないとイライラしている。そして幸子さんは、店長のケータイに電話をしている。

「もしもし、店長、瞳さんとの不倫を本社の専務さんにいいますよ～」

電話の内容は私にはわからないが、どうやら店長が降参してもう一度本社にかけあって幸子さんを正社員にすると約束しているようだ。そして電話を切った後に私らも楽しもうと抱きついてきた。それにしても転んでもただでは起きないという女の根性をみせつけられた。

(その13話完)

♥このミニ小説も「愛の人妻ウォッチング」「小説 スーパーの女性たち」とこのお話で合計33話となった。2日に1回の更新だが、これすべて完全書き下ろしになっています。まだまだ続けるつもりですが、もし、こんな話があるとヒントがあれば掲示板に書いてください。私が小説にします。尚、ヒントをくれた人の名前も書きますから必ずHNをお書きください。掲示板は↓

掲示板その1 [http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs ?](http://9124.teacup.com/kyototaxi/bbs?)

その2 <http://8710.teacup.com/kyotoinari/bbs>

## その12 昇り竜の女 竜子

京都のデパートやスーパーの催しで人気があるのが各地の物産展。力を入れている県などは開催初日の挨拶に県知事が来るというのもある。しかし、そのほとんどは民間の業者で1年中全国を回っている。その中でも人気なのは大北海道展、大九州展になる。その1番人気の大北海道展が開催されているから見に行った。

この催しの目玉はなんといっても試食だが、これだって金がかかっているから我らには試食なんてものは勧められたことがない。なんせ売り子は海千山千、百戦練磨の商売人、買う人間か？買わない人間か？瞬時に分かるという。目の前の客が買わないと判断したら試食の皿を手を持っていても絶対に目は合わさない。そんな時に若くて美人の売り子が笑顔で試食を私に勧めてくれるじゃないですか？私は本当にビクッラこいていた。私もうれしくて、

「すみません～松尾のジンギスカンのパックはありますか？」

「ああ～あいにく今回はありません。お客さんは松尾のジンギスカンはお好きですか？」

「いえ、その大昔に仕事で函館に1年ばかり住んでいましたから、なんとなく懐かしくて」

「へえ～私は函館の福島町というところで育ったのです」

「ああ、北島三郎、千代の富士、千代の山の出身地？私も福島町に知り合いがいました」

「へえ～女の人？そういえば私の母も京都に知り合いがいるとかいっていませんか、昨年交通事故で亡くなりました」

なんとなく気が合ってランチを一緒に食べることになった。この女性は30歳で福島竜子さんといってこの展示会の責任者だという。それを聞いて私は、

「えっ、福島？福島町には福島姓は多いの？」

「そんなことはありません、親戚が2軒ほど...」

「あらら、それは福島寛子さんて知っていますか？」

「はい、それは私の母です...」

竜子さんはこの日は展示会の最終日で午後5時に閉店撤収して7時には終わる、もっと母のことを聞きたいというので我が家に来た。

私は函館に出向して松風町のアパートに住んでいた。その近くに食堂がありその経営者の姪が竜子さんの母の寛子さんだった。寛子さんは函館高校を卒業してそのまま店の手伝いをしていた。そして寛子さんが19歳、私が25歳のころ知り合い恋愛していた。1年後会社から急遽帰って来いの連絡で京都に帰ることになった。車で来ていたので七重浜で新日本海フェリーに乗る前に2人は結婚の約束をしていた。

京都に帰ると会社のシャッターには倒産の張り紙があった。私は会社の寮に住んでいたが、そ

の寮もすぐに引き渡さなければならなかった。そのころ函館の食堂も近所の火事が原因で全焼になっていた。今のようにケータイなどはなく家の固定電話しか連絡方法がなく双方共電話はつながらなかった。私は寛子さんの食堂が火事とは知らないまま時間が過ぎていた。やがて就職も決まり少し余裕ができたので再び函館に寛子さんに会いにいったのが2年後だった。

そして寛子さんの消息を調べたが、その時、寛子さんは恋人の男と大型バイクでドライブ中に事故に遭って2人共病院に入院中だった。それでやむなく会わずに帰ってきた。竜子さんは、「その話を母から聞いています。京都の男に騙されたと...それから母やヤケになり、暴走族らと付き合い、結婚も2回して2回離婚、その2回目の結婚の時の子供が私です。そして去年これも交通事故で亡くなりました」

「そうだったのか～会社さえ倒産しなかったら、火事さえなかったら...」

「私...伊奈利さんが私の前に現れた瞬間になぜか母のことを思い出したのです。それで強引に試食を勧めたのです...きっと母が「私を騙したのはこの男...」と合図したのだと思います。

それはそれは悪かったとしかいえないと考えていたら、竜子さんが、「しかし、もし、母と伊奈利さんが結婚していたら私はこの世に存在していないことになる、これも何かの縁」と酒を飲んで寛子さんを偲んでいた。

「母はよく私はアイヌの血がまざっているから毛深いのといっていた、私もそうで...」

「そう、寛子さんの毛深いというのは体毛ではなく、背中一面に薄いうぶ毛が昇り竜のように渦を巻いている。俺はよくその竜のうぶ毛で遊んでいた」

竜子さんは私もそうと後ろを向いてセーターを捲り上げノーブラの背中を見せている。そこには寛子さんと同じうぶ毛の昇り竜がいた。そして私はその竜に優しくキスをしていた。

(その12話完)



## その11 マネキンの真希ちゃん

---

名前は「真希」ちゃん、マネキンだけど一生懸命働いています。しかも24時間休憩なしです、食事はなし、お風呂にも入れてはもらえないけど不満は口にも顔にもだしません。でも季節の変わり目にはこの店の高価なファッションを身に着けてくれます。いわばこの冬京都で一番人気になるファッションセンスを着てのお仕事になります。

この大型スーパーには真希ちゃんの仲間のマネキンが約1000体ほどあります。一番年上のお姉さんは85歳のトメさん、シルバー用品の売り場で活躍しています。なんでもGG割引というのがあって55歳以上のシルバーの会員さんには月に何回か5%引きのサービスがあるそうです。これらのマネキンは京都の老舗マネキンの吉忠マネキンや七彩マネキン、中小マネキン会社からの派遣社員です。

派遣といってもみんなそれぞれ特技や容姿端麗などで勤務する売り場はすべて違います。やはり、一番時給が高いのはワコールやトリンプの下着売り場です。セクシーな下着を寒い冬でも着せられて1日立っているのですからこれも過酷な労働になります。しかも、マネキンだからとバカにしているのか、着替えのときも更衣室なんて用意はしてくれません。通路でお客様の見ている前で裸にされて...しかも、そのまま裸で何時間も放置されることもあります。

私がこの真希ちゃんと最初に眼が合ったのは一年前の冬、真っ白な毛糸の帽子を被りすました顔で私にウインクしてくれたのです。色白でスタイル抜群のこのマネキンに一目惚れしてから暑い日も寒い日も毎日会いにいきました。そして名前を「真希」ちゃんと命名して楽しんでいたのです。ところがあるときから真希ちゃんがいなくなったのです。

これはひょっとして売り場が変わったのかと広いスーパーの中を1日かけて探しましたが見つかりません。それなら派遣先が変更になったかもと最近できたイオンモール桂川店まで探しいったが、この店はかなり広くて全店検索するのに3日もかかってしまいました。それでも真希ちゃんは見つかりません。けど...こうして女性のマネキンさんを何千体も見たが、やはり真希ちゃん以上のいい女性はいないということを再確認できたことを神さまに感謝していました。

その夜、ふと眼が明いて時計を見ると2時だった。マンションの前にタクシーが停まり、そこからコッコッとハイヒールの響く音がして我が部屋の前でその音は止まった、そしてチャイムが「ピン～ポン～」えっ、こんな真夜中に誰？私は恐る恐るドアの前で、

「ダレですか～」

「はい、こんな夜分すいません～真希で～す～♪」

「真希、??？」

「はい、いつも伊奈利さんに眼で遊んでもらっているマネキンの真希です」

私は喜んでドアを開けたらそこには真希さんがいた。真希さんの話では、  
衣装替えをする時に女子社員が私の上半身を誤って床に落としたので顔に傷がついた、それで派遣元の七彩マネキンで治療を受けて明日からまた高級女性服売り場に復帰しますという。そこでその全快祝いにとワインで乾杯をしていた。真希さんは、

「私もいつも伊奈利さんが店に来るのを楽しみにしていたの...そして今回のことでしばらく会えなかったから、ネットの検索で探してここに来たの...」

「俺も...会いたくて桂川モールまで探しに...」

「はい、桂川の友人のマネキンからもメールが来てそのことを知っています」

やがて酒がまわったのか真希ちゃんの白い肌はピンクになっていた。豪華な冬物の服を脱がすとそこには下着はなく直接服を着ていた。

「そうか～マネキンは下着を履いていないのか～しかし、やっぱりこういうことはセクシーブラやビキニのパンティーを手でなぜたいし～それに脱がしたいけど...どこかに女性用のパンツがたしか～1枚あったはず」

と、妙なことを考えていた時に目覚まし時計が鳴った。

(その11話完)

♥クリスマスプレゼント、天からパンツが降ってきた。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11403967306.html>

全国チェーンの讃岐うどんは安くてなかなか旨い！ここもやっぱり正社員は1人か2人で残りはパートやアルバイトになる。すき家のパートの盛り付けをするパートの女性もすばらしい腕を持っているが、この讃岐うどんの盛り付けをする女性たちもすばらしい技術を持っている。他の部署の女性もよく訓練されていて無駄がない働きをしている。

そういう意味では男性より女性の方が技術職に向いている気がします。しかしながら女性の機敏な働きを評価する夫は少なく妻の働きを単なるパートとして馬鹿にする亭主も多い。その原因はやはりパートという身分と賃金の安さになる。どんなに一生懸命働いても一番身内に近い旦那が評価しないのだから心は旦那からどんどん離れていくがそれは決して見せない配慮をする利口な女性が増えています。

私が週に2回はいく讃岐うどん店のパートの昼勤務が終わるのは午後3時～4時が多い、これはまだ子供が小さいからで保育園や学童に迎えにいかねばならない女性です。ある時、節子さんというパートが仕事が終わったのか私服で迎えにきた車に乗ったのを発見した。それで次の日に節子さんに聞いた、

「あれ、迎えに来ていたのは旦那なの？」

「ちがうちがう～あれは男友達～よ」

「おとこともだち？昼間から堂々と不倫？」

「あんな～伊奈利さん、不倫というのは愛とか恋でドロドロしたものでいずれ憎しみあって両方が傷つくの、友達というのはその反対で色々話を聞いてもらう人なの」

「し、しかし、もし酒に酔った勢いでHなんかしたらそれは不倫やで～」

「いえ、それは不倫ではなく友情よ！伊奈利さんだって色々あるでしょう？」

たしかに私も色々あったが、それらのことがすべて不倫で相手や私がそれで苦しんだことは一度もない、しかも旦那も知らないから家庭は平和そのものだ。節子さんらが仕事で見せるあの芸術的な技術を生活に生かしていることになる。そして節子さんは、

「伊奈利さんも女友達がほしかったら紹介するよ、誰がいい、あっ、分かった、佳織ちゃん...ネ」

「いやいや、佳織ちゃんも亭主持ちだから、不倫やで...」

「ほら、まだ分かっていない、おとこともだち...佳織ちゃんも旦那のことで色々悩んでいるの、それを聞くのも不倫なの？」

こうして佳織さんとデートをすることになったが、お互い車はなくママチャリで桂川河川敷のサイクルロードを嵐山まで走っていた。佳織さんは走りながら、

「旦那は暴力こそ振るわないが口の暴力がすごい、特にお酒を飲むと信じられないほどの悪い

言葉で私をネチネチと...これ以外はよく働かし子供にもやさしい、子供のためにも辛抱しなければならぬと歯を食いしばっているの、でも...それで私の人生を後で後悔するのだったら嫌だし...」

「あのね～口の悪い男というのは相手からの反論がないからイライラしてさらに挑発するものなの、だから佳織さんもこれに負けないほどの暴言を吐いたら旦那は喜ぶと思う...」

「へえ～伊奈利さんそんなものなの？」

「そう、暴言の練習をしようか？こういわれれば、こういう反論をする練習」

「えっ、それっていいね～でも、ここでは...」

と堤防の上を見るとそこには「嵯峨野」というラブホテルがあった。そしてママチャリを2台綺麗に並べて部屋に入った。そしてビールを飲みながら佳織さんの話を聞いていた、

「節子さんもそうだが、他のパートの女性たちの仕事がテキパキできるのは旦那に不満がある人ばかりなの、特に注文を聞いて瞬時に盛り付けする至難の技をしている間はなにもかも忘れられるからなの」

「そうか～あれは慣れとかではなく、怨念なの？」

「そう、だから幸せな女性は盛り付けなんかは絶対にできないの...」

「そやね～こんな話を安部首相に聞いてほしいネ」

という佳織さんは腹を抱えて大笑いしていたと思うと今度は涙をポロポロ流して私に抱きついてきた。そのあくる日に店にいき佳織さんに「肉うどん」を注文するとその丼には肉が山盛りになっていた。

(その10話完)

## その9 最低の女 理絵

京都府には〇〇〇レコード専属歌手という人たちが約200名ほどいるそうです。この中の多くの方はカラオケ名人といわれてスナックやカラオケ居酒屋で活躍しているが、残念ながらヒット曲はないから無名のままだ。その過程にはこれまた芸能事務所があり作詞作曲の手配、スタジオでのレコーディング、CDの製作、そして豪華なポスターまで作ってくれるがこれすべて有料になります。つまり、歌手になりたい人たちが顧客となる商売でもある。

その歌手になりたいという女性がいる。その人はカラオケ居酒屋「ポン吉」のママで35歳の理絵さん、理絵さんの父親は京都の有名ナイトクラブのバンドマスターでしたが、10数年前にクラブが閉鎖されたのを機会に「京都おこしやす楽団」を結成していた。そのバンドのボーカルをしていたのが理絵さんで歌唱力は抜群でその上色白の美人で二十歳のころには約500名の後援会もできている。

その後、バンドの経営がうまくいかずバンドは解散していた。そして理絵さんは2年前にこの店のママとして働いていたが、歌手への道は捨てはかないようだ。そして私に、

「伊奈利ちゃん、最近、私のところに歌手デビューしないかという誘いが数社もきているの、もちろんインチキ近い話でなんでも300万円ほどいるって...」

「ああ、それね～私のところにも本を自主出版しないかとほぼ毎日のようにメールや電話がある」

「そう、それと同じことやな～」

これがスポーツの世界なら数字として成績ができるからなんら問題もないが、歌手や芸術、文化などは数字がでないから少しの運にかけるしかない。この理絵さんとは昔よく喧嘩したのです。それは私がものすごく音痴だったから歌は歌わない、それを理絵さんは練習すれば絶対上手くなるという。その反面、理絵さんは書くことが大の苦手というから、誰でも練習すれば小説ぐらいはすぐ書けるといっていた。と、そのうちに小説が下手なのになにかのきっかけで私が先に小説デビューしたのだから、歌の上手い理絵さんとの仲は微妙になり疎遠になっていた。その後、どちらも鳴かず飛ばずになったので再会していた。理絵さんは、

「あのころは夢があった、先に伊奈利さんがデビューしてテレビや新聞にでていと人に聞いても素直になれず見ていない、伊奈利さんの本も本屋さんで見ても買ってもない。今から考えたら、私って...最低の女だったのね...」

「いやいや、それはこっちも同じで理絵さんの舞台にもいかなかった。それに後援会にも入っていないからどっちもどっちよ～人間とはねたみとしっとでできているのかもわからない...」

こうしてお互い15年ほど前の話からの話をしていく。

「しかし、理絵さんはまだ35歳だ、結婚の夢もあるし、歌手の夢だってある。こんなインタ

「インターネットの時代だからユーチューブに歌を投稿してそれがきっかけでデビューできる可能性もある」

「いや～私の人生の失敗は歌ばかりでそんなインターネットどころか、スマホも扱えない、今更、そんな勉強する気もないから...やっぱりダメよね」

「いやそんなことはない、俺だってPCを覚えたのは10年ほど前だ、やる気になればできるって...」

「あら、それなら伊奈利ちゃん、ここで歌を歌ってよ、下手でしょう！、伊奈利ちゃんにこれから歌を勉強しろといったら素直にする？やる気になればできるのでしょう、ほら、やってよ～」

こうしてまた口喧嘩をしていたが、どちらもこれに気がついて大笑いしていた。そして理絵さんが、

「ネネ、伊奈利さん、まだできるの？」

「うん？何ができるの？」

「あほ、相変わらず鈍感ね～！、ほら、あの～Hよ、伊奈利ちゃんとはよく喧嘩もしたが、その数だけHもしたもんね～」

「ああ、Hなら、まだまだ元気！」

「それならもう今夜は店を閉めるから...」

というと同時に客が数人入ってきて、

「ママ、開店2周年おめでとう～」

と大きな花束を持った元理絵後援会会長の男がいた。ママは、

「伊奈利ちゃん～今夜遅くなっても部屋にいくし～」とウインクをしてくれた。

(その9話完)



## その8 オリンピックの夢 詩織

---

駅前に11階建ての白亜のビルがある、これはフラワーという会社で高級婦人服のメーカーの本社になる。このビルのほん近くに社会人陸上チームのフラワーキャンドルの選手の寮がある。このフラワーキャンドルの看板選手はオリンピックに2回出場した森山佳代でチームの選手は総勢15名の大所帯で午前中は練習に励んでいる。選手の朝は早い、6時なれば揃いのユニホームで京都市内を約10キロほどを走るようだ。

私も朝が早くこのころに走っている選手と顔なじみになった。選手の名前はこのフラワーキャンドルのHPを見ればすぐわかる、その中でも青森山田高校出身の武藤詩織選手24歳がお気に入りの選手になった。この詩織選手がたまたま私から家からでてくるのと走ってくるのが同時だった。詩織さんは、

「あらら、おじさん～家ここだったの～私はそこの公園でいつもウォーミングアップしてから走るの～」

それから数週間も経ったころ、駅に近い居酒屋「センチュリー」でフラワー社員の宴会が行われていた。この居酒屋はカウンターもあるもののフロアーが広くて宴会にはいいと付近の会社がよく使っている。私もここのマスターと友人で飲みにくることがある。この時のフラワー会社の宴会は総務部の送別会だった。そこに詩織さんも参加していて私を見つけて、

「お話があるの～電話してください」  
とって電話番号とメールアドレスの書いたメモをくれた。

そのあくる日に電話をすると詩織さんは、  
「伊奈利さん、どっか縁切のできるお寺か神社を知らない」  
「縁切り、そうか～悪い男と縁を切りたいの？」  
「そんなことではありません...」  
「それなら安井金比羅神社がある、ここは悪縁を絶ち、良縁を呼ぶという神社だ」

私と詩織さんはタクシーでその縁切り神社に向かった。詩織さんは絵馬の奉納やおみくじを買っている。そしてその境内のベンチに腰掛けて色々話をした。詩織さんはインタハイの5000メートルで2度優勝していた、それで同じ青森山田高校の先輩、森山佳代選手に誘われてこのフラワーの陸上チームに入った。それから5年が過ぎても成績がよくないという。私が、

「でも、全国都道府県女子駅伝でも京都代表やふるさと選手としてもう5回も出場してそれなりの成績を上げているのに、それに、今年もメンバーに入っている...」

「伊奈利さん、それなりではオリンピックなど無理なの...」  
「そうか～あのリーダーの森山佳代さんはなんといっているの？」

「あの人はこういう選手とは会社の花であって全国に遠征して会社を宣伝するものだ」と割り切っ

ている人なの。私ももうすぐ25歳になるからもう夢をあきらめて青森に帰ろうかと…」

「その踏ん切りのための縁切り、つまり、陸上選手と縁を切ることだったの？」

「はい、」

「で、それで…お参りしてどうだった～」

「ふ～ん、わからない…それで伊奈利さんにポンと背中を押してほしいの？」

「ほう、背中ね～つまり、結論がでなくて悩んでいるのか～」

2人は安井金比羅の北門から祇園の方に歩いていた。この辺りは京都市内唯一のラブホテル街でもう夕方になり悩ましいネオンが光っていた。詩織さんは普通のカップルのように私の左腕を強くつかんでいる。私は頭の中で「背中を押す？」とはどういう意味なのかと考えていた。それが詩織さんにも伝わったのか？

「伊奈利さん、私の人生は陸上ばかりで男の人と手をつないで歩いたのも初めてです。練習をしてもそれらもろもろのことが頭にいつもあるの…このもろもろを頭の中から綺麗に払拭できたら後2年は夢を見たいの…」

「その、そのもろもろのことを解決をするために背中をポンか～」

もうラブホテル街の最後のホテルになる。私は詩織さんの背中をポンと押すためにやむなく詩織さんをホテルに連れ込んでしまった。そして、部屋に入ると詩織さんは、

「私ネ～朝の練習でいつもここまで走っているの、そしてこのホテルの前でUターンして会社に帰っていたから、きっと安井金比羅さんが導いてくれたの～うれしい～」と、私に抱きついてきた。

(その8話完)

## その7 九条ネギの女社長 時子

---

平安時代でいう洛外とは羅城門(九条通り) から南のことになる。地域でいえば九条、鳥羽、吉祥院になるが、そのころの農家では九条ネギが盛んに栽培されていた。そして今でも九条ネギ専門の農家が数多くある、その農家にはそれぞれ「葱常」「葱万」「葱秀」などの屋号がついている。

この九条ネギというのは種を撒いて30センチぐらいに育つと引き抜き天日干しして苗になる。その苗を育成して収穫するが、種撒きから収穫までに1年もかかるという。そして加工するが、これすべて一軒でできないから種、苗、育成、加工と分業になる。その葱のカット加工を専門にしているのが「葱伊」という。この葱伊は自家農園もあるがそれでは葱がまったく足らず、葱を淀、八幡、滋賀県からも買って細かくカットして「葱入れ放題」の天下一品、ラーメン横綱などに納入している。

この葱伊は江戸時代から続く豪農だが、なぜか歴代男の子が生まれず養子をとっていた。そして今の社長も女社長で38才の時子さんでまだ独身になる。この時子さんは京都大学農学部で九条ネギを研究して博士になったという有名人でもある。この会社は東寺の近くにあるが、自宅は西国街道にあって私の家からすぐでありこれまた北山杉の庭がある豪邸です。その時子さんが私の家に来た。

「伊奈利さん、私も子供を産む限界年齢に近づいてきました。もう誰でもいいという訳ではないが、どうしても1人は産まない次は養女をもらって、その養女に養子をもろうということになります。そうなれば石原家の血は完全に絶えてしまいます。そこでなんとなく気が合う伊奈利さんの子供を...」

「もしもし、時子はん、今、なにをいっているのか、わかっているの？ワシ~もう年金もらっているのやで~それに子供を産ます元気など...」

この時子さんと私の出会いは5年ほど前のある事件です。それは葱伊の番頭が社長に内緒で業績を上げようと安い中国産の葱を仕入れて九条ネギとのミックスにしてスーパーなどにカットパック九条ネギとして卸した、それが発覚して大きなニュースになった。もちろん時子さんは知らなかったので逮捕はまぬがれたが、この番頭を解雇した。この時に番頭一派の社員も連れ立って辞めたので葱のカット加工と配達はストップした。そこで顔なじみの私に手伝えと命令、昼はトラックで配達、夜は葱の加工とほぼ徹夜を約一ヶ月続けたことがあった。

「ほら、あのときのお礼もまだしていないし...」

「いやいや、あれはあれでお金をもらっていますから、あれで十分です」

「いえ、もしあの時、伊奈利さんが手伝ってくれなかったら信用を失って今の「葱伊」はありま

せん。そして今回の危機です...今回も救ってください」

「し、しかし～.....」

「伊奈利さん、私のことを嫌いですか？」

「いや～そら時子さんは若くて綺麗だから...それに前から好きでした」

「それなら、なぜ？」

そんな押し問答を繰り返しているうちになぜか？キスをしていた。もうこうなれば理性も教養も常識もどこかに仕舞わなくてはお互いに失礼になる。子作りはさて置き、少し九条ネギの匂いがする時子さんの危機を時間をかけて十分救ってあげました。

(その7話完)

街中を若い男女がキャリーカートに発泡スチロールの箱を2、3箱積んで通行人に笑顔で声をかけているのをよく見かける。上着の制服の胸には「〇〇〇〇農園」「〇〇〇〇製菓」と書かれている。私もよく声をかけられるが、こんなものはインチキ商法だと相手にしなかった。

私が近所の公園でベンチに座り小説の構想を練っているときに若い女性から笑顔で、「私はひまわり製菓の北川歩美といいます。今、新製品のキャンペーンで洋菓子のワッフルを紹介しています。販売は一つからです」という。私もこの商法には色々問題があると思っていたので話を聞きたいと思ったが、ここは一つ買わなければ話にならないと380円も投資して一つ買った。

その女性は満面の笑顔でありがとうございますと頭を下げている。そこで私はそのワッフルを食べながら歩美さんに、

「どう、売れる...1日歩き続けるのだから、時給は1000円はもらわないとね〜」

「いえ、私らは時給ではなく売上げの歩合なんです」

「そうか〜業務請負業なのか〜それなら労働者でないから労働基準法は適用されないな〜」

「えっ？私はアルバイト募集で応募してこの仕事に...で、なに？その業務なにかは？」

「ほら、軽自動車で焼き芋やちり紙交換ってあるだろう、その仕事です。これだと日給も時給も支払われない、1人親方になる、つまり商売人になる」

歩美さんの話では、研修と称してアルバイトの仕組みを教わるが、これはキャリーカートと商品のワッフルを無償で貸してもらい、指定されたまたは好きな地域に市バス、電車で移動してその地域でワッフルを販売するという。交通費はすべて自費で売れた金額の50%をもらえると。研修では慣れたの人なら1日に約100個は売れて19000円の収入になる。得意先を多く持っているトップの人なら1日約300個は売れて57000円の収入なるといっていました。

そこで私は、歩美さんに、

「それなら歩美さんはそんなに若くて綺麗だからファンもついて1日に100個はいけまかな〜」

「そんな〜もう3ヶ月にもなりますが、1日20個が最高です。平均すれば10個ぐらいです。でも、これは私が悪いのですから誰にも文句はいえません」

「ということは1日に約1900円の収入ですね。一方のひまわり製菓は1900円の売り上げになり支出は0円...しかも日持ちのするワッフルだから無駄はない」

「でも〜他の人はもっと売っていますから〜」

「だから自分が悪いとおもっているの」

「はい...」

こうして話をしてなんとなく打ち解けた大学生の歩美さんに、

「それでは生活は大変だろう～」

「はい、これでは授業にでている暇はないから毎日、この仕事をしています。もう市バスに乗るお金もないので歩くだけです」

時間はもう夕方の6時になっていた。聞けば50個のワッフルを売り切ると会社には帰らなくてもよく納金は明日でもいいというルールだということで私は同情からか？残りの40個をすべて買うと行ってしまった。しかし、これこそひまわり製菓の作戦かも？若い女性がワッフルを売り歩いている姿は美しいと思う人もいる。特に話し相手がほしいお年寄りらがこの手に乗りやすい...ゲッ～やられたと思ったがこれはあとの祭りになる。

歩美さんは大喜びで私に礼をいっている。そしてお手洗いを借りたいというので私の家に来た。私も毒を食わねば皿までと思ったかは知らないが、歩美さんとワインの宴会をしていた。歩美さんは、

「実は...私はこんなことは初めてですけど～1日に100個も200個も売っている男子学生も女子学生もこういうお得意さまを何人も持っているのです」

「ほお～男子も...しかし、このインチキ商法を考えた奴は人間の本質そのものをよく知っている悪者だね～」

そうこうしているうちにワインの酔いもまわり、歩美さんは今日も1日歩き疲れだったのでシャワーを浴びたいという。そしてこの夜、2人は一つになったが、その行為の最中に、歩美さんは、「今日は本当にありがとうございます。伊奈利さん、買っていただいたワッフルを明日また売り歩いていいですか」と聞いてきた。

「おお～ひまわり製菓より上手の商売人がここにもいた～！」

というと、歩美さんは大笑いしていた。

(第6話完)



## その1 方向音痴の女 直美

---

「小説 スーパーの女性たち」 1話～10話

<http://p.booklog.jp/book/102965/read>

「愛の人妻ウォッチング」 1話～10話

<http://p.booklog.jp/book/102977/read>

「京都歴史裏の小説」 1話～8話

<http://p.booklog.jp/book/102990/read>

## その1 方向音痴の女 直美

珍しく夜の7時過ぎに散歩をしていた。西大路十条の交差点でスマホを手に持った女性から道を尋ねられた。昼間でも就活の女子学生からよくこの道をきかれるが、こういう場合はすべてが正反対の道を間違えて歩くようだ、この女も方向音痴で「ローム本社」行きたいという。私は、「ほらほら、また正反対に歩いている、ローム本社は来た道を引き返すの...」  
「はあ～そうですか、それでここから何分ほどかかりますか？」  
「まあ～25分から30分ほどです」

そして私も帰り道だったので色々話をした。その女は3日の休暇をもらって京都に来た、ホテルは京都駅の上でロームのイルミネーションを見ようと電車に乗ったが、それが新快速で高槻まで行ってしまった。急いで普通に乘って西大路駅まで来たが、さらに反対に歩いたという。西大路九条まで来て、私は家がここですからという女は、  
「私...心細いから一緒に付き合って」  
「いやいや、ロームのイルミネーションは毎年見ている、それに私はもう酒を飲む時間で...」  
「あら～私もお昼食べたきりで、お酒も付き合います」  
「いやいや、私の酒というのは居酒屋ではなく家で安い焼酎を飲むのです」  
「あら、焼酎があればいいじゃないの...」

それならと汚い我が家で焼酎を飲むことになった。この女は直美といい37歳だという。その直美さんは「私...恥ずかしいのだけど...ローム東京本社の社員ですの～」。直美さんは東京の大学を卒業してロームに入社した、研修や会議で何回も本社にきているがいつも京都駅からタクシーだったそう。そして勤めて15年になるが、来年の春から課長に異例の若さで抜擢されている。今は係長だがそれでも責任が重くてストレスで潰されそう、この上に課長となると気が重いという。もしこれを断ると左遷されるのが目に見えている、少し考えさせてほしいと3日の休暇をもらったそう。

たしか～5～6年ほど前になるがロームでもリストラの嵐が吹いて3500名ほどが職場を去った。私の友人もそれで退職したが、ロームのイルミネーションを絶対見に行かないといって

いた。また女性の友人はリストラは免れたが、60歳の定年を独身で迎えたことを後悔していた。直美さんも、

「そう、そこなのよ～私ももう37歳、今から恋人を探して恋愛して結婚しても子供は無理になる。私の課長も55歳の独身女性だけど、どんなにお洒落をしても体型は老婆の域にはいつているの、仕事に疲れて休みの日は寝るだけだって」

「そうか～老婆の休日で直美さんの今回の旅行もロームの休日やな～」

と、こんなアホな駄洒落を飛ばしたが、これが直美さんの笑いの壺にハマッタのか涙をだして大笑いしている。私はさらに、

「企業の闘志として女性を持ち上げるだけ持ち上げて会社の命令に従わないと左遷と脅かす企業は一流ではない。能力を絞るだけ絞っておいて、その引き換えに女性としての幸せが...こんな考えは今ではもう古いが、男女同権とはこんなことではない」

「そう、私もそこが頭にあって...」

「でも、直美さんの人生は直美さんのものだから、自分で決めたら」

「あらら、伊奈利さんってけっこう冷たいのね？」

そして2人の宴会が終わって私は直美さんをホテルまで送ることになった。直美さんは部屋で朝まで飲み明かそうというので部屋に入った瞬間に抱きついてきた。そして耳元で、

「もし、今夜、妊娠したら課長を断る、もし妊娠しなかったら課長を承諾しますから、伊奈利さん責任は重いわよ...」

「妊娠は1%の可能性もないわ...」

「どうだか～1%もあれば春までに100回すれば100%よ～それに～私の15年間のHを取り返すの」

「女というのは方向音痴だが、人生の方向は間違えないでよ～」

「あらら、方向音痴だったから、こうして伊奈利さんと...」

(その1完)

## その2 女装イナコの初夜 織枝

---

### その2 女装イナコの初夜 織枝

J R西大路駅周辺には一部上場会社の本社が5社もある。私がいつもモーニングに行くパン喫茶もこれらの企業のOLらがよく来る、時間もほとんど同じだから顔なじみになる。その中でフラワーという会社の森織枝さんがコーヒーを飲みながらため息をついている。私が、

「あらら、女のためいきなの～森進一やな～」

「イ、伊奈利さん～ちょっと聞いてよ！」

この織枝さんの彼氏は三つ年上の30才だという。この彼氏とは1年ほど前に合コンで知り合って結婚を意識しているが、その彼が今日のフラワーランジェリーの社内販売で妹のブラやパンティーを買ってくれとっているという。

「ああ～もう朝から行列ができています。なんでもパンツが300円、ブラも500円という格安だと聞いている」

「そう、それだけ～サイズがとても大きいので電話で確認するとそれでいいからピンク、ブラックなど数枚を買ってくれというの...」

「妹さんは太っているの？」

「それは会ったことがないからわからないけど～他の女の物かな？」

そしてこの話の続きは駅前の居酒屋「ポン吉」ですることになった。織枝さんは彼氏の命令でブラとパンツを買ってもってきている。私はそれを見せてもらって、

「いや～セクシーでいい、で、彼氏と連絡がついた？」

「それより彼のお母さんに電話して妹さんのことを聞いたら、彼には妹がいないって...それで彼に電話したら、彼、自分のものだと言ったの」

「ふむ...彼って女装が趣味なの？」

「そうなの～だから私はもう縁を切ると宣言したわ...」

「でもね織枝さん、世の中には色々な性癖や趣味があってそれを認めていかなければならない場合もある」

「それだけではないの、彼とのHでも彼は彼の乳首を感じるからと私に小一時間も愛撫をねだるの...それがうっとおしくて、ちょうどよかった別れる口実ができたと言っているの」

「はあ～そんなものなのね男と女って、それよりその大きい目のブラとパンティーはどうするの？」

「伊奈利さんほしかったらあげるよ！彼女は大きいなの？」

「いや～彼女ではなくって...あの～その～」

「えっ、まさか～伊奈利さんも女装が趣味なの？」

「いや～まだ経験はないが一度したいと思っている」

「それで～彼氏のことを擁護したの？」

その織枝さんはどうしても私がブラとセクシーパンティーを着けているのを見たいといっている。私は、

「織枝さんに誓って言うが、私はこんなことは初めてでたまたま天から降ってきた話なので身に着けたいと思っただけ...まだ女装が趣味とはいえない...」

「なにをいってるの...男らしくないよ！」

といいながら我が家まで強引について来た。織枝さんは私に命令口調で、

「はい、下着を脱いで、下もよ~そうスッポンポンになって」となかなかの手際がいいのでフラワーの中で仕事は何をしているのと聞くと、

「私は男性用の下着のデザイナーでいつも男性の裸は見慣れている」

そして織枝さんに着せてもらったピンクのブラとセクシーパンティーの似合うこと似合うこと、思わず、

「いゃん~恥ずかしいわ~ホホホ」とオネエ言葉になっていた。そして気分もHに...織枝さんもそんな気分になったのか？2人は自然に抱き合っていた。私が女装イナコになって初めての初夜になった。

### その3 薬剤師の婚活 詩音

---

#### その3 薬剤師の婚活 詩音

イオンの中の薬局で風邪薬を探していたら「健康シューズ」という靴を発見した。なんでもこの靴は歌手の西条秀樹が脳梗塞で倒れた後のリハビリに軽くて柔らかい靴はないかと本人が監修したという效能書きがあった。ところが売れなかったのか？定価5980円のところ1980円の特売であった。試しに履いてみると軽くてなんら普通の靴と遜色はない。そこで2足買おうと色を物色していたら薬剤師の女性が声をかけてくれた。

「もし寸法が合えば絶対にお得です。私も定価で買って父に履いてもらったらもう1足ほしいとっていましたから」

「そうですか〜」といって2足買ったなら試供品のチオビタ栄養剤を2本くれた。

それから数日してこの靴で散歩していたらこの薬剤師さんに声をかけられた。

「お客さん〜どうでした？」

「ええ、具合がいいのでもう1足買いに行ったがもう合う寸法はありませんでした」

薬剤師と話をしながら駅の方に歩いていたら居酒屋「ボン吉」の前でママに見つかってしまった。なにせこのママはサラリーマンの退勤時間になったら店の前をウロウロして知り合いを見つけたら強引に店に誘う特技があった。私も強引に口説かれて店に入ったがなぜかこの薬剤師さんもついてきた。この薬剤師さんは詩音さんといひフランス人の父と日本人との母のハーフでそのせいか背はスラリと高く色は真っ白の美人で31歳だという。

しかし、話し方はベタベタの京都人でフランス語のなまりなどはどこにもない。詩音さんはやはりワインが好きなのかなんの遠慮もしないでガバガバ飲んでいる。ほど良く酔った頃に、

「伊奈利さん、あの店には処方箋の調剤で入ったが、そんなものは数えるほどでほぼ1日薬や衛星用品の陳列作業やレジばかりなの...」

「それでも薬剤師募集では時給2500円〜2900円とあるよ〜」

「そら〜まあね〜高給だけど...それも良い悪しなの...」

詩音さんも婚活を少し焦っているようで色々な合コンには顔を出しているという。私の相手というのはほとんどが10年ほど前に大学を卒業したサラリーマン、その頃は不景気で初任給も低く昇給もなかった、ところが今年の大卒の初任給は20万円ぐらいになっている。それだと10年前に入った社員とはほんの2万円ぐらいしか差はなく手取りでも17万円ぐらいだといひている。これでは詩音さんのほうが倍ほどいいことになる。詩音さんはそんなこと気にしないから付き合おうといひても男性の方が萎縮してしまうそうだという。

そこでママが口を出してきた、

「私は男は昼間は稼いで夜は女を満足させる男しか相手にしない、とはいってもこれがなかなか現実にはいないのよね～」詩音さんは、

「私はその反対で昼は私が稼いで夜は私がサービスしたいの、なんていうか～ドSなのよ」

「それって～ドM伊奈利ちゃんの求める理想像ではないの？」

こうして楽しい時間を過ごしてママにチェックサインをするとママは、

「はい、もう詩音さんからいただいています、それに伊奈利さんのワインのボトルも入っています。それにタクシーももう来ます」

「えっ、なんでタクシーなの？」

「伊奈利ちゃん～相変わらず鈍感ネ」

こうして南インターのラブホテルに入った。私は詩音さんに、

「あそこのママは客のおごりだとガバガバ飲む癖があって相当高くついたのでしょ、それにワインまでありがとうございます」

「それはいいんだけど～ママさんが今夜だけ伊奈利さんを貸してあげるといっていたけど...どういう意味なの？」

「いやいや、それは～その～あの～」

(その3完)



その4 ハメラレタ看護師 美樹

私はもう2年ほどある病院の眼科に通っている。診察は1ヵ月半に1回ぐらいだが妙に気が合う看護師さんがいる。この看護師さんは1年ほど前からこの病院に勤めているからまだ6回ぐらいの会話でしかも時間はほんの2分ほど、話も途中で終わるが次の診察の時にはその話の続きができるから不思議なものだ。

その6回のお話をまとめればこの看護師さんは吉川美樹さんで27歳、岡山の山奥で育って岡山市の看護学校を卒業して岡山市内の病院に勤務していた。そして2年前に友人の紹介で今の旦那と出会いそのまま結婚した。たまたま彼が京都の会社の出向で岡山にいた、そして本社に戻ってきたので京都で結婚式をして京都のこの病院に勤務したという。それが1年前のこと、

私は美樹さんに、  
「ほな、まだ新婚さんや～毎日が楽しいやろ～」  
「ううん、旦那に気ばっかし使ってなんも楽しくない。料理に文句ばっかしいうし」  
「旦那はサラリーマン？」  
「そう、普通の～ああ～やっぱりドクターを捕まえたかった...それに私～彼を紹介してくれた友人にハメラレタの...」  
と、ここまで話をした時に診察室に呼ばれた。その続きは一ヶ月半先になる。

それが昨日の昼、私が「ほっともっと」で弁当を買っているとその看護師さんも弁当を買いにきた。その時はナースの白衣ではなかつたので気がつかなくかつたが、美樹さんの方から声をかけてくれた。聞けばこの店の上のマンションに住んでいるという。そうそう、伊奈利さん、この前の話の続きを聞いてくれというが、私は、  
「今日は日曜日で旦那は？」  
「旦那は岡山に出張しているの...そのお弁当を私の家で食べない？」

私は人妻が大好きだがまだその人妻の家での不倫行為の経験はないので少し躊躇していたら、美樹さんが先に歩き出した。やむを得ず部屋に入って2人で弁当を食べていた。美樹さんは、  
「私ね～そのころ好きなドクターがいてどうしても捕まえようと努力していたの、ドクターが忙しくてなかなかチャンスがなかつた。そんなころ友人の看護師が今の旦那を無理矢理紹介してくれたの、なぜかその彼はやさしくてお酒を飲まされて2回目のデートで処女を奪われたの。私は古い女の考えでこの人と結婚しなければならないと思ってしまったの」  
「それで彼は...やさしくなかつたということやな～しかし、これはよくあることで...」  
「ううん、違うの、この彼を紹介してくれた看護師も同じドクターが好きでそれで私をドクター

から離そうと彼と組んだ芝居だったの、これは最近彼から聞いたの...それに腹が立って...」

「それで、その岡山のドクターと友人の看護師は？」

「それが今日、2人の結婚式で旦那の会社は製薬会社ですから披露宴に...」

「ほう～美樹さん見事にハマれましたな～」

それで私の両親とも相談をして離婚することになったという。美樹さんは、  
「離婚しても京都の病院に勤務します。それと私まだ京都観光をしたことがないの、お寺や歴史に興味あるから伊奈利さん案内してくれる？」

「そら～よろこんで～これでも観光ガイドブックを書いたことがある」

そして美樹さんは、

「今ごろ、好きだったドクターの結婚披露宴が...なんともやるせないよ～伊奈利さん」

「そんなことはほっといて美樹ちゃんの離婚式と披露宴を今日ここで同じ時間にすればいいのよ～そして、今の病院で若いドクターを捕まえるという結団式もやろう～」

「そうね～実は、私、もう眼科の独身のドクターにデートを誘われているの...」

そして私と美樹はしっかり抱き合い心も体も結団したのです。そしてその後の彼との離婚成立の話とドクターとのデートの話は私が次に診察に行く12月16日に聞けます。その話もここで書きますからお楽しみに！？（その4話完）

小説 働く女性たち その5 痛風と薬剤師 香奈

3カ月前突然に左足の関節が痛くなり歩けなくなった。それでかかりつけ医院にいくと痛風と診断された。血の検査では尿酸値8、1でこれが6、0以下になるまで薬を飲むことになった。先生は、

「尿酸は重たいので足の骨にこびりついている、これが炎症を起こすのだが、これを除去するには毎日1錠の薬を3年ほど服用する。3ヶ月に1回血の検査をして効果がなかったら2錠に増やす」といわれてから3ヶ月が経ち血の検査をしたら、それが見事に5、2まで下がり正常値になった。

この痛風は別名贅沢病という名前があり食べ過ぎ飲み過ぎが原因だという。そしてビールのプリン体が悪いというのでビールはやめたが、このビールというのはイオンの第3のビールで韓国産のことだ。この日からただちにやめて焼酎を飲むことになった、それに大好きな干物やレバー系も食べないという食事療法の効果かもわからない。

そして次の朝ふと思った、いつもは薬を飲むが尿酸値が正常値になったが、それでも飲み続けるの？そこでイオンの薬局の知り合いの詩音さん（第3話の女性）に聞こうと薬局にいったが、詩音さんは休みだった。そこで別の女性が何か伺うという、私はお薬手帳と検査報告書を見せて事情を話した。すると、

「薬は医師の指示通り服用して、もし副作用やおかしなことがあれば医師に相談してほしい、薬剤師としてはこれ以上は応えられません」

というので私は、

「いやいや、そうではなく一般的な話でたとえば風邪薬を100錠買ったが、50錠目で咳も鼻水も治った場合、その薬をただちにやめた方がいいのか、それとも3日ぐらいは飲んだ方がいいのかの世間話のようなもの！」

「そんな仮の話にはお応えできません」

「あんな...メリケン粉を丸めた偽薬でも説明の仕方ではガンにも効果がある。お前らみたいに勉強だけできて薬剤師になった人間に人の病気を治せるのか？なんで時給が2500円も3000円ももらえるのかを勉強しろこのドアホ！」という、彼女は5秒ほど目を点にした後に大粒の涙をポロポロこぼしながら、

「お客さま、大変失礼をしました」と肩を震わして謝っている。

周りの薬剤師や職員、それにイオンのガードマンまで飛んできてその薬剤師を慰めているが、目は全員私をにらんでいる。私も少し言い過ぎたと思いながら家に帰って酒を飲んでみると、詩音さんから電話があった。

詩音さんは、

「伊奈利さん、実はあの娘は大病院チェーンの会長の孫でお嬢様なの、それで彼女から電話があって伊奈利さんにぜひ謝りたいとイオンで待機しているの...どうする...」

「どうするもこうするもこっちが悪者だから...」

「いや、ところが伊奈利さんの一言で目が覚めたと、そうその娘、25才で香奈というの、香奈ちゃんはまだ親はもちろん誰にも説教されたことなどないので相当ショックだった見たいよ〜」

「だから、もうそっちで処方してよ、それにそんなお嬢さんをどうこうはできないし...」

「あら、私だからどうこうしたの〜失礼しちゃうわ...と、いいたいとこだけど、聞けば香奈ちゃん、大学時代は相当遊んでいたようよ〜伊奈利ちゃん〜やっちゃえ、やっちゃえ、それに〜もう、伊奈利さんのマンションの前にいるようよ!」

「えっ?誰が教えてたの?」

「ワ・タ・シ」

それと同時に玄関のチャイムが鳴った。

(その5話完)

この双子の電動ロボット人形を製作したのは世界的にも有名な彫刻家の百海善市朗氏です。姉は八ッ橋の老舗のおたべ本舗の看板娘おたべちゃんとして養女になりました。妹のほうは吉祥院天満宮の養女になり巫女ちゃんとして巫女さんをしていました。しかし、この姉妹が別れ別れになったのはまた1歳の時でしたから双方とも覚えてはいません。それにおたべちゃんにも巫女ちゃんにも養女先の両親からこのことを教えてもらわなかったのです。

ところがある日、おたべちゃんがなにげなしにネットサーフィンしていると偶然にも私のこのブログにたどりついたのです。そこにはおたべちゃんとそっくりな「巫女ちゃん」の画像があったのです。

おたべちゃんは一瞬「へ～私いつ巫女さんの衣装を着たのかしら？」～たしかにテレビ出演やCMの撮影で色々な衣装は着たことはるが...巫女さんだけは～と首をかしげていました。そこでその画像を掲載していた私におたべちゃんから、

「伊奈利さん、私の両親は否定していますが、わたしはどっかに私の双子の妹がいると信じています。どうか写真の巫女さんの神社を教えてください」というメールが来たのです。

しかし、そんな大事なことを他人の私がおせっかいしてもなんだと今度はおたべ本舗の社長さんにメールでこのことをお知らせしました。するとすぐに返事があって「伊奈利さんにおまかせすると」なったのです。早速私は吉祥院天満宮に行きました。神社では明日のお正月の準備で大忙しだったが、宮司さんの配慮で私と巫女ちゃんを吉祥天女のお堂で会わしてくれました。

私は巫女ちゃんに、

「実は巫女ちゃんには双子のお姉さんがいるのです。そのお姉さんは八ッ橋のおたべちゃんです有名なおたべちゃんです」

「へえ～やっぱりネ...いつもお参りに来た人が私のことをおたべちゃんに似ているといていたから...」

「それで～お姉さんはぜひ妹の巫女ちゃんに会いといっているが、いかがです...巫女ちゃん？」

私はそれより前におたべ本舗の本社に行っておたべちゃんの写真を撮っていたからそれを手渡していた。おたべちゃんは、

「いゃん～ほんまや、これって舞妓さんの衣装と巫女ちゃんの衣装の違いだけでまったく双子やないの～すぐ会いたい～」

と、喜んでくれたのはいいが、明日からお正月で神社は大忙し、一方のおたべちゃんのほうも観

光客の接待で猫の手も借りたいほど忙しい。しかし、もっと難しい問題があります。それは2人とも電動ロボットの人形ではあるが、歩けないようになっている。

「伊奈利さん～どうすればいいの～！」

とりあえずなんか考えるからお正月の松の内が明けるまで待つてほしいということでまだこの2人は会ってはいません。この姉妹は偶然にもかなり近くに住んでいたのです。おたべちゃんは国道十条のおたべ本舗、巫女ちゃんは吉祥院天満宮ですから車ならほんの2分の距離、巫女ちゃんは2月の上旬まで巫女さんとして働いています。会うのであれば観光客も多いおたべ本舗のほうがいいです。

そこでテレビ、雑誌、新聞社の方々に訴えます。どうかこの双子の姉妹のご対面の番組、記事などの企画をしていただけないでしょうか？また、この双子の実家でもある、百海善市朗さんの工房もこの近くにありますが海外で賞を獲得した作品も紹介できます。それがおたべちゃん、巫女ちゃんのルーツだとしたら、このおたべちゃんの人形は世界的にも有名になるかもわかりません。そしてこれを紹介した私も有名になって小説が売れる初夢になるかも...いつもなら少しゆるいH小説になるが、なんせ京都のアイドルをそんな風には書けない、だから今回の小説はお正月バージョンとします。

(その16話お正月バージョン完)

関連記事及びおたべちゃん、巫女ちゃんの画像は↓をクリック

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11208794293.html>